

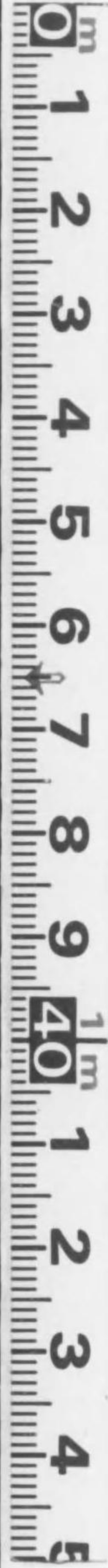
375-42



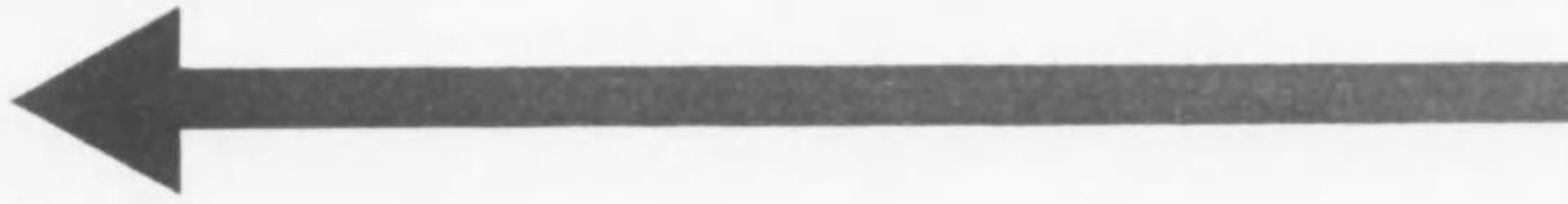
1200501451224

275

-2



始



221



R



外史



375-42
~~543-100~~

日本外史 下 目次

| | | |
|-----|-------|----|
| 卷十二 | 足利氏後記 | 一 |
| | 毛利氏 | 一 |
| 卷十三 | 德川氏前記 | 九 |
| | 織田氏上 | 九 |
| 卷十四 | 德川兵前記 | 一五 |
| | 織田氏下 | 一五 |
| 卷十五 | 德川氏前記 | 二五 |
| | 豐臣氏上 | 二五 |
| 卷十六 | 德川氏前記 | 三五 |
| | 豐臣氏中 | 三五 |

目次

| | | |
|------|-------|----|
| 卷十七 | 德川氏前記 | 四〇 |
| | 豐臣氏下 | 四〇 |
| 卷十八 | 德川氏正記 | 五五 |
| | 德川氏一 | 五五 |
| 卷十九 | 德川氏正記 | 六三 |
| | 德川氏二 | 六三 |
| 卷二十 | 德川氏正記 | 六八 |
| | 德川氏三 | 六八 |
| 卷二十一 | 德川氏正記 | 七七 |
| | 德川氏四 | 七七 |

卷二十二

德川氏正記

德川氏五.....九五

——日次終——

Table of contents for Volume 22, listing various entries and their page numbers.

Table of contents for Volume 22, listing various entries and their page numbers.

日本外史 卷十二

足利氏後記

毛利氏

毛利氏。出於大江廣元。廣元十一世祖。曰本主。姓土師氏。爲備中。介。本主。生。音人。音人。歷。和之。仁。明。清。和。之。間。至。從。三位。左。大。辨。賜。姓。大。枝。氏。後。更。大江。與。菅。原。

毛利氏は大江廣元より出づ。廣元十一世の祖を、本主と曰ふ。姓は土師氏、備中、介と爲る。本主、音人を生む。音人、仁明・清和の間に歴仕して、從三位、左大辨に至る。姓を大枝氏と賜ふ。後に大江と更む。菅原氏と、並に學政を掌る。音人、千古を生む。千古の後七世を、匡房と曰ふ。文武才略有り。源義家に教ふるに陣法を以てす。匡房の曾孫を廣元と爲す。廣元、源頼朝を關東に佐けて、之をして天下に霸たらしむ。其薦を以て安藝介と爲り、因幡守に遷り、正四位下、大膳大夫に至り、陸奥守を兼ね。源氏、北條氏の際、幕府の元老と爲

氏重掌學政。昔人生千古。千古之後七世。曰匡房。有文武才略。教源義家。以陣法。匡房曾孫爲廣元。廣元

佐源賴朝。子關東。使之。天下。以其薦。爲安藝介。遷因幡守。至正四位下。大膳大夫。兼陸奥守。源氏北條氏之際。爲幕府元老。數定大難。有五子。長子親廣。承久之役。屬官軍。不知所終。第三子曰季光。爲左近衛將監。食相摸毛利莊。因氏焉。娶三浦氏。死於其難。

季光子經光。出鎌倉。居越後南莊。經光子時親。復起爲六波羅評定衆。足利尊氏滅六波羅。加賜時親。以

り、數々大難を定む。五子有り。長子親廣は、承久の役に官軍に屬して、終る所を知らず。第三子を季光と曰ふ。左近衛將監と爲り、相摸の毛利莊を食む。因りて氏とす。三浦氏に娶りて、其難に死す。

● 二代の天子に仕ふ ● 學事に關する事務 ● 千古・維持・重光・匡衡・學問・成衡・匡房 ● 文學武藝に長じ、才智謀略あり ● 推薦 ● 大なる災難を治定す

季光の子經光、鎌倉を出でて、越後の南莊に居る。經光の子時親、復た起ちて六波羅の評定衆と爲る。足利尊氏、六波羅を滅して、時親に加賜するに、安藝の吉田、及び河内の利田を以てす。時親、貞親を生み、貞親、親茂を生む。親茂、三子師親・匡時・直衡有り。皆新田義顯に隸す。義顯足利氏の將高師泰の滅す所と爲る。貞親以下猶ほ官軍に屬す。獨り師親去りて師泰に屬す。師泰の石見

安藝吉田。及河内利田。時親生貞親。貞親生親茂。親茂有子師親。匡時。直衡。皆隸新田義顯。義顯爲足利氏將高師泰所滅。貞親以下猶屬官軍。獨師親去。屬師泰。師泰之攻石見。敵阻劫川。師親與高橋某。先衆亂流。拔三城。以功盡食吉田邑。及師泰敗。屬山名時氏。迎親茂及二弟。共居焉。足利氏令武田氏吉川氏攻降之。師親生廣房。廣房生光房。光房子熙房。嘉吉之役。攻蟹坂。有功。熙房子豐元。應仁之役。與小早川氏守相國寺。有功。

を攻むるや、敵、劫川を阻む。師親、高橋某と、衆に先んじて流を亂りて、三城を抜く。功を以て盡く吉田の邑を食む。師泰敗るゝに及びて、山名時氏に屬し、親茂及び二弟を迎へて、共に居る。足利氏、武田氏・吉川氏をして、之を攻め降さしむ。師親、廣房を生み、廣房、光房を生む。光房の子熙房、嘉吉の役に、蟹坂を攻めて、功有り。熙房の子豐元、應仁の役に、小早川氏と、相國寺を守りて功有り。

● 増し興よ ● 石見國は在る江の川 ● 精切る ● 一本に師元とあり

豐元生弘元。

豐元、弘元を生む。弘元の子を興元と曰ふ。次を松壽と曰ふ。松壽、幼より器

弘元之子曰三
興元。次曰三松
壽。松壽幼有
器量。其保嘗
抱之。濟水而
眼。保惶懼
謝罪。松壽曰。
行道而蹟。常
也。庸何傷。比
髻。既詣嚴島
神祠。既歸。問
從者曰。汝輩
何祈。曰。祈三
君。主安。壽也。
松壽曰。汝盍
祈吾主天下。
夫願主天下。
者。能主一方。
願主一方者。
能主一國。今

量有り。其保嘗て之を抱きて、水を濟りて蹟き溺る。保、惶懼して罪を謝す。松壽曰く、道を行きて蹟くは、常なり。庸何んぞ傷まんと。髻に比びて、嚴神島祠に詣づ。既に歸りて從者に問ひて曰く、汝が輩、何をか祈れると。曰く、郎君の安藝に主たらんことを祈ると。松壽曰く、汝盍ぞ吾が天下に主たらんとを祈らざる。夫れ天下に主たらんと願ふ者は、能く一方に主たり。一方に主たらんと願ふ者は、能く一國に主たり。今一國に主たらんと願ふ。其の成る所知る可きのみと。聞く者、之を奇とす。興元、既に嫡嗣たり。松壽出でて丹比氏に養はる。永正八年、首服を加へて、元就と名づけ、少輔次郎と稱し、猿掛城に居る。邑七十五貫を食み、士卒三百を養ふ。會々明の使者、京師に來聘して、路に吉田を經。善く相する者朱良範從ふ。元就往きて良範を見る。良範曰く、公は漢祖、唐宗の相を兼ね。必ず威を四方に宣べんと。元就、心に自負す。元就、人と爲り隆準肉角、音吐甚だ洪いなり。麾下に在りて、士卒に號令するに、聲諸隊に

聞ゆ。

- 守役 ● あそれいる ● 七八歳の小兒 ● 成功の程度の小なるは明らかなり ● 後柏原天皇の年號
- 元服 ● 備中國に在り ● 漢の高祖劉邦、唐の太宗李世氏。共に建國の英主 ● 邑の高きこと ● 國の骨の高きこと

願主一國矣。其所成可。知已。聞者奇之。興元既爲嫡嗣。松壽出養於丹比氏。永正八年。加首服。名元就。稱少輔次郎。居猿掛城。食邑七十五貫。養士卒三百。會明使者來聘。京師。路經吉田。善相者朱良範從焉。元就往見良範。良範曰。公兼漢祖唐宗之相。必宜威於四方。元就心自負焉。元就爲人隆準肉角。音吐甚洪。在麾下。號令士卒。聲聞於諸隊。

十四年、安藝の守護武田元繁、佐東銀山に據りて、將軍の命を矯めて、國內を攻略す。十月、有田城を攻む。城は吉川經基に屬す。經基、興元と善し。是の時、皆京師に在り。元繁、中堰に柵して、熊谷元直をして守らしむ。別に千騎を遣して、猿掛城下を焚かしむ。元就、二百人を以て出で戦ふ。利あらず。吉田の兵、急を聞きて來り援ふ。元就、乃ち兵五百を分ちて、元繁の援路に備へ、而して千人を以て疾く元直を攻めて、破りて之を斬る。元繁、兵を遣して來り援

櫛子中堰使
熊谷元直守
焉。別遣千騎
焚猿掛城下
元就以二百
人出戰不利
吉田兵聞急
來援元就乃
分兵五百備
元繁援路而
以千人疾攻
元直破而斬
之。元繁遺兵
來援不及乃
留一將當有田
挺前濟水我
元就遂并領
七年興元卒

はしむ。及ばず。乃ち一將を留めて有田に當らせ、自ら四千騎に將として來り
戰ふ。元就、吉田の將志道廣好をして、兵を潛めて敵の背に出でしめて、夾み
撃ちて之を破る。元繁挺んで前みて水を濟る。我が兵射て其胸を洞く。其兵皆
潰走す。乃ち捷を京師に報ず。大内義興、足利氏の管領たり。爲に請ひて元
就を褒賞す。元就、遂に武田氏の邑八千餘貫を并せ領す。經基妻はすに其孫
女を以てす。元繁の子光和、猶ほ銀山に據りて下らず。十七年、興元卒す。子
幸松嗣ぐ。外祖父高橋久光、元就と並びて之を輔く。

●安藝國佐伯郡東部の銀山 ●安藝國に在り ●同上

留一將當有田。自將四千騎來戰。元就令三百田將志道廣好潛兵出敵背。夾擊破之。元繁
挺前濟水。我兵射其胸。其兵皆潰走。乃報捷京師。大内義興爲足利氏管領。爲請褒賞
元就。元就遂并領武田氏邑八千餘貫。經基妻以其孫女。元繁子光和。猶據銀山不下。十
七年興元卒。子幸松嗣。外祖父高橋久光與元就並輔之。

大永三年。久
光父子。與備
後三吉某戰
而死。元就赴
援。撫其遺臣。
并其邑萬餘
貫。六月。出雲
國主尼子經
久。攻大内氏
將藏田信房
于鏡山。元就
率幸松爲先
鋒。陰誘信房
叔父某。某斬
信房。出降。被
誅。經久。本六
角氏。其祖父
持久。爲伯父
高詮。幹國事。
至於經久。滅

大永三年、久光父子、備後の三次某と戦ひて死す。元就赴き援ひて、其遺臣を
撫して、其邑萬餘貫を并す。六月、出雲の國主尼子經久、大内氏の將藏田信房を
鏡山に攻む。元就、幸松を奉じて先鋒となり、陰かに信房の叔父某を誘ふ。某、
信房を斬りて出で降る。誅せらる。經久は、本六角氏なり。其祖父持久、伯父高
詮の爲に國事を幹す。經久に至りて、鹽冶某を滅して、富田城を取り、轉じて
山陰の諸國を略し、南に兵を出して、大内氏を侵す。大内氏は、世々周防の山口
に居り、太宰大貳と爲り、關西に雄長たり。是の時、大内義興京師に在り、
變を聞きて馳せ歸る。是より連年攻戰す。石見・安藝の豪族、其間に介立して、鬪
背常無し。獨り毛利・吉川・武田氏、常に經久に附く。

●後柏原天皇の年號 ●周防國に在り ●支配す ●出雲國に在り ●強きこと第一たり ●中に決
る ●常に反服す

鹽治某。取富田城。轉略山陰諸國。南出兵。侵大内氏。大内氏世居周防山口。爲太宰大貳。雄長關西。是時。大内義興在京師。聞變馳歸。自是連年攻戰。石見安藝豪族。分立其間。嚮背無常。獨毛利吉川武田氏。常附經久。

七月。幸松病卒。無嗣。家臣聚議。選於羣叔。以元就爲祠。八月。元就入吉田。元就弟就勝。與坂某。渡邊某。謀殺元就。元就覺之。襲殺就勝。及坂渡邊。坂者。桂廣澄兄。志道廣好弟也。乃使人諭廣澄。廣澄曰。不吾以坂故。疑汝也。廣好拜謝。廣澄弗信。自殺。其子元澄。聚族據城。元就單騎往諭。降之。

七月、幸松病みて卒す。嗣無し。家臣聚り議して、羣叔に選び、元就を以て嗣と爲す。八月、元就吉田に入る。元就の弟就勝、坂某、渡邊某と、元就を殺さんと謀る。元就之を覺りて、襲ひて就勝及び坂・渡邊を殺す。坂は、桂・廣澄の兄にして、志道廣好の弟なり。乃ち人をして、廣澄・廣好を諭さしめて曰く、吾れ坂の故を以て汝を疑はざるなりと。廣好は拜謝す。廣澄は信ぜずして自殺す。其子元澄、族を聚めて城に據る。元就、單騎往きて諭し之を降す。

● 多くの叔父 ● たゞ一嗣

四年。五月。大内義興。使其子義隆。與其將陶持長。將二萬人。攻安藝諸城。屬尼子氏者。七月。尼子經久遣兵援之。敗績。八月。元就以部兵四千。夜斫大内氏營。破之。持長解去。七年。元就入京師。任右馬頭。爲幕府相伴衆。

四年五月、大内義興、其子義隆をして、其將陶持長と、二萬人に將として、安藝の諸城の尼子氏に屬するものを攻めしむ。七月、尼子經久、兵を遣して之を援はしむ。敗績す。八月、元就、部兵四千を以て、夜、大内氏の營を斫りて、之を破る。持長解きて去る。七年、元就、京師に入る。右馬頭に任ぜられ、幕府の相伴衆と爲る。

● 部下の兵士 ● 大名中より器量ある者を選び將軍他出の時に伴ふ者

享祿二年。熊谷信直。以事怨武田光和。以高松城來歸。元就。光和怒。攻之。不利。

享祿二年、熊谷信直、事を以て武田光和を怨み、高松城を以て元就に來り歸す。光和怒りて、之を攻む。利あらず。憂憤して死す。香川光景も亦八木城を以て元就に屬して、將に銀山を攻めんとす。銀山の餘衆、終に若狹に奔る。天文四年、元就、光景・信直等二千騎を率ゐて、東備後を略し、高野城を攻む。城

憂憤死。香川光景亦以二八木城屬元就。將攻銀山。銀山餘衆終奔二若狹。大文四年。元就率光景信直等二千騎。東略備後。攻高野城。城將乞授於播磨赤松晴政。未至。元就急攻拔之。并其兵。又徇下數城。

將、援を播磨の赤松晴政に乞ふ。未だ至らず。元就、急に攻めて之を抜き、其兵を并せて、又數城を徇へ下す。

● 後奈良天皇の年號 ● 備中國に在り ● 安藝國に在り

先是尼子經久逐子興久。殺之。立孫晴久。晴久遇元就亡狀。大内義興病卒。於享祿元年。遣言義隆曰。元就與晴久有郤。宜以是時奪爲我援。慎

是より先、尼子經久、子興久を逐ひて、之を殺し、孫晴久を立つ。晴久、元就を遇すると亡狀なり。大内義興、病みて享祿元年に卒す。義隆に遺言して曰く、元就、晴久と郤有り。宜しく是の時を以て奪ひて我が援となすべし。慎みて其驕心を失ふ勿れ。吾れ嘗て彼に徳す。彼れ豈に之を記せざらんやと。陶持長、遺命を奉じて、百方、好を通ず。元就終に之に應じて、國內の諸城の晴久に屬する者を攻め下す。晴久、大に怒り、親ら來りて之を討たんと欲す。經久曰く、元就、材武にして善く兵を用ふ。未だ力を以て取る可からざるなり。先づ備後。

勿失其驕心。吾嘗徳彼。彼豈不記之。陶持長奉遺命。元就終應之。攻下國內諸城。屬晴久者。晴久大怒。欲親來討之。經久曰。元就材武。善用兵。未可。以力取也。不若先定備後。石見。以形勝制之。經久弟義勝亦諫止之。晴久皆弗聽。吉田城東北有青山。元就患敵陣山上。以瞰城也。會出雲間來入。元就覺之。乃議曰。敵陣青山。吾與穴戶隆家。夾擊之。陣三猪口。則非我利也。隆家元就女婿。守五龍城者也。問者走。報晴久。

石見を定めて、形勝を以て之を制するに若かずと。經久の弟義勝も亦、諫めて之を止む。晴久皆聽かず。吉田城の東北に青山有り。元就、敵の山上に陣し以て城を瞰ふを患ふ。會々出雲の間來り入る。元就、之を覺りて、乃ち議して曰く、敵、青山に陣せば、吾れ穴戶隆家と之を夾み撃たん。三猪口に陣せば、則ち我が利に非ざらんと。隆家は、元就の女婿にして、五龍城を守る者なり。問者走りて、晴久に報す。

● 無法 ● 元就の驕傲を取りそこなうてはならぬ ● 恩を施す ● 手を盡して ● カづくては取られず ● 備後國に在り ● 根のむこ ● 備後に在り

九月。晴久將二騎卒五萬。來陣于三猪口。

九月、晴久騎卒五萬に將として、來りて三猪口に陣す。武田氏の餘黨を助けて、銀山を復す。四近の將帥、晴久の兵威を怖れて、敢て我を援はず。獨り穴

助武田氏餘黨復銀山。四近將帥怖晴久兵威。不致授我。獨尖戶竹原小早川諸族遣兵數百入城。城兵凡三千人。北軍焚掠。城兵輒出擊。走之。晴久叔父國久。部屬精勁。稱新宮黨。忿北軍數。以萬騎來挑戰。元就設二伏。而出戰。敵視我寡。單縱兵而進。路狹。不

戸・竹原・小早川の諸族、兵數百を遣して城に入らしむ。城兵凡そ三千人なり。北軍焚掠す。城兵輒ち出で撃ちて、之を走らす。晴久の叔父國久、部屬精勁なり。新宮黨と稱す。北軍の數、忿るゝを忿りて、萬騎を以て來りて戰を挑む。元就、二伏を設けて出でて戰ふ。敵、我の寡單なるを覩て、兵を縱ちて進む。路狹くして、齊しく進むを得ず。伏兵夾撃して、之を破る。晴久乃ち三柵を宮崎に作り以て城に遁る。大内義隆、陶隆房等を遣して、兵に將として來り援はしむ。天神山に陣す。十年正月、元就、隆房に請ひて晴久に備へ、而して自ら長子隆元と宮崎を攻む。元就進みて二柵を破る。隆房、尼子義勝と、三猪坂に戰ふ。義勝死す。晴久、夜遁る。城兵尾撃して、斬獲多し、銀山の兵も、之を聞きて亦遁る。

● 火を放ちて民財を掠む ● オぐれて強し ● 備後國に在り ● 同上

得齊進。伏兵夾擊。破之。晴久乃作三柵于宮崎。以逼城。大内義隆遣陶隆房等將兵來援。陣天神山。十年正月。元就請隆房備晴久。而自與長子隆元攻宮崎。元就進破二柵。隆房與尼子義勝戰于三猪坂。義勝死。晴久夜遁。城兵尾擊。多斬獲。銀山兵聞之亦遁。

十二年正月、義隆、大舉して富田を攻む。元就、兵二千を以て從ひ、周防の將秋山某と、川を夾みて陣す。四月、河水大に漲る。城兵急に秋山を攻む。元就曰く、吾が祖、劫川を騎渡す。況や此一衣帶水をやと。流を亂りて援ひ撃ちて、之を走らす。七月、義隆敗走す。元就、隊を整へて、徐に退きて南に還る。是の役や、吉川興經、北軍の將十餘人と、晴久に叛きて、周防の兵を導く。已にして復た之に附く。義隆故を以て敗る。

● 一條の小河 ● 尼子氏の軍

十二年正月。義隆大舉攻富田。元就以兵二千從。與周防將秋山某夾川陣。四月。河水大漲。城兵急攻秋山。元就曰。吾祖騎渡劫川。況此一衣帶水乎。亂流授。走之。七月。義隆敗走。元就整隊。徐退南還。是役也。吉川興經。與北軍將十餘人叛。晴久導周防兵。已而復附之。義隆以故敗。

吉川氏。出於於
駿河人吉川
友兼。友兼誅
梶原景時。子
孫以功食安
藝大朝。後十
二世爲興經。
興經娶大鹽
某。其下皆怨。
殺大鹽。廢興
經。誦曰。毛利
右馬與先公
婚。其子皆先公外孫。可養以爲嗣。乃請元就次子元春。入新莊城。奉以爲主。元春弟隆景。亦出爲小早川氏後。

吉川氏は、駿河の人、吉川友兼より出づ。友兼、梶原景時を誅す。子孫、功を以て安藝の大朝を食む。後十二世を、興經と爲す。興經、大鹽某を娶す。其下皆怨みて、大鹽を殺し、興經を廢す。誦して曰く、毛利右馬、先公と婚す。其子は皆先公の外孫なり。養ひて以て嗣と爲す可しと。乃ち元就の次子元春を請ひて、新莊城に入れて、奉じて以て主と爲す。元春の弟隆景も、亦出でて小早川氏の後と爲る。

● 龍愛す ● 元就 ● 安藝國に住リ

小早川氏之
先。出於伊豆
入土居實平。

小早川氏の先は、伊豆の土居實平に出づ。實平、源氏に仕へて、安藝の豊田を食む。後十六世を、正平と曰ふ。正平の子繁平、幼にして明を失ふ。其族黨議

實平仕源氏。
食安藝豊田。
後十六世。曰
正平。正平子
繁平。幼失明。
其族黨議。請
養隆景。妻以
正平女。居沼
田城。於是吉
川小早川並
爲毛利氏羽
翼。人呼曰兩
川。元春稱治
部少輔。豪爽
善用兵。隆景
稱左衛門佐。
美姿儀。沈斷
有謀慮。皆類
元就。元就以
元春未三有仇

して、請ひて隆景を養ひ、妻はすに正平の女を以てす。沼田城に居る。是に於て、吉川・小早川、並に毛利氏の羽翼となる。人呼びて兩川と曰ふ。元春は治部少輔と稱す。豪爽にして善く兵を用ふ。隆景は左衛門佐と稱す。姿儀に美しく、沈斷にして謀慮有り。皆元就に類す。元就、元春の未だ仇儼有らざるを以て、兒玉就忠をして、密かに其意の鬪ふ所を問はしむ。元春曰く、吾れ熊谷信直の女を得んと欲すと。就忠曰く、郎君、其美を謬り聞く無きを得んや。彼女醜惡、匹無し。君必ず之を悔いんと。元春晒ひて曰く、然り。吾れ素より其醜を知る。抑々古の名將、女色を以て其勇を失ふもの多し。人取らずして吾れ之を取る所以なり。人取らずして我れ之を取る。信直必ず感喜して、吾が爲に死力を出さん。此間の將卒、孰か信直の右に出づる者ぞ。吾れ之と鋒を聯ねて、以て家君の先と爲らば、向ふ所摧き破らざるは無きのみと。就忠、慚服して、元就に告げて之を娶らしむ。信直果して大に喜ぶ。毛利氏の兵鋒益々鋭し。

儼使三兒兒玉就忠密問其意所繫。元春曰。吾欲得熊谷信直女。就忠曰。那君得無謬聞其美乎。彼女醜惡無匹。君必悔之。元春曰。然。吾素知其醜也。抑古名將多以女色一失其勇。所以人不取而吾取之。人不取而吾取之。信直必感喜。爲吾出死力。此間將卒。孰出信直右者。吾與之聯鋒。以爲三家君之先。所向無不摧破耳。就忠慚服。告元就娶之。信直果大喜。毛利氏兵鋒益銳。

- 百日となる
- 安藝國に在り
- 左右の助けとなる
- ナぐれて強く心のさつぱりとしてゐること
- 風采
- 藉附きて決斷に當む
- 配偶
- ぶきりやう此上なし
- 兵鋒を並べて
- 恥ぢ入り

十七年。元就攜隆元。元春隆景。赴山口。義隆養内藤興盛女。妻於隆元。使下附隆房。與元春約爲兄弟。義隆性文弱。山口多延。臣避亂。

十七年、元就、隆元・元春・隆景を攜へて、山口に赴く。義隆、内藤興盛の女を養ひて、隆元に妻はす。陶隆房をして、元春と約して兄弟たらしむ。義隆、性文弱なり。山口に廷臣の亂を避くる者多し。而して明人、常に互市す。義隆、詠歌に耽り、梵譯を學び、復た武事を問はず。陶持長、嘗て之を憂ふ。持長の子義清、幼にして聰敏なり。常に義隆を誹りて曰く、是れ墮落沙門、流竄公卿のみと。持長、其の不臣の志有るを視て、之を藥殺し、更に妹婿問田某の子を養ふ。是

者。而明人常互市焉。義隆耽詠歌。學梵譯。不復問武事。陶持長嘗憂之。持長子義清。幼聰敏。常誹義隆曰。是墮落沙門。流竄公卿耳。持長視其有不臣之志。藥殺之。更養妹婿問田某子。是爲隆房。隆房悍厲。頗得士心。持長已死。隆房與義隆。義隆相良。武任有節。結杉重政。青景。隆時。内藤興盛。謀殺武任。武任怖而遁逃。冷泉隆豐。勸義隆速誅隆房。不聽。隆房伴乞骸骨。歸其邑。若山。日謀反逆。家臣深野康澄。宮川房勝。持長の遺囑を引きて大に練む。聽かず。二臣交々刺して死す。

を隆房と爲す。隆房、悍厲にして、頗る士心を得。持長已に死す。隆房、義隆の嬖臣相良武任と卻有り。杉重政・青景隆時・内藤興盛と結びて、武任を殺さんと謀る。武任怖れて遁逃す。冷泉隆豐、義隆に速かに隆房を誅せんことを勸む。聽かず。隆房伴りて骸骨を乞ひて、其邑若山に歸り、日々に反逆を謀る。家臣深野康澄・宮川房勝、持長の遺囑を引きて大に練む。聽かず。二臣交々刺して死す。二十年八月、隆房、遂に反して、山口を攻む。義隆、法泉寺に走る。其兵皆潰ゆ。前關白藤原尹房、爲に和を講ず。隆房肯ぜず。義隆航して筑紫に赴く。風に阻せられて、還りて大宰寺に入る。賊兵來り圍む。九月、義隆自殺す。隆豐等之に死す。義隆の子義尊、及び尹房以下の公卿十餘人、皆殺す所と爲る。

- 文學を好みて心弱し
- 梵語の漢譯したるもの即ち佛敎の敎典を指す
- 備位
- 堅強くして心はゾレ
- 官を辭して隱居せんことを請ふ
- 死後の罰
- 長門國に在り

武任有節。結杉重政。青景隆時。内藤興盛。謀殺武任。武任怖而遁逃。冷泉隆豐。勸義隆速誅隆房。不聽。隆房伴乞骸骨。歸其邑。若山。日謀反逆。家臣深野康澄。宮川房

勝引持長遣囑大諫弗聽。二臣交刺死。二十年八月。隆房遂反攻山口。義隆走法泉寺。其兵皆潰。前關白藤原尹房爲講和。隆房不肯。義隆航赴筑紫。阻風。還入大寧寺。賊兵來圍。九月。義隆自殺。隆豐等死之。義隆子義尊。及尹房以下公卿十餘人。皆爲所殺。

隆房更名晴賢。削髮號全。主大友義領。弟義長爲主。曰。重政隆時。誦武任勸吾。行大事。乃發兵誅二人。初晴賢之圖難。使人來說元就。元就黨己。昭以佐東郡。元就卻之。義隆臨終遺書囑元

隆房、名を晴賢と更め、髪を削りて全と號す。豐後の國主大友義領の弟義長を迎へて主と爲す。曰く、重政・隆時、武任を妬みて、吾に勸めて大事を行はしむと。乃ち兵を發して二人を誅す。初め晴賢の難を圖るや、人をして來りて元就に説きて己に黨せしめんとす。昭はすに佐東郡を以てす。元就、之を卻く。義隆、終に臨みて書を遺りて、元就に囑して曰く、吾れ不幸にして賊臣の弑する所と爲り、恨を呑みて地に入る。卿に非ずんば誰か能く我が仇を復せんと。元就、書を覽て、涕を流して曰く、吾れ大貳の恩答を受く。囑する所無しと雖も、猶ほ爲に仇を復せんと欲す。況や是れ有るをやと。諸將曰く、彼凶焰、方に熾なり。未だ與に衡を争ふ可からず。宜しく内に威力を養ひ、外に柔弱を示し、鬻を

觀て動く可しと。元就之に従ふ。

- 義隆を試せしこと
- 恨みを含みて死す
- 思をかけて深く思ふ
- この遺囑あるに於ては所更なり
- 力の輕重を争ふ可からず

就曰。吾不幸爲賊臣所弑。吾恨入地。非卿誰能復我仇。元就覽書。泣曰。吾受大貳恩眷。雖無所囑。猶欲爲復仇。況有是乎。諸將曰。彼凶焰方熾。未可與争衡。宜內養威力。外示柔弱。觀豐而動。元就從之。

二十一年秋。元就攻拔榑山志和諸城。是歲。備後江田隆貫叛。歸尼子氏。元就攻之。至泉橋。尼子國久將數萬騎來救。隆貫元春以部兵二千擊

二十一年秋、元就攻めて榑山・志和の諸城を拔く。是の歲、備後の江田隆貫叛きて、尼子氏に歸す。元就之を攻めて、泉橋に至る。尼子國久、數萬騎に將として來りて隆貫を救ふ。元春部兵二千を以て、撃ちて之を走らす。會々霖雨にて川漲る。國久・隆貫、退きて山内に入る。元就も亦歸る。備中の人三村家親來り屬す。二十二年、家親を以て郷導と爲して、穗田爲資を攻めて、之を降す。

- 共に周防國に在り
- 備後國に在り
- 長由

走之。會霖雨川漲。國久隆貫退入山内。元就亦歸。備中人三村家親屬。二十二年。以家親爲二鄉導。攻二德田爲資。降之。

初我將井上元兼。以二豪宗不奉二法令。竊言曰。主公欲誅二陶氏。陶氏嘗救我。恩可背乎。元就以計族誅之。於是會二諸族。屬二討二晴賢。之計。隆景進曰。宜二請二天子。仗二大義。討之。則人心所歸。無不克矣。元就曰。善。乃上書曰。太宰大

初め我が將井上元兼、豪宗を以て法令を奉ぜず。竊かに言ひて曰く、主公、陶氏を誅せんと欲す。陶氏は嘗て我を救ふ。恩背く可けんやと。元就、計を以て之を族誅す。是に於て、諸々の族屬を會して、晴賢を討つ計を議す。隆景進みて曰く、宜しく之を天子に請ひて、大義に仗りて之を討つべし。則ち人心の歸ふ所、克たざること無けん。元就曰く、善しと。乃ち上書して曰く、太宰大貳義隆、父祖の遺業を承けて、心を王室に存す。而して賊臣晴賢といふ者の弑する所と爲る。臣元就、微力を奮ひて、討伐を圖り、未だ其功を成すを得ず。伏して冀はくは、晴賢を討つ一行の詔を得て、徒屬を糾合して以て西陲を靖んぜん。初め朝廷、晴賢、難を作すと聞きて、將軍・管領に命じて、西伐せしむ。敢て詔を奉ずるもの莫し。元就の書至るに及びて、即ち之を制可す。元

貳義隆。水二父祖遺業。存二心於二王室。而爲二賊臣晴賢者。所弑。臣元就。奮二微力。圖二討代。未得。成二其功。伏冀得二討二晴賢。一。行詔糾合徒屬。以靖二西陲。初朝廷。命二將軍管領。西伐。英二取奉。詔。及二元就。書至。即制二可之。元就。得二詔。感喜。移二書。遠近。津和城。主吉見正賴。世與二陶氏。二。首應。之。晴賢。怒。攻二津和。元就。遣二兵。援。之。

就、詔を得て感喜し、書を遠近に移す。津和城主吉見正賴、世々陶氏と讎たり。首として之に應ず。晴賢怒りて、津和を攻む。元就兵を遣して之を援ふ。

- 上き問四 ● 一族を悉く誅す ● 僅かの力 ● あはす ● 西方のはての諸國 ● 詔して可とせらる

二十三年五月。元就與二諸子。將二兵。西出。取二銀山。草津。櫻尾。諸城。遇二陶氏。兵。于二折敷畑。擊破。之。陶氏骨鯁將

二十三年五月、元就、諸子と兵に將として西に出でて、銀山・草津・櫻尾の諸城を取る。陶氏の兵に折敷畑に遇ふ。撃ちて之を破る。陶氏骨鯁の將に江良興房有り。琥珀城を守る。元就、反間を縱ちて、興房款を送ると言はしむ。晴賢、興房を族誅し、遂に周防・長門・豊前・筑後・石見に檄して、兵を發して東下す。元就之を聞きて、諸子と密かに謀りて曰く、彼の兵三萬に下らず。必ず首として櫻

有江良興房。守琥珀城。元就縱反間。言興房送款。晴賢族誅興房。遂撤周防長門。豐前筑後石見。發兵東下。元就聞之。與諸子密謀。曰。彼兵不下。三萬。必首攻櫻尾。草津。我悉衆援之。不過五千。人力懸絕。與戰平地。不可克也。爲今計者。宜城嚴島。誘而蹙之。弘治元年。五月。城于島之有浦。諸宿將皆諫。其不可。元就弗聽。諸將皆相言曰。此公常不拒諫。今何乃爾。六月。城成。命己斐。新里二氏。以兵數百。

尾・草津を攻めん。我れ衆を悉して之を援ふも、五千人に過ぎず。勢力懸絶す。與に平地に戦はば、克つ可からず。今の計を爲すは、宜しく嚴島に城きて、誘ひて之を蹙むべしと。弘治元年五月、島の有浦に城く。諸宿將、皆其不可を諫む。元就聽かず。諸將、皆相言ひて曰く、此公、常に諫を拒がず。今何ぞ乃ち爾ると。六月、城成る。己斐・新里二氏に命じて、兵數百を以て之を守らしむ。草津・櫻尾・仁保の諸城をして、互に策應を爲さしむ。既にして聲言す、吾れ老將の言を聽かざるを悔ゆ。嚴島の地形、守り難く援ひ難し。即し敵の有と爲らば、諸城從ひて陥らん。吾が計、此より失するは莫しと。

- 三城共に安藝國に在り
- 同上
- 關直
- 安藝國に在り
- かけはなる
- 安藝國に在り
- 互ひにはかりて援け合ふ
- 言ひふちす

守之。使草津櫻尾仁保諸城互爲策應。既而聲言。吾悔不聽老將言。嚴島地形。難守難援。即爲敵有。諸城從陷。吾計莫失於此。

九月。晴賢留其子長房于若山。而自統騎卒二萬。戰艦千餘艘。至岩國。議所。擲大和興武。曰。先拔櫻尾。則諸城不攻而陷。弘中隆包曰。請分兵一攻櫻尾。一備其援路。彼不取。出則與之相持。而遣輕兵。擣吉田。彼進退失。

九月、晴賢其子長房を若山に留めて、自ら騎卒二萬、戰艦千餘艘を統べて、岩國に至りて、戰の鬪ふ所を議す。大和興武曰く、先づ櫻尾を抜かば、則ち諸城攻めずして陥らんと。弘中隆包曰く、請ふ、兵を分ちて、一は櫻尾を攻め、一は其援路に備へば、彼れ敢て出でじ。出でば則ち之と相持し、而して輕兵を遣して吉田を擣かば、彼れ進退を失ひ、刃に血らずして取る可しと。晴賢曰く、吾れ先づ嚴島を取らんと欲す。城脆く將孱し。而して援ふに便ならず。聞く、元就甚だ之を悔ゆと。吾れ取りて以て根據と爲し、兵を分ちて諸城を攻めん。是れ萬全の策なりと。隆包曰く、彼れ眞に之を悔いば、必ず宣言せじ。宣言するは、以て我を餌するに非ざるを得んやと。晴賢、猶豫して未だ決せず。

- 周防國に在り
- 身輕の兵
- 餌としての釣り出さんとするやも知れず

據。不血刃而可取。晴賢曰。吾欲先取嚴島。城將辱而不便於授。聞元就甚悔之。吾取以爲根據。分兵攻諸城。是萬全策也。陸包曰。彼眞悔之。必不宣言。宣言者。得非以餌我乎。晴賢猶豫未決。

故櫻尾城主降在賊軍中。與己斐新里相識。元就令二人賂書。指陳罪惡。極其醜詆。晴賢覽之大怒。元就又令桂元澄詐送款。約俟元就渡得赴授。翻城爲中。應。晴賢乃決意攻嚴島。十月。建牙塔岡。

故の櫻尾の城主、降りて賊軍の中に在り。己斐・新里と相識る。元就、二人をして書を賂らしめて、順逆を指陳して、晴賢の罪惡を暴し、其醜詆を極む。晴賢、之を覽て大に怒る。元就、又桂元澄をして、詐りて款を送らしめ、元就、海を渡りて赴き援ふを俟ちて、城を翻して内應を爲さんと約す。晴賢乃ち意を決して嚴島を攻む。十月、牙を塔岡に建て、民舍を燒きて陣を布く。舟艦、櫓比し、喊聲海に震ふ。城兵、壁に嬰りて堅く守る。賊に鳥銃七口有り。櫓楯支へず。土豚を積みて之を拵ぐ。晴賢書を元就に遣りて曰く、公、先大貳の爲に、誅を加へられんと欲す。敢て逃れ避けず。聊か水陸軍二萬を以て、嚴島に陣す。公能く來らんかと。元就、將士を聚めて之を示す。將士皆懼るゝ色あり。元就笑ひて

燒民舍。布陣。舟艦櫓比。喊聲震海。城兵嬰壁堅守。賊有鳥銃七口。櫓楯不支。積土豚拵之。晴賢遣書元就。曰。公爲先大貳。欲見加誅。不取逃避。聊以水陸軍三萬。陣于嚴島。公能來乎。元就聚將士示之。將士皆有懼色。元就笑曰。使賊所言信。則吾大克矣。衆問故。曰。其地迫狹。彼側肩躡足。不便進退。兵愈衆而鋒愈鈍。我以死士數千一衝之。克可必也。乃使穴戶隆家留守吉田。而自率精兵三千餘人。南行至草津。與晴賢隔海而陣。國內諸豪意其必敗。多稱病不從。

曰く、賊の言ふ所をして信ならしめば、則ち吾れ大に克たんと。衆、故を問ふ。曰く、其地迫狹、彼れ肩を側て足を躡み、進退に便ならず。兵愈々衆くして、鋒愈々鈍る。我れ死士數千を以て之を衝かば、克必ず可きなりと。乃ち穴戶隆家を以て吉田を留守せしめて、自ら精兵三千餘人を率ゐて、南行して草津に至り、晴賢と海を隔てて陣す。國內の諸豪、其必敗を意ひて、多く病と稱して従はず。

● 一々拾ひ立て、のぶ ● 口ぎたなくもしる ● 櫓の齒の如くならぶ ● 城櫓の類 ● 土俵 ● 肩を横にし足をふみ合ひかけひき比不便なり

初伊豫有能

初め伊豫に能島・來島の二族あり。水戦に閑ふ。晴賢・元就、並に之を招く。二

鳥來島二族。元就並招之。二族以三百艘來。元就勞之。往問城中消息。賊四擊地道。樓櫓殆覆。以大索維持之。元就移陣。火立山。晦日。盡返。老弱輻重。于草津。累累不絕。賊望見。以為我收兵也。於是元就令諸將士。人以二條布約。稍佩一日糧。

族、三百艘を以て、來りて元就に屬す。元就、之を勞ひて、往きて城中の消息を問はしむ。賊、四もに地道を鑿ちて、樓櫓殆ど覆らんとす。大索を以て之を維持す。元就移りて火立山に陣す。晦日、盡く老弱輻重を草津に返す。累累として絶えず。賊望み見て以爲らく、我れ兵を收むるならんと。是に於て、元就、諸將士に令して、人ごとに二條の布を以て袖を約し、一日の糧を佩びしめ、暗號を約して、暮るゝ比、船に上る。大風雨に會ひて、士卒震ひ怖れ、風定るを俟たんと請ふ。元就曰く、天我を助くるなりと。皆篝火を滅せしめて、一燈を牙船に掲ぐ。諸軍、之を認めて、浪を破りて渡る。既に濟り、舟を北岸に返して、以て必死を示す。遂に博尾崎に上りて、直に塔岡の背に出づ。降景、別に伊豫の船兵を率ゐて、其面に出づ。賊、風雨を恃みて、警邏する者無し。賊艦を穿ちて入る。賊或は誰何す。浦宗勝、大聲に答へて曰く、筑前の兵、微に應じて來ると。船を辟きて達せしむ。稍、岸に上る。兩隊皆陣す。天將に明けんとす。元

就、命じて螺を吹き鼓譟して、高きに乗じて下り撃たしむ。

- 標子 ● とんねる ● 安藝國に在り ● ざるくと引切りなし ● 大將の乗船 ● 安藝國に在り
- 非常を警しめ見知る ● 何者かと脅む

約二暗號。比、暮上。船。會。大。風。雨。土。卒。震。怖。請。俟。風。定。元。就。曰。天。助。我。也。令。皆。滅。篝。火。揭。一。燈。于。牙。船。諸。軍。認。之。破。浪。而。渡。既。濟。返。舟。北。岸。以。示。必。死。遂。上。博。尾。崎。直。出。塔。岡。背。降。景。別。率。伊。豫。船。兵。出。其。面。賊。恃。風。雨。無。警。邏。者。穿。賊。艦。而。入。賊。或。誰。何。浦。宗。勝。大。聲。答。曰。筑。前。兵。應。徵。來。矣。辟。船。而。達。稍。稍。上。岸。兩。隊。皆。陣。天。將。明。矣。元。就。命。吹。螺。鼓。譟。乘。高。下。擊。

賊の諸軍、大に驚きて、争ひて其牙營に萃る。營、填咽して、自ら相撃刺す。元就、大に呼びて曰く、進めと。諸將士、柵を破りて入る。賊兵終に大に潰ゆ。晴賢、咄嗟走る者を過む。過むる能はず。賊、舟を争ひて遁れ、溺死するもの數千人。晴賢、肥大にして、行歩に便ならず。從者、扶掖して海岸に至り、船を求む。復た一隻を覩す。遂に自殺す。隆包、殘兵百餘を以て、嵩洞中に棲む。元就、其才を惜しみて、人をして説きて之を降さしむ。肯はずして死す。已にして晴

賊諸軍大驚。争萃其牙營。營填咽。自相撃刺。元就大呼曰。進。諸將士破柵而入。賊兵終大潰。晴賢咄嗟過走者不能過也。賊争舟而

其才を惜しみて、人をして説きて之を降さしむ。肯はずして死す。已にして晴

遁。溺死數千人。晴賢肥大不便。行步從者扶掖。至海岸。求船。不復視。一隻。遂自殺。隆包以殘兵百餘。棲嵩洞中。元就惜其才。使人說降之。不肯而死。已而獲晴賢首。元就嚴建旗鼓。奮指其首曰。試逆之報。乃嬰天誅。今何如也。諸軍揚凱。元就留嚴島。十一日。引兵返小瀉。葬晴賢首于洞雲寺。

賢の首を獲。元就、嚴かに旗鼓を建て、鞭を奮ひて其首を指して曰く、弒逆の報、乃ち天誅に嬰る。今何如と。諸軍、凱を揚ぐ。元就、嚴島に留ること十一日、兵を引きて小瀉に返りて、晴賢の首を洞雲寺に葬る。

● 本陣 ● ちちよさがる ● 舌打ちして叱る ● 扶けもつ ● 巖の割穴の中 ● 安藝國に在り

元就既誅晴賢。威震關西。周防人相驚。曰。毛利軍至矣。陶長房教義。長乞授於大友氏。大友氏弗敢應。十

元就、既に晴賢を誅して、威、關西に震ふ。周防の人相驚きて曰く、毛利の軍至ると。陶長房、義長をして援を大友氏に乞はしむ。大友氏、敢て應ぜず。十月、元就進みて岩國に陣し、隆景を遣して玖珂郡を徇へ、上關に至る。杉重輔、内應をなして、長房を攻め殺す。將士相疑ひて、皆款を元就に送る。元就、尼子晴久、備後・石見を窺ふと聞きて、未だ肯て深く入らず。乃ち備後の豪族山

内隆通を招降す。又元春に命じて石見を守らしめて、自ら軍を引きて山口に向ふ。陶氏の故黨、萬人を以て煤間城に拒ぐ。隆元之を攻む。城、泥淖を帯びて、我が兵利あらず。

● 玖珂上關煤間城皆周防國に在り ● ぬかるみ

二月。元就進陣。岩國。遣隆景。徇玖珂郡。至上關。杉重輔。爲内應。攻殺長房。將士相疑。皆送款。元就。元就聞尼子晴久。窺備後石見。未肯深入也。乃招降備後豪族山内隆通。又命元春守石見。而自引軍向山口。陶氏故黨以萬人拒煤間城。隆元攻之。城帶泥淖。我兵不利。

三年二月、元就、萬騎に將として岩國を發す。士卒をして、人ごとに簣と席とを

三年。二月。元就將萬騎發岩國。令士卒人持簣與席。以傳城下。按實於淖。布席其上。踐以登城。鑿殺其兵。山口騷擾。盡甲拒右田岳。

持たしめて、以て城下に傳ひて、簣を淖に投じ、席を其上に布きて、踐みて以て城に登り、其兵を鑿殺す。山口、騷擾し、甲を盡して右田岳に拒ぐ。元就、隆元と兵二萬を合せて、攻めて之を降す。一將をして之を守らしめて進む。吉見正頼來り會す。義長怖れて、勝山に走る。是に於て、元就、諸軍を整へて山口に入る。内藤隆春等迎へ降る。元就、六千騎を遣して、長府、下關を扼して、以て

元就與隆元。合兵二萬。攻降之。使一將守之。而進。吉見正賴來會焉。義長怖。走勝山。於是元就整諸軍。入山口。內藤隆春等迎降。元就遣六千騎。扼長府下關。以絕大友氏援路。而令福原貞俊攻勝山。殺義長及晴賢季子鶴壽。周防長門士民雲集。山口豐前筑後諸城。又多迎降者。元就盡除弊政。免租賦。分邑賞諸將。置戍于下關。門司三尾。鶴峯四處。四月。凱旋安藝。

大友氏の援路を絶ち、而して福原貞俊をして勝山を攻しめて、義長及び晴賢の季子鶴壽を殺す。周防・長門の士民、山口に雲集す。豊前・筑後の諸城、又迎へ降る者多し。元就、盡く弊政を除きて、租賦を免し、邑を分ちて諸將を賞し、戊を下關・門司・三尾・鶴峯の四處に置きて、四月、安藝に凱旋す。

- 皆殺す
- 全軍にて
- 周防國に在り
- 同上
- 長府・下關共に長門國に在り
- 雲の如の多く集まる
- 共に周防國に在り

是時。晴久入。備後。數攻。隆通。不能下。轉向石見。不致。

是の時、晴久、備後に入りて、數々隆通を攻めて下す能はず。轉じて石見に向ひ、敢て入らずして去る。十一月、陶氏の餘黨起りて、鶴峯を攻む。元就、萬人に將として往きて之を平け、轉じて周防の故將益田藤包を三角城に攻む。元春・隆

入。而。去。十。一。月。陶。氏。餘。黨。起。攻。鶴。峯。元。就。將。萬。人。往。平。之。轉。攻。周。防。故。將。益。田。藤。包。于。三。角。城。元。春。隆。景。說。曰。藤。包。勇。智。不。下。正。賴。而。與。之。有。郤。宜。兩。存。之。使。相。鈐。制。乃。招。降。藤。包。

景、説きて曰く、藤包は勇智正賴に下らず。而して之と郤有り。宜しく之を兩存して、相鈐制せしむべしと。乃ち藤包を招降す。

- 石見國に在り
- 兩立せしめて
- みさへ合はすべし

元就於。是。取。盡。大。内。氏。地。遂。圖。尼。子。氏。而。患。尼。子。國。久。強。悍。謀。除。之。尼。子。經。久。娶。吉。川。經。基。女。而。元。就。亦。爲。其。孫。女。婿。是以託姻戚。

元就、是に於て、盡く大内氏の地を取り、遂に尼子氏を圖る。而して尼子國久の強悍を患へて、之を除かんと謀る。尼子經久、吉川經基の女を娶る。而して元就も亦、其孫女の婿たり。是を以て、姻戚に託して、數々使幣を國久に通す。國久頗る之を疑ふ。義勝の死するや、其子經貞、猶ほ幼し。國久其邑を攝す。長するに及びて返し與へず。經貞之を啣む。是に於て元就死囚をして書を書懐にして出雲に入らしめて、之を道上に殺す。行人聚り觀る。其書を取れば、乃

數通三使幣於國久。國久頗疑之。義勝之死。其子經貞猶幼。國久攝其邑。及長不返。與經貞卿之。於是元就令死囚懷書入出雲。殺之道上。行人聚觀。取其書。乃元就與國久約。內應者也。晴久瘦書大驚。召經貞。問曰。聞三新宮黨陰通安藝。汝豈知之乎。經貞謀擊之。曰。臣數見其密使往來。晴久乃伏甲。要殺國久父子。繼其黨。北兵自是弱矣。永祿元年二月。元就使三元春陣出羽。與尼子氏將小笠原長雄。本莊常光戰。未決。神邊城主杉原盛重來援。破之。五月。元就攻降長雄。晴久來

ち元就と國久と、内應を約するものなり。晴久、書を獲て大に驚き、經貞を召して問ひて曰く、新宮黨陰かに安藝に通すと聞く。汝豈に之を知るか。經貞、之を媒孽して曰く、臣、數々其密使の往來するを見らんと。晴久乃ち甲を伏せて、國久父子を要殺し、其黨を殲にす。北兵是より弱し。永祿元年二月、元就、元春をして出羽に陣せしめて、尼子氏の將小笠原長雄・本莊常光と戦はしむ。未だ決せず。神邊城主杉原盛重來り援ひて、之を破る。五月、元就攻めて長雄を降す。晴久來り救ふ。及ばず。三年二月、攻めて松山を取る。八月、誘ひて常光を降して、石見を定む。

● 妻の親戚 ● 變ね泊む ● 國久が我が邑を押領するを潰恨に思ふ ● 死刑に行ふべき囚人 ● 遺跡を通行するの人 ● 罪を隠蔽して ● 正親天皇の年號 ● 石見國に在り ● 備後國に在り

救不及。二年二月。攻取三松山。八月。誘降常光。定石見。

是歲正月。天子即位。元就獻金助。資焉。詔以元就敘從四位下。任大膳大夫。賜菊桐章。尋遷陸奥守。而隆元代之。十月。入出雲。軍于赤穴。迎降者十餘族。常光爲先鋒。縱火岩坂。常光負功。汰虐。元就與元春隆景謀曰。彼服可用。而叛

是の歲正月、天子即位の禮を行ふ。元就金を獻じて資を助く。詔して、元就を以て從四位下に敘し、大膳大夫に任じ、菊桐の章を賜ふ。尋ぎて陸奥守に遷さる。而して隆元之に代る。十月、出雲に入りて、赤穴に軍す。迎へ降る者十餘族。常光先鋒たり。火を岩坂に縱つ。常光、功を負みて汰虐なり。元就、元春・隆景と謀りて曰く、彼れ服せば用ふ可し。而して叛かば制す可からず。已に尼子に叛く。何ぞ我に有らん。速に除くに若かずと。十一月襲ひて之を殺す。降將、是に因りて多く叛く。五年十月、元就、白瀨より入りて、洗合山に城く。富田を去ると七里なり。建てて本營となし、連珠砦を築きて、以て漸く富田に逼る。京師の公卿、文儒を迎へて、書を軍中に講せしめ以て、持久の意を示す。因幡の山名氏、伯耆の南條氏、嘗て尼子氏の逐ふ所と爲る。元就之を復し、其義故を收めしめ、以て尼子氏を助け攻めしむ。山名祐豐も亦伯耆を以て來り屬す。

不可制。已叛於尼子。何有於我。不若速除。十一月。襲殺之。降將因是多叛。五年。十月。元就由白瀧入。城于洗合山。去富田七里。建爲二本營。築三連珠砦。以漸逼富田。迎京師公卿文儒。講書於軍中。以示持久之意。因幡山名氏。伯耆南條氏。皆爲尼子氏所逐。元就復之。使收其義。故以助攻尼子氏。山名祐豐亦以伯耆來屬。

十二月。晴久病卒。其子義久嗣。大友義鎮與義久通好。數攻門司。乃遣隆元。隆景。以萬餘人赴援。取神田城。留天野隆重守之。隆元留屯岩國。六

十二月、晴久病みて卒す。其子義久嗣ぐ。大友義鎮、義久と好を通じて、數門司を攻む。乃ち隆元・隆景を遣して、萬餘人を以て赴き援ひて、神田城を取り、天野隆重を留めて之を守らしむ。隆元留りて岩國に屯す。六年二月、義鎮二萬人を以て神田を攻む。下す能はず。會々天使二人京師より至る。我と義鎮とをして、和して兵を弭めしむ。隆元乃ち其子輝元の爲に、義鎮の女を娶らんと約す。又義久と和せしむ。元就和す可からざる者十條を疏して、之を辭す。

● 天子の使者 ● 和難す可からざる理由十條を講き上げて

- 一本に金字の下に物字あり
- 紋章
- 戦功を鼻にかけて自ら誇る
- 何ぞ我に叛かずにをられようか
- 學者
- 一本に持を繼とせり。持久戦をやるといふ意を示す
- 嘗て恩義を受けたる敵故の者

年。二月。義鎮以二萬人攻神田。不能下。會天使二人至自京師。令我與義鎮。鎮和弭兵。隆元乃爲其子輝元。約娶義鎮女。又令與義久。和元就。疏不可和者十條。辭之。

七月。隆元撤守歸觀。過吉田。將士勸入。城休息。隆元曰。家君衰老。櫛風沐雨。吾何忍休乎。八月。至舟木。和智隆實要面。襲之。病作。卒。年四十一。隆元性仁孝。元就嘗罹疾。新以身代之。其左岩國。大友氏陰招周防長門將士。將

七月、隆元守を撤して歸觀し、吉田を過ぐ。將士城に入りて休息せんとを勸む。隆元曰く、家君衰老して、風に櫛り雨に沐す。吾れ何ぞ休するに忍びんやと。八月、舟木に至る。和智隆實要して之を襲す。病作りて、卒す。年四十一なり。隆元性仁孝なり。元就嘗て病に罹る。身を以て之に代らんと祈る。其の岩國に在るや、大友氏、陰かに周防・長州の將士を招く。將士皆叛くに忍びず。元就、計を得て、軍氣の沮まんことを慮り、令を出して曰く、亡兒を弔はんと欲する者は力戦せよと。自ら將として白鹿城を攻む。城將松田兵部、能く拒ぐ。乃ち銀山の礦卒をして地道を鑿たしむ。城兵も亦鑿ちて之を迎へて、穴中に鬪ふ。城兵遂に穴を塞ぎて卻く。乃ち其汲路を截つ。松田米を斗に盛りて、馬足に灌注す。我が軍士之を視て、以爲へらく、水乏しからずと。九月、義久白鹿の急なるを聞

擁元長進擊走龜井安綱。八月盛重拔江美。九月家親拔大江。元就乃起石原龍山等十二寨。以環富田。謀錫其糧也。置關四外。榜曰必藏之。毋使一人遁。已而度糧盡。則撤關更榜曰。降者釋之。城兵迭降。相踵。當是時。義久寵臣大塚某。與義久嬖姬相結。以譏諸將。通款於我。九年正月。卯山久信被誅。諸將皆懼。出降。獨河副森脇三百人不降。元就召疾。招降義久。七月。義久遂致城降。眞之安藝長田。元就圍富田。前後七年而降之。擲其守將。衆推天野隆重。乃命隆重一守。振旅而還。

糧を竭さんと謀る。關を四外に置き、榜して曰く、必ず之を藏せ。一人をも遁れしむる毋れと。已にして糧盡くるを度り、則ち關を撤し榜を更めて曰く、降る者は之を釋せと。城兵逃れ降るもの相踵ぐ。是の時に當りて、義久の寵臣大塚某、義久の嬖姬と相結びて、以て諸將、款を我に通すと譏す。九年正月、卯山久信誅せらる。諸將皆懼れて、出でて降る。獨り河副・森脇等三百人降らず。元就疾有り。義久を招降す。七月、義久遂に城を致して降る。之を安藝の長田に眞く。元就、富田を圍むこと、前後七年にして之を降す。其守將を擲ぶ。衆、天野隆重を推す。乃ち隆重に命じて守らしむ。振旅して還る。

● 江美・大江・石原・龍山共に出雲國に在り ● 一本に二十となり ● 明け渡して ● 兵をさめて還る

元就既并大内。尼子二氏地。定山陰山陽。十三州。命元春。掌山陰。隆景。掌山陽。遂令二將畧地。於南海西海。當是時。南海有長曾我部。宇都宮。河野氏。西海有龍造寺氏。十一。年。宇津宮。豐綱。攻河野。通直。通直來乞援。二月。元春。隆景。將兵。數萬。入伊豫。拔二城。圍豐綱于大津。長曾我部。元親。將萬人。來援。豐綱。軍于柳原。乃令穴戶。隆家。當之。而諸軍。攻降。豐綱。元親。引去。元春。隆景。以六旬。定伊豫。還。誅三和智。

元就、既に大内・尼子二氏の地を并せて、山陰・山陽十三州を定め、元春に命じて山陰を掌り、隆景に山陽を掌らしむ。遂に二將をして、地を南海・西海に略せしむ。是の時に當りて、南海に長曾我部・宇都宮・河野氏有り。西海に大友・島津・龍造寺氏有り。十一年、宇都宮・豐綱、河野通直を攻む。通直來りて援を乞ふ。二月、元春・隆景、兵數萬に將として、伊豫に入り、二城を抜き、豐綱を大津に圍む。長曾我部元親、萬人に將として來りて豐綱を援ひ、柳原に軍す。乃ち穴戶隆家をして之に當らしめて、而し諸軍攻めて豐綱を降す。元親引き去る。元春・隆景、六旬を以て伊豫を定めて還る。和智隆實を嚴島に誅す。隆元の死、蹤跡有るを以てなり。

● 伊豫國に在り ● 同上 ● 毒殺と云わんき詔跡

隆實子三殿島。以三隆元之死有二蹤跡一也。

當是時。筑紫豪傑高橋宗像。秋月諸族。皆屬元就。大友義鎮數攻之。十一月。元春降景與元長。將五萬人。赴援。拔三岳。十二年。四月。遂圍立華城。義鎮方攻三龍造寺隆信于佐賀。聞之。與隆信和。五月。使其二將將兵七萬。援中立華。我軍作壘。

是の時に當りて、筑紫の豪傑高橋・宗像・秋月の諸族、皆元就に屬す。大友義鎮數々之を攻む。十一月、元春・降景、元長と、五萬人に將として赴き援ひて、三岳を抜く。十二年四月、遂に立華城を圍む。義鎮、方に龍造寺隆信を佐賀に攻む。之を聞きて、隆信と和す。五月、其二將をして、兵七萬に將として立華を援はしむ。我が軍、壘壘を作りて、再び戦ひて之を敗る。元就、輝元を攜へて、長門に往きて、遙に聲援を爲す。尼子氏の遺臣山中幸盛・立原之綱等、京師に在りて之を聞き、故の尼子誠久の子の僧と爲れる者を索めて、主と爲して、名を勝久と更む。但馬の海賊を糾して、隱岐に入る。六月、出雲に入りて、新山・末次を取り、富田を攻む。天野隆重、兵三百有り。作り降りて、其兵二千を城下に誘ひ、撃ちて之を破る。七月、敵、伏を設けて隆重を誘ふ。隆重、諜知して、伏中に兩射して、又之を破る。元就、浮田氏、勝久に應ずと聞きて、香川光景を遣

壘。再戰破之。元就攜輝元。往長門。遙爲二聲援。尼子氏遣臣山中幸盛。立原之綱等。在京師。聞之。索故尼子誠久子爲僧者。爲主。更三名勝久。糾但馬海賊。入隱岐。六月。入出雲。取新山。末次。攻富田。天野隆重。有兵三百。伴降。誘其兵二千于城下。擊破之。七月。敵設伏。而誘隆重。隆重。諜知。兩射伏中。又破之。元就聞浮田氏。應勝久。遣香川光景。定美作。令三元春。隆景。疾攻下立華。遂致城。兵于西軍。猶與我相持。九月。故大内義興。庶兄輝弘。寓大友氏。借兵五千。海路入三周防。攻三嶋峯。元就命班外師。十月。置戊戌班師。以吉見正賴爲殿。而退。至若松渡。取土人質。使具船。以濟。乃令戊戌兵致城而還。遣兵援三嶋峯。遂輝弘殺之。

して美作を定めしむ。元春・隆景をして、疾く攻めて立華を下さしめ、城兵を西軍に送致す。西軍、猶ほ我と相持す。九月、故の大内義興の庶兄輝弘、大友氏に寓す。兵五千を借りて、海路より周防に入りて、嶋峯を攻む。元就、命じて外師を班さしむ。十月、戊戌を置きて師を班す。吉見正賴を以て殿と爲して退く。若松渡に至りて、土人の質を取りて、船を具へしめて以て濟り、乃ち戊戌兵をして城を致さしめて還る。兵を遣して嶋峯を援ひ、輝弘を逐ひて之を殺す。

- 筑前國に在り ● 筑後國に在り ● 遠方に在り援助をなす ● 一に久國に作る ● 問題を放ちて知り

元龜元年正月。元春・隆景將兵一萬五千。輝元攻勝久。恐其城守也。宣言兵寡。將中納糧富田。而還山。幸盛聞之。悉甲五千。出子布辨山。我兵擊大破之。元春攻末次。夜列炬其面。而自背襲之。勝久幸盛走新山。諸城連陷。

元龜元年正月、元春・隆景兵一萬五千に將として、輝元を輔けて、勝久を攻む。其城守せんことを恐る。兵寡く、將に糧を富田に納れて還らんとすと宣言す。山中幸盛之を聲きて、甲五千を悉して、布辨山に出づ。我が兵撃ちて大に之を破る。元春、末次を攻む。夜、炬を其面に列ねて、背より之を襲ふ。勝久・幸盛新山に走る。諸城連に陥る。

● 正親町天皇の年號 ● 出雲國に在り

八月。元就患痛。輝元・隆景歸省之。二年六月。病篤。輝元請遺言。元就曰。汝視二

八月、元就、痛を患ふ。輝元・隆景歸りて之を省す。二年六月、病篤し。輝元、遺言を請ふ。元就曰く、汝二叔を視ること猶ほ我のごとくして、其言に違ふと勿くば、則ち以て我が業を守るべきなり。吾れ復た何をか言はんと。遂に卒す。元就、歌詠を善くし、遺集若干卷あり。嘗て酒酣なるとき、慨然として言ひ

叔二我。勿違其言。則可三以守我業。矣。吾復何言。遂卒。元就善歌詠。有遺集若干卷。嘗酒酣。慨然言曰。凡英雄以一身繫天下。治亂者。求友於千載之上。即同世而生。志合則天下治。志不合則天下亂。嘗問左右曰。吾於前世。人主可。比於誰。有。一儒士。對曰。可。比。周文武。元就笑曰。吾乃今知不若文武也。文武之臣。豈有。面諛如汝者。哉。元就得。一州。一則擇守將。輒諷之曰。吾聞。侮其人者。不有。其土。汝服。此言。故新附士民。少。倍畔者。

て曰く、凡そ英雄は、身を以て天下の治亂に繫くる者、友を千載の上に求む。即し世を同じくして生れ、志合へば則ち天下治り、志合はざれば則ち天下亂る。嘗て左右に問ひて曰く、吾れ前世の人主に於ける、誰にか比すべきと。一儒士あり。對へて曰く、周の文武に比す可しと。元就笑ひて曰く、吾れ乃ち今にして文武に若かざるを知る。文武の臣、豈に面諛すること汝が如き者有らんやと。元就、一州を得れば則ち守將を擇び、輒ち之を諷めて曰く、吾れ聞く、其人を侮る者は、其土を有せずと。汝此言を服膺せよと。故に新附の士民、倍畔する者少し。

● 咽喉塞がり食物の通らぬ病 ● 吉川元春・小早川隆景 ● 歌集の死後遺れるもの ● 友を千年の上世に求む ● 周の文士・武王 ● 面と向つてへつちふ ● 人民 ● 大切に守れ ● ぞむく

元春得計哭泣。謂將士曰。葬奠之任。隆景在焉。吾當助敵以慰靈魂。是時幸盛在末石。元春乃稱攻大山。僧徒而急還。攻末石。幸盛出降。僞疾。自削中逃。八月。元春攻新山。走勝久。勝久匿京師。幸盛爲盜。但馬因幡間。遂與勝久一偕歸於織田信長。

初信長起尾張。略取近畿。武田信玄。上杉謙信。割據其東。皆通使。

元春、計を得て哭泣して、將士に謂ひて曰く、葬奠の任は、隆景在り。吾れ當に敵を勦して以て靈魂を慰むべしと。是の時、幸盛末石に在り。元春、乃ち大山の僧徒を攻むと稱して、急に還りて末石を攻む。幸盛出でて降る。疾と僞りて、削中より逃る。八月、元春、新山を攻めて、勝久を走らす。勝久京師に匿る。幸盛盜を但馬・因幡の間に爲して、遂に勝久に偕に織田信長に歸す。

● 碑を立て、泣く ● 葬式をなし供養を誓むことの任務 ● 敵を攻滅して元就の靈魂を慰めんと ● 出雲國に在り ● かはやの中

初め信長尾張に起りて、近畿を略取す。武田信玄、上杉謙信、其東に割據し、皆使を元就に通じて、夾みて信長を攻めんと欲す。謙信特に將軍義輝に勸めて、元就を召致す。元就疾に罹りて答へず。三年二月、元春・隆景使を遣はして之に

於元就。欲夾攻。信長。謙信。特勸將軍義輝。召致元就。元就罹疾。不答。三年二月。元春。隆景。遣使答之。天正元年。信長。攻將軍義昭。輝元。與二叔。議遣安國寺僧。惠瓊。爲和解之。義昭免走。紀伊。二年。正月。尼子。勝久。借織田氏兵。入因幡。陷鳥取城。城本屬山名。豐國。爲武田氏所奪。豐國欲復之。因黨勝久。其部將大坪一之諫之。不聽。一之乃來奔。八月。元春。隆景。大舉入伯耆。降豐國。遂勝久。義昭之奔。紀伊。遂四依浮田直家。直家弗禮。乃來備後。自託於輝元。輝元謀於二叔。遂與織田氏絕。計納義昭於京師。

答ふ。天正元年、信長、將軍義昭を攻む。輝元、二叔と議して、安國寺の僧惠瓊を遣して、爲に之を和解す。義昭免れて、紀伊に走る。二年正月、尼子勝久、織田氏の兵を借りて、因幡に入りて、鳥取城を陥る。城は本、山名豊國に屬し、武田氏の奪ふ所と爲る。豊國之に復せんと欲す。因りて勝久に黨す。其部將大坪一之之を諫む。聽かず。一之乃ち來り奔る。八月、元春・隆景大舉して伯耆に入りて、豊國を降し、勝久を逐ふ。義昭の紀伊に奔るや、遂に西、浮田直家に依る。直家禮せず。乃ち備後に來りて、自ら輝元に託す。輝元、二叔に謀りて、遂に織田氏と絶ち、義昭を京師に納れんと計る。

● 一方に據りて勢を振ふ ● 禮を以て待遇せず

先是三村家親爲三村家所殺。蓋直家所使也。直家爲浦上氏將。終墓其備前美作。浦上宗景與家親子元親。皆請我兵討直家。直家懼。亦因僧惠瓊。請滅二氏。約以備中賂我。元親族親成告元親。通織田氏。元親勸隆景討之。三年夏。圍元親于松山。滅之。元親宗家穗田氏。前爲直家所滅。於是使元就第五子元清爲穗田氏。後居中山。賊以鎮備中。

是より先、三村家親、盜の殺す所と爲る。蓋し直家の使しむる所なり。直家は浦上氏の將たり。終に其備前・美作を窺ふ。浦上宗景、家親の子元親と、皆我が兵を請ひて直家を討つ。直家懼れて、亦僧惠瓊に因りて、二氏を滅さんと請ひ、備中を以て我に賂はんと約す。元親の族親成、元親は織田氏に通ずと告ぐ。穴戸隆家、隆景に勸めて之を討つ。三年夏、元親を松山に圍みて、之を滅す。元親の宗家穗田氏、前に直家の滅す所と爲る。是に於て、元就の第五子元清をして穗田氏の後爲らしむ。中山城に居りて、以て備中を鎮す。

● 浦上、三村 ● 圍ちんと約東す

信長方攻三一向僧徒于大坂。大坂來乞

信長、方に一向の僧徒を大坂に攻む。大坂來りて援を乞ふ。元春・隆景、兵を遣して之を援ひ、又糧船六百を餽り、兵艦三百を以て之を護送せしむ。七月、木津

授。元春隆景遣兵援之。又餽糧船六百。以兵艦三百護送之。七月。至木津川。能島來島氏。與織田氏水軍戰。破之。奪其二大艦。納糧而還。先是。讚岐香川氏。淡路菅氏。皆來屬我。五年。香川氏與國人戰。來乞援。七月。遣穗田元清。浦宗勝。赴之。破土佐援師。宗勝還。掠播磨海濱。與國人黑田孝高戰。而還。

川に至る。能島・來島氏、織田氏の水軍と戦ひて、之を破り、其二大艦を奪ひて、糧を納れて還る。是より先、讚岐の香川氏、淡路の菅氏、皆來りて我に屬す。五年、香川氏、國人と戦ひて來りて援を乞ふ。七月、穗田元清・浦宗勝を遣して、之に赴かしめて、土佐の援師を破る。宗勝還りて、播磨の海濱を掠め、國人黒田孝高と戦ひて還る。

● 一向宗 ● 兵糧船 ● 兵糧を取取めて

孝高導織田氏將羽柴秀吉。攻三木。尼子勝久爲先鋒。出山陽道。取

孝高、織田氏の將羽柴秀吉を導きて、別所氏を三木に攻む。尼子勝久先鋒と爲りて、山陽道に出でて、上月城を取る。城は浮田直家に屬す。直家、援を隆景に乞ひて、之を復せんと欲す。是の時に當りて、丹波・但馬の豪傑、使をして元春に請ひて、來りて京師を襲はしむ。元春、兒玉春種を遣して、先づ往きて之を

可敵。今秀吉村重等爭功不和。天雨月黑。宜夜襲之也。元春使三之謀。隆景。隆景曰。舉信長全兵。不過二十萬。東備武田上杉。西備大坂雜賀。減六七萬。焉而見在此者。十萬。即自來二三萬而已。我以七萬當之。何必恐也。且我自北路襲。地形不便。自南路襲。浮田氏心難測。皆非萬全之策。不若固壁毋戰。彼兵衆而糧不繼。將自去矣。乃止。

に備へて、六七萬を減す。而して見に此に在る者十萬なり。即ち自ら來るは二三萬のみ。我れ七萬を以て之に當るに、何ぞ必ずしも恐れん。且つ我れ北路より襲ふは、地形便ならず。南路より襲ふは、浮田氏の心測り難し。皆萬全の策に非ず。壁を固くして戦ふ毋きに若かず。彼れ兵衆くして糧繼がず。將に自ら去らんとすと、乃ち止む。

● 一本に十萬人とあり ● 全體の兵士 ● 現在 ● 測り知られず ● 全く安全なるはかりごと

六月。美作出雲兵。與東兵關于熊川。秀吉自中軍遣二萬騎出援。

六月、美作・出雲の兵、東兵と熊川に關ふ。秀吉、中軍より二萬騎を遣して、出でて援はしむ。元長、弟元氏・廣家と、萬人を以て流を亂りて逆へ戦ふ。東軍皆騎兵、馳突して來る。元長、士卒に令して曰く、跪けと。東軍入る能はず。

元長與弟元氏廣家以二萬人亂流逆戰。東軍皆騎兵。馳突而來。元長令士卒曰。跪。東兵不能入。遂巡而退。元長令曰。起。如此者再三。追北二十餘町。荒木氏不敢援。東兵浮田引還。秀吉知我上。

遂巡して退く。元長令して曰く、起てと。此の如くする者再三なり。北ぐるを追ふこと二十餘町。荒木氏敢て東兵を援はず。浮田氏敢て西兵を援はず。西兵深く入りて、退くに難む。天野隆重、手兵を引き、高岡に上りて陣す。西兵乃ち引き還る。秀吉、我の力争す可からざるを知りて、信長に請ひて城を棄てて去る。城陷る。勝久、自殺す。山中幸盛復た降る。之を甲部川の上に殺す。

● 播磨國に在り ● 馬を走らして突進す ● ヲグ／＼とためらひて ● カブ／＼にて強ひて ● 備中國に在り、今河邊川と書す

直家已潛通。信長於是稱疾愈來見。元

直家已に潛かに信長に通す。是に於て、疾癒ゆと稱して來り見ゆ。元長、元春に白して曰く、直家異圖あり。見請ふ、席に即きて之を誅せんと。杉原盛重、又

長白元春曰。直家有異圖。兒請即席誅之。杉原盛重又請之。隆景曰。彼無證。而我啓豐。縱得誅之。其國人皆立嗣以抗我。無爲也。乃止。已而直家因惠瓊請三師乘勢徇播磨。將軍義昭亦促之。元春降景乃進。陣黑澤山。直家享三帥于八幡山。欲伏甲擒之。直家弟

之を請ふ。隆景曰く、彼れ證無くして、我れ懲を啓く。縦ひ之を誅するを得るも、其國人皆、嗣を立てて以て我に抗せん。爲す無れと。乃ち止む。已にして直家、惠瓊に囚りて、二帥に勢に乗じて播磨を徇へんと請ふ。將軍義昭も亦之を促す。元春・隆景、乃ち進みて、黒澤山に陣す。直家、二帥を八幡山に享し、甲を伏せて之を擒にせんと欲す。直家の弟忠家、潛かに來りて之を告ぐ。元春・隆景乃ち人をして直家に言はしめて曰く、聞く、公、我が兄弟の首を以て織田氏に獻ぜんと欲すと。我が兄弟、並に少主を輔く。未だ尊意に順ふ能はず。必ず之を獲んと欲せば、請ふ、旗鼓を以てせよ。敢て辭せざる所なりと。且日、路を分ちて西に歸る。直家敢て追はず。

- 一本に白の上に國字あり
- 後嗣を立て、我に反抗せん
- つまらぬ事なれば止めよ
- 播磨國に在り
- もてなし
- 戰爭を以てせよ

忠家潛來告之。元春隆景乃使三人言直家曰。聞公欲下以我兄弟首獻織田氏。我兄弟並補少主。未能順尊意。必欲獲之。請以三旗鼓。所不敢辭也。且日。分路西歸。直家不敢追。

十月、荒木村重、信長に叛きて、兵庫・華隈の諸城に據り、別所長春と、皆援を我に乞ふ。我れ方に浮田氏を患へ、又南條元續、東軍に通ずと聞きて、未だ赴き援ふに暇あらず。獨糧を餽りて之を助く。丹生・淡河の二城を築きて、西は三木に達し、東は華隈に達す。

- 二城共に播磨國に在り
- 同上
- 播磨國に在り

十月。荒木村重。叛信長。據兵庫。華隈諸城。與別所長治。皆乞援於我。我方患浮田氏。又聞南條元續。通東軍。未暇赴援。獨餽糧助之。築丹生淡河二城。西達三木。東達華隈。

七年。二月。秀吉遣弟秀長。夜襲取丹生。淡河。定範穿塹。布粟苔。以待。秀長至。梗

七年二月、秀吉、弟秀長を遣して、夜襲ひて丹生を取る。淡河定範、塹を穿ち、渠を布きて以て待つ。秀長至る。梗りて進むを得ず。定範、牝馬數十匹を募り得て、驅りて敵軍に入る。軍馬、牝を争ひて相闘む。什伍大に亂る。定範、兵を縱ちて之に乗じ、撃ちて秀長を走らす。其從子説きて曰く、秀吉必ず忿りて來ら

不得進。定範
募得牝馬數
十匹。驅入敵
軍。軍馬爭牝
相躐。什伍大
亂。定範縱兵
乘之。擊走秀
長。其從子說
見敵而去。

ん。窮して走るは、勝ちて退くに若かずと。乃ち收めて三木に入る。秀吉來りて、敵を見ずして去る。

● 敵兵を妨ぐる爲めの細の巻 ● くみぐみ

是歲。二帥輔
輝元。東伐。取
美作五城。直
家不敢出。四
月。南條元續
叛。通東軍。其
族山田直重
諫之。元續弗
聽。欲殺之。直
重來奔。八月。

是の歲、二帥、輝元を輔け東伐して、美作の五城を取る。直家敢て出でず。四月、南條元續叛きて、東軍に通ず。其族山田直重、之を諫む。元續聽かず。之を殺さんと欲す。直重來り奔る。八月、直家升形・祝山の二城を攻め、下す能はず。元春、兵に將として赴き援ふ。其去るを聞きて、轉じて元續を種石城に攻む。杉原盛重、先鋒と爲りて、敵將南條信正と、長瀬川を夾みて陣す。兵を分ちて三と爲し、川を渡りて大に戦ひ、信正を斬る。元春乃ち種石を環して之に

若す。元續出で戦ひて、輒ち敗る。

● 二城共に美作國に在り ● 伯耆國に在り ● 一本に二とあり

直家攻二升形
祝山二城。不
能下。元春將
兵赴援。聞其
去。轉攻元續
種石城。杉原
重盛爲先鋒。與敵將南條信正夾長瀬川陣。分兵爲三。渡川大戰。斬信正。元春乃環種石。元續出戰。輒敗。

十一月、元春、隆景、復た輝元を輔けて東伐して、備中の忍山を抜く。十二月、我が饑を三木に餽る者、敵壘の將谷衛好を襲殺す。長治兵を出して之に應じ、大に敗る。淡河定範之に死す。八年春、三木陥り、長治自殺す。直家、秀吉の令を以て、八濱に城く。二弟忠家・基家を以て守らしむ。二月、隆景、元清を遣して之を攻めしめて、基家を殺す。四月、秀吉、但馬、因幡を侵して、鹿野城を陥れて、山名氏の質を取る。元春赴き援く。及ばず。七月、荒木村重來り奔る。是の月、秀吉、山名豊國を鳥取城に圍みて、質を城外を縛り、鎗を以て之に擬して、以て之を誘ひ降す。城兵曰く、我れ數々毛利氏に叛きて、誅せられず。今復

十一月。元春
隆景復輔輝
元東伐。拔備
中忍山。十二
月。我饑。讓三
木者。襲殺敵
壘將谷衛好。
長治出兵。應
之。大敗。淡河
定範死之。八
年春。三木陷。
長治自殺。直
家以秀吉令。

十一月、元春、隆景、復た輝元を輔けて東伐して、備中の忍山を抜く。十二月、我が饑を三木に餽る者、敵壘の將谷衛好を襲殺す。長治兵を出して之に應じ、大に敗る。淡河定範之に死す。八年春、三木陥り、長治自殺す。直家、秀吉の令を以て、八濱に城く。二弟忠家・基家を以て守らしむ。二月、隆景、元清を遣して之を攻めしめて、基家を殺す。四月、秀吉、但馬、因幡を侵して、鹿野城を陥れて、山名氏の質を取る。元春赴き援く。及ばず。七月、荒木村重來り奔る。是の月、秀吉、山名豊國を鳥取城に圍みて、質を城外を縛り、鎗を以て之に擬して、以て之を誘ひ降す。城兵曰く、我れ數々毛利氏に叛きて、誅せられず。今復

城ノ于ニ八濱。以ニ
二弟忠家基
家守焉。二月。
隆景遣元清
攻之。殺基家。
四月秀吉使
但馬因幡。陷
鹿野城。取山
名氏質。元春赴
援。不及。七月。
荒木村重來奔。
是月。秀吉圍山
名豐國鳥取城。
縛質城外。以
槍擗之。以誘
降之。城兵曰。
我數叛毛利氏。
而不被誅。今可
復叛乎。秀吉
怒。殺質。次至
豐國。遂降。秀
吉削其邑而去。
城兵皆叛。豐國
奔播磨。城兵誘
我一將。遣吉川
經家守之。又城
于丸山。

た叛くべけんやと。秀吉怒りて、質を殺して、次ぎて豊國の女に至る。豊國遂に降る。秀吉、其邑を削りて去る。城兵皆豊國に叛く。豊國、播磨に奔る。城兵、我が一將を請ふ。吉川經家を遣して之を守らしむ。又丸山に城く。

● 敵營の守將 ● 因幡國に在り ● 同上

九年七月。秀吉、數萬騎を以て、鳥取・丸山を圍みて、其糧道を絶つ。吉岡質休、吉岡城に在り。夜、敵營を襲ふ。又敵兵を迎へ撃ちて。之を走らす。秀吉の馬標を奪ひて、之を輝元に獻す。秀吉使を遣して、丸山城を招き降さんとす。城將、其使者を斬りて、屍を城外に投ず。秀吉、大に怒りて、之を攻むること

九年七月。秀吉以數萬騎。圍鳥取丸山。絶其糧道。吉岡質休在吉岡城。夜襲敵

九年七月、秀吉、數萬騎を以て、鳥取・丸山を圍みて、其糧道を絶つ。吉岡質休、吉岡城に在り。夜、敵營を襲ふ。又敵兵を迎へ撃ちて。之を走らす。秀吉の馬標を奪ひて、之を輝元に獻す。秀吉使を遣して、丸山城を招き降さんとす。城將、其使者を斬りて、屍を城外に投ず。秀吉、大に怒りて、之を攻むること

營。又迎撃敵兵。走之。奪秀吉馬標。獻之輝元。秀吉遣使。招降丸山城。城將斬其使者。投屍城外。秀吉大怒。攻之益急。輝元欲援之。而國兵四戍疆上。在者甚寡。隆景至富田。召募數日。未進。元春曰。鳥取吾管内也。吾不可以待。九月。以六千人。馳至伯耆。則城已陷矣。秀吉欲誅國人。免經家。經家弗聽。與丸山鳥取將領。皆自殺。以免其兵。元春得報。切齒曰。吾猶往爲經家一戰。將發。又有報曰。秀吉入伯耆矣。乃留陣于馬山。

益々急なり。輝元、之を援けんと欲す。而して國兵、四もに疆上を成りて、在る者甚だ寡し。隆景、富田に至りて、召募する數日にして、未だ進まず。元春曰く、鳥取は吾が管内なり。吾れ以て待つ可からずと。九月、六千人を以て馳せて伯耆に至れば、則ち城已に陥る。秀吉、國人を誅して經家を免さんと欲す。經家聽かず。丸山・鳥取の將領と皆自殺して、以て其兵を免れしむ。元春、報を得て、齒を切して曰く、吾れ猶ほ往きて經家の爲に一戦せんと。將に發せんとす。又報あり。曰く、秀吉伯耆に入ると。乃ち留りて馬山に陣す。

● 因幡國に在り ● 馬にるし ● 國境 ● 齒を切して ● 伯耆國に在り

十月。秀吉至。

十月、秀吉至る。八萬騎と稱す。種石城の後に陣して、馬山を下視す。馬

稱二八萬騎。陣二種石城後。下二視馬山。馬山。左右湖山。後迫二大川。纒通二一橋。人人無二不震怖。元春命絕。橋。毀。舟。三澤。爲。虎。益。田。藤。包。私。議。曰。敵。衆。新。勝。不。若。避。其。銳。而。再。舉。謂。入。說。之。乃。與。偕。謁。元。春。元。春。方。釋。甲。而。坐。曰。天。大。雪。諸。君。且。留。飲。因。圍。爐。命。酒。醉。

山の左右は湖山にして、後は大川に迫り、纒に一橋を通す。人人震怖せざるは無し。元春、命じて橋を絶ち、舟楫を毀ちて、自ら走路を絶つ。三澤爲虎・益田藤包、私かに議して曰く、敵は衆にして新に勝つ。其銳を避けて再舉するに若かず。請ふ、入りて之を説かんと。乃ち與に偕に元春に謁す。元春、方に甲を釋きて坐して曰く、天、大に雪ふる。諸ふ君且く留り飲めと。因りて爐を圍み酒を命ず。醉ひて解睡す。二人敢て説かず。元長・廣家、父の命を以て、諸陣を巡視す。塹を穿ち柵を植てて曰く、敵、明日必ず來らんと。曉くる比、敵數千騎、糧を種石に納る。元春、銃手を遣して、其一將を斃す。敵繼ぎて出づる者萬餘なり。元長・廣家、二千人を以て之に馳す。秀吉急に其兵を收む。南條元續請ひて曰く、盍ぞ一戦して之を擒にせざると。秀吉晒ひて答へず。明日、兵を引き去る。元長、之を尾撃せんと請ふ。元春計さず。

● よるひみせる ● いびきをかきて眠る ● 續砲方

面解睡。二人不敢説。元長廣家以父命巡視諸陣。穿塹植柵曰。敵明日必來。比曉。敵數千騎。納糧於種石。元春遣銃手斃其一將。敵繼出者萬餘。元長廣家以二千人馳之。秀吉急收其兵。南條元續請曰。盍一戰擒之。秀吉晒弗答。明日引兵而去。元長謁元春。弗許。

十年正月。元春欲復因幡。二月。將兵攻大崎。時杉原盛重既死。其子元盛先登。元春遂復二二城。攻鳥取。四月。秀吉將兵八萬入備中。攻高松城。引甲部川灌之。守將清水高治募城內染戶。收板數百。

十年正月、元春、因幡を復せんと欲す。二月、兵に將として大崎を攻む。時に杉原盛重既に死す。其子元盛先登す。元春、遂に二城を復して、鳥取を攻む。四月、秀吉、兵八萬に將として、備中に入り、高松城を攻め、甲部川を引き、之に灌ぐ。守將清水高治、域内の染戸に募りて、板數百枚を收め、舟を造りて出でて戦ふ。隆景急を聞きて、援を元春に乞ふ。元春、即ち發せんと欲す。山陰の將士皆曰く、上月の役には、左公我が師を牽きて自ら援ひ、馬山の役には、富田に留りて來らず。今、鳥取幾ど復す。何ぞ此を棄てて彼に赴くを爲さんと。元春曰く、隆景、馬山に來らざるは、必ず以有るなり。吾れ坐ながらにして其危きを視れば、獨り宗家を如何せん。諸君、往くを欲せずんば、吾れ寧ろ獨身、之に赴き

枚造舟出戰。隆景聞急。乞援於元春。元春即欲發。山陰將士皆曰。上月之役。佐公率我師自援。馬山之役。留富田不來。今鳥取復。何棄此赴彼。爲元春曰。隆景不來。馬山必有以也。吾坐視其危。獨如宗家何。諸君不欲往。吾寧獨身赴之。與隆景共死。將士皆謝。願從。乃留杉原元盛。當鳥取城。而南會隆景。合兵四萬。軍于廂山。輝元陣其西三里。相持未戰。

● 漆物屋 ● 小早川隆景 ● 本家 ● 備中國に在り

五月。日幡城叛。隆景遣兵攻之。走東將木村隼人。秀吉不敢出援。加茂城亦叛。納東兵。元長廣家以萬人赴之。秀吉復

五月、日幡城叛く。隆景、兵を遣して之を攻めて、東將木村隼人を走らす。秀吉敢て出でて援はず。加茂城も亦叛きて、東兵を納る。元長・廣家、萬人を以て之に赴く。秀吉復た兵を收む。我が兵數、利を獲て、而して高松、旦夕將に没せんとす。元春、信長將に自ら來らんとすと聞くや、一戰せんと欲す。隆景曰く、阿兄何ぞ自ら輕んずる。乃ち一隊將の爲に倣ふかと。元春曰く、家君、一夜を以

收兵。我兵數獲利。而高松且夕將没。元春聞信。長將自來也。欲一戰。隆景曰。阿兄何自輕。乃倣一隊將之爲乎。元春曰。家君以一夜克陶氏。以七年減尼子氏。蓋小敵宜緩困之。而大敵宜急挫之也。我以北兵。夜襲其北。而卿應其南。必克之。浮田氏。望不戰走耳。

て陶氏に克ち、七年を以て尼子氏を滅す。蓋し小敵は宜しく緩かに之を困しむべく、而して大敵は宜しく急に之を挫くべきなり。我れ北兵を以て、夜、其北を襲ひ、而して卿其南に應ぜば、必ず之に克たん。浮田氏は觀望して、戰はずして走らんのみと。隆景曰く、然りと。會々軍中、三澤爲虎款を秀吉に通すと流言す。六月三日、二帥、元長と密かに廂山の絶頂に會して、議して曰く、諸將の意、皆測る可からず。今の計を爲すは、宜しく牙營に柵して、敵を迎へて決戦すべしと。既にして罷む。元長徑ちに爲虎に詣りて、其膝に迫りて坐す。曰く、聞く卿は秀吉と款を通すと。信なるか。信ならば則ち吾が頭を斫り、以て秀吉に送れと。爲虎、惶駭して曰く、是れ讒口に出づるのみと。乃ち誓書を獻す。衆情稍々定る。終に再明秀吉を襲はんと期す。

● 備中國に在り ● 同上 ● 望み見て ● 言ひ觸らす ● 爲虎の膝に近寄りて坐す ● ちそれおどろく ● 衆人の心あちつく

隆景曰。然。會軍中流。言三澤爲虎通。款秀吉。六月三日。二帥與元長。密會。三山絕頂。議曰。諸將意皆不可測。爲今之計。宜下榻于牙營。迎敵決戰。既罷。元長徑詣爲虎。迫其膝。坐曰。聞卿與秀吉通款。信乎。信則斫吾頭。以送秀吉。爲虎惶駭曰。是出讒口耳。乃獻誓書。衆情稍定。終期。再明製秀吉。

僧惠瓊素歸心於秀吉。爲講和議。秀吉曰。苟使高治自殺。則我可藉手而去。惠瓊以告二帥。二帥弗肯。明日。惠瓊自入城。諭高治。高治曰。我一死。可以兩國。何敢不死。乃與兄月清。軍監末近。乘

僧惠瓊素より心を秀吉に歸す。爲に和議を講す。秀吉曰く、苟も高治をして自殺せしめば、則ち我れ以て手を藉きて去るべしと。惠瓊以て二帥に告ぐ。二帥肯はず。明日、惠瓊自ら城に入りて高治を諭す。高治曰く、我が一死以て兩國を和す可くんば、何ぞ敢て死せざらんやと。乃ち兄月清・軍監末近と、舟に乗りて城を出で、舟中に自裁して、以て城兵を出す。惠瓊還り報ず。二帥、之が爲に哀を發す。遂に盟約を爲して、地を割きて和を講じ、南は甲部川を界とし、北は馬山を界とし、輝元の季父元綱を送りて質と爲す。秀吉、森高政を送りて之に答ふ。即日、東軍解きて去る。元長、山頂に在りて、之を視て曰く、彼れ故なくして和を講ずるは、必ず内變あらんと。既にして告ぐるものあり、曰く、信長、明智

舟出城。自裁舟中。以出城兵。惠瓊還報。二帥爲之發哀。遂爲盟約。割地講和。南界。甲部川。北界。馬山。送輝元。季父元綱。爲質。秀吉送森高政。答之。即日。東軍解去。元長。在山頂。視之。曰。彼無故講和。必有内變。既而有告曰。信長爲明智光秀所弑。元長曰。果然。吾不與盟。請追擊之。秀吉可。生擒也。浮田直家亦請爲援。二帥曰。乘喪背盟。不義莫大焉。終弗許。後秀吉遣我將士。款書數通。有三澤氏臣雲波書。爲虎乃誅之。輝元既與秀吉和。猶領八州。歲入百二十萬石。

光秀の弑する所と爲ると。元長曰く、果して然り。吾れ盟に與らず。請ふ、之を追撃せば、秀吉、生擒す可きなりと。浮田直家も亦援を爲さんと請ふ。二帥曰く、喪に乗じて盟に背くは、不義これより大なるは莫しと。終に許さず。後、秀吉、我が將士の款書數通を遣る。三澤氏の臣雲波の書有り。爲虎乃ち之を誅す。輝元既に秀吉と和す。猶ほ八州を領して、歲入百二十萬石あり。

● 高治の自殺を以てそれを好き慶會にして ● 内部に變事あらん ● 牛捕にすべきなり ● 一歳の收入

七月。隱岐。經清弑其叔父清家。初清家

七月、隱岐の經清、其叔父清家を弑す。初め清家、兄に代りて隱岐を領す。兄の子經清を養ひ、己が子甚五を出して、吉田に質とす。經清、款を信長に通せん

代兄領隱岐。養子經清。出己子甚五。實于吉田。經清欲通款信。長清家弗聽。及信長死。經清誘殺之。以滅口。因啓清家通敵。臣誅之。元春不信。甚五訴冤。請自復仇。許之。隱岐士民爲內應。終誅殺經清。八月。山田重直誘殺南條氏精兵數百。九月。伯耆人相驚曰。秀吉戰死。上國。重直且來襲矣。元春怖。走入京師。其子小鴨元清亦走。秀吉笑曰。元春設蜚語。不戰而走之耳。元春之智。元續之怯。皆無雙者也。因請元春復之。

と欲す。清家聽かず。信長死すに及びて、經清、之を誘殺して、以て口を滅す。因りて啓す、清家、敵に通ず、臣、之を誅すと。元春、信せず。甚五、冤を訴へて自ら仇を復せんと請ふ。之を許す。隱岐の士民、内應を爲して、終に經清を誅殺す。八月・山田重直、南條氏の精兵數百を誘殺す。九月、伯耆の人相驚きて曰く、秀吉、上國に戰死し、重直、且に來り襲はんとすと。元續怖れて、走りて京師に入る。其子小鴨元清も亦走る。秀吉、笑ひて曰く、元春、蜚語を設けて、戰はずして之を走らすのみ。元春の智、元續の怯、皆無雙なる者なりと。因りて元春に請ひて之を復す。

● 清家を試して己が腹事の門をを防ぐ ● 申上ぐ ● 諷内 ● 根もなきうはま

秀吉誅明智光秀。遂代織田氏。居大坂。元春羞風。下之也。居常快。不樂。讓家。元長而老。十一年九月。隆景遣弟秀包。及廣家。赴大坂。尋去歲之盟。秀吉悅。秀包有姿容。留之。

秀吉、明智光秀を誅して、遂に織田氏に代る。大坂に居る。元春、之に屈下するを羞ぢ、居常、快快として樂します。家を元長に讓りて老す。十一年九月、隆景、弟秀包及び廣家を遣して、大坂に赴きて、去歲の盟を尋がしむ。秀吉、秀包の姿容有るを喜びて、之を留む。

● 秀吉に屈服して其配下に立つを恥辱とす ● 平生不快に思ふ ● 容貌のすぐれたるを愛して

先是。杉原景盛殺兄元盛。誣以叛。事覺。七月。隆景遣三弟元秋。元政。元康。攻殺。景盛。以其弟次郎。承杉原氏後。

是より先、杉原景盛、兄の元盛を殺して、誣ふるに叛を以てす。事覺る。七月、隆景、三弟元秋・元政・元康を遣して、攻めて景盛を殺し、其弟次郎を以て杉原氏の後を承けしむ。

● 叛を圖れりといつはる

十三年四月。秀吉伐南海。令隆景元長入伊豫。元長稱疾歸。廣家代之。七月。定伊豫。秀吉徙河野通信于三原。令隆景代領其國。賜僧惠瓊來島某各萬石。十月。隆景元長如大坂。秀吉令諸將郊迎。曰。向使兩川變約。則吾豈得至此。因獎之。

十三年四月、秀吉、南海を伐ちて、隆景・元長をして、伊豫に入らしむ。元長疾と稱して歸り、廣家、之に代る。七月、伊豫を定む。秀吉、河野通信を三原に徙し、隆景をして代りて其國を領せしむ。僧惠瓊・來島某に各々萬石を賜ふ。十月、隆景・元長、大坂に如く。秀吉、諸將をして郊迎せしめて曰く、向に兩川をして約を變ぜしめば、則ち吾れ豈に此に至るを得んやと。因りて之を獎す。

● 途中に出迎ふ ● 吉川・小早川

時秀吉將伐島津氏。囑元長。請元春爲先鋒。約封之筑前。元春羞爲秀吉所驅。

時に吉秀、將に島津氏を伐たんとす。元長に囑して、元春に請ひて先鋒と爲し、之を筑前に封せんと約す。元春、秀吉に驅使せらるるを羞ぢて、肯はず。是の歳、秀吉、奏請して、輝元を以て從四位下に敍し、侍從に任す。黒田孝高を遣して元春を促す。元春起たず。輝元曰く、公、我が爲に一たび出でよと。元春已むを得

ず、乃ち隆景と俱に發して、攻めて小倉城を抜く。將に陣を松山に移さんとす。疽、背に發して行くを得ず。隆景、孝高と攻めて、閭津を抜き、障子岳を下し、進みて、賀春岳を攻む。元春、擦えて將に發せんとす。黒田氏之を襲して、鮭を供す。瘡復た劇し。乃ち二子に遺囑するに後事を以てし、言、私に及ばず。終に卒す。年五十七なり。元長、廣家をして喪を奉じて安藝に歸らしめて、而して自ら隆景に従ひて、賀春の守將高橋種元を降す。

● 追討して使役せらるるを恥辱に思ひて ● 豊前國に在り ● 種の一類、悪性の腫物 ● 豊前國に在り
● 同上 ● 同上 ● 遺言して頼むに死後の事を以てし ● 遺言は皆公事のみ

使弗肯。是歳。秀吉奏請。以輝元敍從四位下。任侍從。遣黒田孝高。促元春。元春不起。輝元曰。公爲我一出。元春不得已。乃與隆景俱發。攻拔小倉城。將移神松山。疽發背。不得行。隆景與孝高。攻拔閭津。下障子岳。進攻賀春岳。元春瘡將發。黒田氏襲之。供鮭。瘡復劇。乃遣囑二子。以後事。言不及私。終卒。年五十七。元長使廣家奉喪歸安藝。而自從隆景。降賀春守將高橋種元。

十五年三月。豐臣秀長至。十五年三月、豊臣秀長至り、我が兵を合せて日向に入り、耳川に抵りて、進み

合我兵入二日向。抵二耳川。進圍二高城。島津家久夜襲其營。秀長畏其兵。懼悍。不敵。出。元長欲逆戰。弗許。秀吉至。龍造寺氏以下皆降。五月。島津氏請和。秀吉徙隆景于筑前。治名島。賜秀包筑後三郡。治來目。元長道病。六月。遂卒。元長倔強類父。爲秀吉所畏。惡。常有退

て高城を圍む。島津家久、夜、其營を襲ふ。秀長、其兵の懼悍を畏れて、敢て出でず。元長逆へ戦はんと欲す。許さず。秀吉至る。龍造寺氏以下皆降る。五月、島津氏、和を請ふ。秀吉、隆景を筑前に徙して、名島に治せしめ、秀包に筑後の三郡を賜ひて、來目に治せしむ。元長、道に病み、六月、遂に卒す。元長、倔強なること父に類して、秀吉の畏惡する所と爲る。常に退去の志ありて、歌詠に見す。遺命して廣家を立つ。黒田孝高、素より廣家の色美を悦びて、之と親善なり。爲に秀吉に言ひて之を立つ。隱岐を襲ぎ食む。廣家、初名は繼信といふ。是に於て、今の名に改む。是の歳冬、肥後・豊前に盜起る。隆景・廣家、命を受けて、討ちて之を平ぐ。筑前の士民、隆景の賢聲を稔聞して、人人相慶す。隆景務めて其禁網を潤くして、漸く治教を修む。下野の足利學校に倣ひて、餐舎を建てて、先聖を釋奠す。時に亂離、日久し。人始めて絃誦の聲を聞く。

● 強弱にして意を曲げざる事 ● 畏れ懼はる ● 美男 ● 或ひは難言に作る ● 賢き評判をかねてより

聞き居る ● 法を細やかにして ● 孔子 ● 孔子の祭 ● 田鼠れ人民散りてくなる ● 琴を短じ、詩を歌ふ、即ち管樂圖書にて、皆學校にて學ぶ所なり

去之志。見二於二歌詠。遺命立二廣家。黒田孝高素悦二廣家。色美。與之親善。爲言二秀吉立之。製二食隱岐。廣家初名繼信。於是改二今名。是歳冬。肥後豊前盜起。隆景廣家受命。时而平之。筑前士民。稔聞隆景賢聲。人人相慶。隆景務潤其禁網。漸修治教。倣二下野足利學校。建二餐舎。釋二貧先聖。時亂離日久。人始聞二絃誦之聲。

十六年、輝元、參議に任じ、隆景・廣家・秀包皆四位の侍従と爲る。九月、秀吉浮田秀家の女を養ひて、廣家に妻はす。初め廣家の父兄、皆西海の役に死す。秀吉曰く、吾れ之に許すに筑前を以てして、其死に會ひて果さざりき。當に西海の一州を以て其孤を恤むべしと。石田三成・大谷吉隆、秀吉に説きて曰く、輝元の領する所、已に中國に跨りて、隆景・秀包、各々一國を領す。備前の浮田氏、素より之と惡し。以爲らく相禁せしむべし。而して亦吉川に婚して、吉川、今又封を受けんとす。天下事無くんば則ち已む、苟も事有らば、則ち關以西は皆

其死不果。當以四海一州。懷中其孤。石田三成。大谷吉隆。說秀吉曰。輝元所領已跨中國。而隆景秀包各領。一國備前浮田氏素與之惡。以爲可使相禁也。而亦婚於吉川。吉川今又受封矣。天下無事。則已。苟有事。則關以西皆歸毛利氏。爲今之計。莫若就輝元封內。割中予一二州。是名賜封。而實分其勢也。秀吉然之。乃令輝元以出雲伯耆數郡。加賜廣家治富田。

毛利氏に歸せん。今の計を爲すに、輝元の封内に就きて、一二州を割き予ふるに若くは莫し。是れ名は封を賜ひて、實は其勢を分つなりと。秀吉、之を然りとす。乃ち輝元をして出雲・伯耆の數郡を以て、廣家に加賜せしめて、富田に治せしむ。

● 變事無ければそれまでの話 ● 差當りての計としては

十八年。秀吉東伐北條氏。使輝元守京師。隆景守清洲。廣家守岡崎。北條氏不降。召隆景謀之。對曰。先人

十八年、秀吉、東、北條氏を伐つ。輝元をして京師を守り、隆景をして清洲を守り、廣家をして岡崎を守らしむ。北條氏降らず。隆景を召して之を謀る。對へて曰く、先人富田を圍むや、攻戰を休めて持久を示し、多く反間を縱ちて、其君臣をして相疑はしめ、其妻孥を索めて之を招き降すと。秀吉曰く、吾れ之を師とせんと。遂に其計を以て北條氏を平ぐ。是より先、輝元、吉田の隘狹を患へ

て、己斐に城く。十九年、成る。徙る。名を廣島と更む。

● 原野國に在り ● 三河國に在り ● 敵に間諜を送つて ● 妻子 ● 手本とせん

圍富田。休攻。示持久。多縱反間。使其君臣相疑。索其妻孥。而招降之。秀吉曰。吾師之也。遂以其計。平北條氏。先是。輝元患吉田隘狹。城于己斐。十九年成。徙焉。更名廣島。

文祿元年。秀吉發兵伐朝鮮。毛利吉川。小早川氏爲後隊。諸將在。朝鮮。連署。稟事。隆景。花押。點畫甚繁。福島正則。傍觀。謂之曰。押字宜疏。不宜密。不然。則臨死作遺狀。不能

文祿元年、秀吉、兵を發して朝鮮を伐つ。毛利・吉川・小早川氏、後隊と爲り、諸將朝鮮に在り、連署して事を稟す。隆景、花押の點畫甚だ繁し。福島正則傍觀して之を謂ひて曰く、押字は宜しく疏なるべし。宜しく密なるべからず。然らずんば、則ち死に臨みて遺狀を作るに、速かに成る能はじと。隆景笑ひて曰く、大丈夫當に尸を原野に横たふべし。何ぞ遺狀を以ふるを爲さんと。正則、愧づる色あり。此時に當り、浮田秀家・石田三成等の諸將、國都に在り。小西行長、先鋒と爲りて、進みて平壤に據る。平壤以南、國都に至るまで、城砦相屬す。二年正月、明將李如松、大兵を率ゐて、來りて朝鮮を援ひて、平壤を陷る。行長、敗

速成也。隆景笑曰。大丈夫當橫尸原野。何以遺狀爲。正則有愧色。當此時。浮田秀家石田三成等諸將。在國都。小西行長爲先鋒。進據平壤。平壤以南至國都。城皆相屬。二年正月。明將李如松率大兵來援。朝鮮陷平壤。行長敗走。大友義統亦棄城走。秀包與黑田長政。將兵迎。行長殿而退。如松乘勝南下。秀家等令諸城皆解。還萃於國都。隆景守開城。獨不肯還。曰。諸君皆去。吾當獨留。吾受命外征。固不期生。吾老矣。願與明人一戰。使明人知日本有。小早川隆景者也。即敗死。毀一老翁。何損於國哉。秀家等促之再三。隆景不得已而還。

走す。大友義統も亦城を棄てて走る。秀包、黒田長政と、兵に將として行長を迎へて、殿して退く。如松勝に乗じて南下す。秀家等、諸城皆をして皆解きて、還りて國都に萃らしむ。隆景開城を守りて、獨り肯て還らず。曰く、諸君皆去れ。吾れ當に獨り留るべし。吾れ命を受けて外征す。固より生を期せず。吾れ老いたり。願はくは明人と一戦して、明人をして日本に小早川隆景といふ者あるを知らしめん。即し敗死すとも、一老翁を喪ふ、何ぞ國に損せんやと。秀家等之を促すこと再三なり。隆景、已むを得ずして還る。

● 後隆景天皇の年號 ● 申上ぐ ● かき判の字畫甚だ多し ● 遺言狀 ● 男子たる者は原野に死す可きものなり ● 朝鮮の京城 ● 外國を征伐す ● 何ぞ國家の損害にならん

與秀包元康及立花宗茂三將合兵二萬。未至國都三十里而陣。數日。候騎報曰。如松兵既至。碧蹄驛。蓋十餘萬騎矣。隆景曰。是足以試我武矣。乃分兵爲六隊。迎戰。前軍二隊不利。卻。隆景揮槍大呼。而進。士卒皆奮莫不一當百。三將自左。右夾擊之。明軍遂大敗。如

秀包・元康及び立花宗茂の三將と、兵二萬を合せて未だ國都に至らざる三十里にして陣す。數日にして、候騎報じて曰く、如松の兵既に碧蹄驛に至る。蓋し十餘萬騎なりと。隆景曰く、以て我が武を試みるに足ると。乃ち兵を分ちて六隊と爲して、迎へ戦ふ。前軍の二隊、利あらずして卻く。隆景槍を揮ひて大に呼びて進む。士卒皆奮ひて、一、百に當らざるは莫し。三將、左右より之を夾み撃つ。明軍遂に大敗す。如松馬より墮つ。隆景の將井上某、之を鑑す。中らず。其將李有聲と鬪ひて之を斬る。如松、屢かに身を以て免る。北ぐるを逐ひて臨津に至り、斬首すること萬餘級なり。而して我が兵の死する者屢かに百餘人なり。如松開城に入りて、其失亡する所を視て、痛哭曉に徹す。遂に軍を退くること三次す。明軍大に沮む。明の和を我に乞ふは、此戦に本づくなり。四月、和成り、國都の諸將、撤して還らんと欲す。虜兵の追躡せんことを恐れて羣議決せず。隆景柱に倦りて睡る。石田三成、喚び起して計を問ふ。隆景曰く、火を縦ちて城を焚

松嶺馬。隆景將井上某縱之。不中。與其將李有聲。關而斬之。如松。匿以身免。遂北至臨津。斬首萬餘級。而我兵死者。僅百餘人。如松入開城。視其所。三失亡。痛哭。遂退。明軍大沮。明之乞和於我。本於此戰也。四月。和成。國都諸將。欲徵還。恐虜兵追躡。羣議不決。隆景倚柱而睡。石田三成。喚起問計。隆景曰。縱火焚城。更殿而退。何虞之有。從之。全軍而還。

き、更、殿して退くに、何の虞か之あらんと。之に従ひて、軍を全くして還る。

● 斥候の騎兵 ● 夜通しいたみ泣く ● 三日の道程 ● 退ひかく

六月。輝元。元義子。秀元。濟海。與諸將俱攻晉州。拔之。秀元。清子也。其幼元春。隆景目之。相語曰。何酷肖先君也。時秀吉欲下以其外甥。

六月、輝元の養子秀元、海を濟りて、諸將と俱に晉州を攻めて、之を抜く。秀元は、元清の子なり。其幼なるとき、元春・隆景之を目して、相語りて曰く、何ぞ酷だ先君に肖ると。時に秀吉、其外甥秀秋を以て、毛利氏の後と爲さんと欲す。或ひと、以て隆景に告ぐ。隆景、素より秀吉の己を畏忌するを知り、且つ其封を受くるを屑しとせず。之を返致せんと欲す。是の言を聞くに及びて、竊かに度りて曰く、他人をして我が宗家を泪さしむ可からず。且つ秀秋は妄庸の人なり。

之を養ふは、是れ禍を養ふなり。吾れ寧ろ其弊に任ぜんと。己にして秀吉、從容として之に問ひて曰く、參議齡強にして嗣なし。何如と。隆景、卒かに對へて曰く、既に穂田氏の子を養へりと。秀吉、慄然として曰く、吾れ未だ之を知らざるなりと。隆景人をして、馳せて輝元に君けしめて、秀元を立てしむ。遂に秀秋を請ひて己が子と爲す。秀吉喜びて之を許す。乃ち之に筑前を譲り與へて、自ら三原に老す。秀吉始めて韓を伐つ年の年なり。肥前より航して大坂に歸る。大浦を過ぐ。舟人逆を謀りて、故に舟を礁に觸れて、殆ど溺る。秀元、走舸を以て之を救ふ。秀吉、舟人を梟し、秀元を挈へて京師に入り、奏して四位の侍從と爲す。其德に報せしなり。遂に外征の命あり。年甫めて十五なり。

● 見て ● 妻の方のをひ ● 長れ疑む ● 本家 ● 毛利輝元 ● 年四十歳にしてあとつぎなし ● 怪み驚き ● はや舟

秀秋。爲中毛利氏後。或以告隆景。隆景素知秀吉長忌己。且不屑受其封。欲返致之。及聞是言。竊度曰。不可使他人泪我宗家。且秀秋妄庸人。養之。是養禍也。吾寧任其弊。已而秀吉從容問之曰。參議齡強而無嗣。何如。隆景卒對曰。既養穂田氏子矣。秀吉慄然曰。吾未之知也。隆景使三人馳告輝元。使立秀元。遂請秀秋爲己子。秀吉喜許之。乃

讓與之筑前。而自老于三原。秀吉始伐韓之年。自肥前航歸大坂。過大浦。舟人謀逆。故觸舟于磯。殆溺。秀元以走阿教之。秀吉梟舟人。挈秀元入京師。奏為四位侍從。報其德也。遂有外征之命。年甫十五。

慶長二年。輝元。隆景並為從三位中納言。與秀家。皆修淀河堤。秀元。輝元。官爵。為秀吉女婿。是年。復伐朝鮮。以秀秋。秀元。統諸將。六月。隆景病卒。年六十二。隆景為秀吉所重。參其大計。而持己慎密。讒聞不入。

慶長二年、輝元・隆景、並に従三位中納言と爲る。秀家と皆淀河の堤を修む。秀元、輝元の官爵を襲ぎ、秀吉の女婿と爲る。是の年、復た朝鮮を伐つ。秀秋・秀元を以て、諸將を統べしむ。六月、隆景病みて卒す。年六十二なり。隆景、秀吉の重んずる所と爲り、其大計に參す。而して己を持する慎密にして、讒聞入らず。秀吉、嘗て毛利氏を九州に徙し封ぜんと欲す。隆景、辭して曰く、八州已に多し。況や一を増すをや、恐らくは勝ふる能はざらん。且つ先人百戰して取る所、之を棄つるに忍びずと。秀吉乃ち止む。退老するに及びて、誦吟を以て自適して、以て没するに至る。

- 後陽成天皇の年號
- むこ
- 大事の相談に預る
- 身の持方が眞深くて他より露言するすまなし
- 詩を作り歌をよむ
- 自ら樂む

秀吉嘗欲徙封毛利氏于九州。隆景辭曰。八州已多。況増一乎。恐不能勝也。且先人所二百戰而取。不忍棄之。秀吉乃止。及退老。以誦吟自適。以至於沒。

十二月。明兵圍我將加藤清正于蔚山。三年正月。秀秋。秀元赴援。廣家謂其驕。曰。明兵衆而不整。汝往視之。其後軍。今將走也。既而果走。廣家以千餘騎先追之。明騎將吳惟忠。茅國器返。忠。廣家縱橫奮擊。二將皆奔逃。清正望

十二月、明兵、我が將加藤清正を蔚山に圍む。三年正月、秀秋・秋元赴き援く。廣家、其騎に謂ひて曰く、明兵衆くして整はず。汝、往きて其後軍を視よ。今將に走らんとするなりと。既にして果して走る。廣家、千餘騎を以て先づ之を追ふ。明の騎將吳惟忠・茅國器返り戰ふ。廣家、縱橫奮擊し、二將皆奔逃す。清正、之を望見して曰く、彼蒲穂を以て背幟となす者は誰ぞと。左右對へて曰く、吉川なりと。清正曰く、勇なるかな。其幟の較著ならざるを恨む。常に吾が號を贈るべしと。乃ち手づから其背幟の馬圍を取りて之を贈る。廣家、驍名益々著る。秀吉、大に之を賞せんと欲す。僧惠瓊、素より吉川氏に惡し。乃ち石田三成と俱に其議を廢沮す。

- 一本に往とあり、氣を附けて見よ
- さしもの
- あきらか
- 驍勇の評判
- 邪惡して止む

見之曰。彼以蒲穂爲背。誰者。左右對曰。吉川也。清正曰。勇哉。恨其幟之不較。著也。當贈吾號。乃手取其幟。馬聞之。廣家馳名益著。秀吉欲大賞之。僧惠瓊素惡於吉川氏。乃與石田三成俱廢沮其議。

八月。秀吉薨。子秀頼嗣。毛利氏。德川前田上杉浮田氏。並稱五大老。共輔翼之。三成等離間諸老。五年二月。輝元襲德川公子。其弟修好交盟。四月。德川公伐上杉氏。輝元遣廣家惠瓊。將兵助之。三成使惠瓊言。輝元曰。德川

八月、秀吉薨す。子秀頼嗣ぐ。毛利氏・德川・前田・上杉・浮田氏、並に五大老と稱して、共に之を輔翼す。三成等、諸老を離間す。五年二月、輝元、德川公を其弟に襲して、好を修めて、交々盟ふ。四月、德川公、上杉氏を伐つ。輝元、廣家・惠瓊を遣して、兵に將として之を助けしむ。三成、惠瓊をして輝元に言はしめて曰く、德川氏、將に嗣君に利あらざらんとす。嗣君憂ふ。將に公の力に倚りて以て之を討たんとすと。輝元、乃ち兵四萬に將として、大坂を守る。増川長盛、之に副たり。三成自ら兵を引ききて、進みて美濃に入る。秀元、輝元を諫めて曰く、秀頼は幼穉なり。何ぞ臧否を辨せん。大人慎みて其言に惑ふ勿れ。且つ君、德川氏と盟ひて未だ幾ならずして之に背く、可ならんやと。聽かず。秀元曰く、然らば則ち大人、秀頼を擁して以て東伐せよ。兒請ふ、先鋒と爲らん。則ち諸將の德川に従ふ者、皆

氏將不利。嗣君。嗣君憂焉。將倚公之力。以討之。輝元乃將兵四萬。守大坂。増田長盛副之。三成自引兵。進入美濃。秀元諫輝元曰。秀頼幼穉。何辨臧否。大人慎勿惑其言。且君與德川盟。未幾背之。可乎。不聽。秀元曰。然則大人擁秀頼以東伐。兒請爲先鋒焉。則諸將從德川者。皆來屬我。我勝必矣。坐守此地。非計也。又不聽。命與廣家陣瀬田。徇伊勢。攻拔津城。聞東西之軍會美濃。則北屯南宮山。惠瓊與長曾我部盛親長東正家陣山下。兵凡三萬。

來りて我に屬せん。我れ勝たんこと必せり。坐して此地を守るは、計に非ざるなりと。又聽かず。命ぜられて、廣家と瀬田に陣し、伊勢を徇へ、攻めて津城を拔く。東西の軍、美濃に會すと聞き、則ち北して南宮山に屯す。惠瓊は長曾我部盛親・長東正家と山下に陣す。兵凡そ三萬なり。

- たすく ● 交情を妨げて中をわるくす ● 秀頼公の爲にならず ● 幼くして物事を知らず ● 善惡
- 父上には三成の言ふこと比のせられてはならず ● 良策に非ず ● 美濃國に在り

秀秋會西軍。首送款於德川氏。約爲内應。廣家亦與福原越後定

秀秋、西軍に會す。首として款を德川氏に送りて、約して内應を爲す。廣家も亦、福原越後と議を定めて、秀元に勸めて款を送らしめんとす。秀元曰く、吾が家、託を幼弱の人に受く。之を棄てて強國に歸するは、義に非ざるなり。且つ

議勸秀元送款。秀元曰。吾家受託於幼弱人。棄之歸。強國非義也。且無家君之命。安可自肆乎。廣家曰。豐臣氏恩澤諸侯。且叛歸東軍。況於我家乎。宜速決去就。是利納言也。秀元未決。廣家密因黑田長政。納款送福原某粟屋某爲質。長政使之率衆來屬。擊西軍一

家君の命なし。安んぞ自ら肆にすべけんやと。廣家曰く、豊臣氏恩澤の諸侯すら、且つ叛きて東軍に歸す。況や我が家に於てをや。宜しく速かに去就を決すべし。是れ納言を利するなりと。秀元未だ決せず。廣家密かに黒田長政に因りて款を納れ、福原某・粟屋某を送りて質と爲す。長政之をして、衆を率ゐて來り屬し、西軍を撃ちて以て信と爲さしむ。秀元曰く、我が山下の軍、我に従ひて降る者に非ず。吾も、亦之を撃つに忍びず。唯當に甲を按じて動かざるべしと。輝元、大坂に在り、京極高次、大津を以て東軍に應ずと聞きて、元康・秀包を遣して、立花宗茂等と之を攻めしむ。人をして入りて説かしめて曰く、諸將嗣君の爲に義を擧ぐ。公は嗣君の姻戚なり、何ぞ獨り従はざると。高次肯はずして曰く、今日の事、毛利と徳川と、雌雄を争ふのみ。嗣君何ぞ關らんと。是に於て、攻撃益々急なり。高次遂に城を致して去る。諸將將に遂に美濃に會せんとす。

● 内應せしめんとす ● 一本に諸字なし ● 進退を決定せよ ● 毛利輝元 ● 西軍を撃ちて東軍に屬す

る諸將となさしむ ● 軍を引き止めて ● 勝敗 ● 何ぞ知らん ● 開城して去る

以爲信。秀元曰。我山下軍。非從我降者。吾亦不忍擊之。唯當按甲不動。輝元在大坂。聞京極高次以天津一應東軍。遣元康秀包。與立花宗茂等。攻之。使入入説曰。諸將爲嗣君學義。公嗣君姻戚。何獨不從。高次不肯曰。今日之事。毛利與徳川一争雌雄。耳。嗣君何關焉。於是攻撃益急。高次遂致城而去。諸將將遂會美濃。

當是時。西軍侯輝元。東軍侯徳川公。相持未戰。九月。徳川公至。而輝元未至。三成等。遂聚議于大垣。推浮田秀家爲將。以秀元爲先鋒。正家・惠瓊往參其議。還報。廣家怒曰。

是の時に當りて、西軍は輝元を俟ち、東軍は徳川公を俟つ。相持して未だ戦はず。九月、徳川公至る。而して輝元未だ至らず。三成等、遂に大垣に聚議して、浮田秀家を推して將と爲し、秀元を以て先鋒と爲す。正家・惠瓊往きて其議に參す。還り報ず。廣家怒りて曰く、宰相、納言に代りて師を統ぶ。秀家の爲に前驅たる能はずと。已にして三成、自ら來りて、請ひて曰く、毛利・浮田、分れて前後に將たり。豈に輕重あらんやと。廣家、終に聽かず。三成曰く、然らば則ち公は止此に軍して、我が烽を擧ぐるを見れば、則ち直に東軍の後を襲へと。明日、兩軍皆關原に陣す。徳川公猶ほ我が意を疑ひて、兵を分ちて南宮に當りて、而して

宰相代納言一統師。不能下爲二秀家。前驅。已面三成。自來。請曰。毛利浮田。分將。前後。豈有。輕重。乎。廣家終不聽。三成曰。然則公止軍於此。見我舉烽。則直襲東軍後。明日。兩軍皆陣。關原。德川公。猶疑我意。分兵當南宮。而進陣。桃配野。惠瓊來見秀元。勗之。秀元曰。軍事委廣家。矣。惠瓊曰。公大闇義子。不可。斯須忘秀頼。何得此推諉之言乎。秀元曰。吾必如約。惠瓊去。

進みて桃配野に陣す。惠瓊來りて秀元を見て之を勗めしむ。秀元曰く、軍事は廣家に委すと。惠瓊曰く、公は太闇の義子なり、斯須くも秀頼を忘るべからず。何ぞ此推諉の言を得んやと。秀元曰く、吾れ必ず約の如くせんと。惠瓊去る。

● のるし ● 美濃國に在り ● 事を人に押し付けて自分の責任を免れんとする言

秀元使三人謂廣家曰。東軍諸將。其質皆在大坂。棄而不顧。吾亦欲棄。福原輩。以應。西軍。如何。廣家不肯。已秀元、人をして廣家に謂はしめて曰く、東軍の諸將、其質皆大坂に在り。棄てて顧みず。吾れも亦、福原の輩を棄てて以て西軍に應せんと欲す、如何と。廣家肯はず。已にして、兩軍大に戦ふ。石田氏の陣、烽起る。正家、秀元を促す。秀元之に應せんと欲す。廣家、穴戸元繼と先鋒たり。其兵皆胃を免ぎて坐す。秀元進むことを得ず。乃ち傳餐に託して、故に戦期を失す。世人、傳笑す。遂に已

むを得ざるの計を謂ひて、宰相の傳餐と曰ふ。是の時、秀秋松尾山に在りて兩端を觀望す。徳川氏之を促す。乃ち後より西軍を襲ふ。其家老松野主馬、怒りて曰く、主公、何ぞ此不義の舉を爲す。小早川氏に未だ會て有らざる所なりと。終に肯て戦はず。西軍大敗す。我が山下の軍戦はずして潰ゆ。

● 兵糧をつかふことにかこつけて ● 言ひ傳へて笑ふ ● 仕方なしの計略

而兩軍大戰。石田氏陣烽起。正家促秀元。秀元欲應之。廣家與穴戸元繼爲先鋒。其兵皆免胃而坐。秀元不得進。乃託傳餐。故失戰期。世人傳笑。遂謂不得已之計。曰。宰相傳餐。是時。秀秋在松尾山。觀望兩端。徳川氏促之。乃自後襲西軍。其家老松野主馬怒曰。主公何爲此不義之舉。小早川氏所未曾有也。終不肯戰。西軍大敗。我山下軍不戰而潰。

廣家因長政謝徳川氏曰。秀元宜速謁。願輝元在大坂。不敢先也。乃下山西歸。

廣家、長政に因りて徳川氏に謝して曰く、秀元、宜しく速かに謁すべし。願ふに輝元大坂に在らん。敢て先だたざるなりと。乃ち山を下りて西に歸る。長政、福島正則と、秀元を止めて質と爲さんと欲す。馳せて其前路に出でて、帳を設けて、要して之を襲す。秀元膂力あり。伴り酔ひて、正則の手を拗りて曰く、近

長政與福島正則欲下止秀元爲質。馳出其前路。設帳。要而襲之。秀元有警。力伴醉。劫正則手。曰。近日見公於大坂。矣。奮執而去。二人不敢止。立花宗茂至草津。得關原敗。開返至大坂。欲輝元不聽。秀包亦返至宗茂。宗茂與俱歸。東軍秀包曰。吾從納言者。

日、公を大坂に見んと。袂を奮ひて去る。二人敢て止めず。立花宗茂草津に至りて關原の敗聞を得、返りて大坂に至り、輝元を助けて城守せんと欲す。輝元聽かず。秀包も亦返り至る。宗茂、與俱に東軍に歸せんと欲す。秀包曰く、吾は納言に従ふ者なりと。乃ち大坂に入る。疾を以て安藝に歸り、尋ぎて卒す。輝元城を避けて、木津川の別第に居り、髪を削りて宗瑞と稱して、降を徳川公に請ふ。徳川公、其親信井伊直政と密議して曰く、毛利氏は右族、遽かに讓削を加ふ可からず。而して廣島は其治所なり。此を奪はざれば、以て典刑を正すなしと。議未だ決せず。輝元の使者來るに會ふ。曰く、生死唯命のまゝなり。若し大仁を垂れて周防・長門を領するを得ば、望外の幸なりと。徳川公大に喜びて之を許し、盡く其餘の六州を收む。

- 慶に用益を爲し特受け、秀元を襲す
- 關力あり
- 一本に川字無し
- 名家
- 費めて討を削る
- 願うてもなき強敵なり

也。乃入大坂。以疾歸安藝。尋卒。輝元避城。居于木津川別第。削髮稱宗瑞。請降徳川公。徳川公與其親信井伊直政密議曰。毛利氏右族。不可遽加讓削。而廣島其治所也。不奪此。莫以正典刑焉。讀未決。會輝元使者來。曰。生死唯命。若垂大仁。得領周防長門。望外之幸也。徳川公大喜。許之。盡收其餘六州。

惠瓊伊吹山に匿る。出でて秀元に依る。其の東軍に通ずるを聞きて、去りて鞍馬山。出依秀元。開其通東軍。去匿鞍馬。聞吉川氏來索。又出匿本願寺子院。近江僧樂鎮。素與之惡。以告東將。與平信昌。信昌遣兵捕之。從者與戰。走東寺。追兵已迫。從者度不可脫。隔輿刺之。返關皆死。惠瓊未殊。遂就縛。十月朔。與石田小西長東等。

惠瓊伊吹山に匿る。出でて秀元に依る。其の東軍に通ずるを聞きて、去りて鞍馬山に匿る。吉川氏來り索むと聞きて、又出でて本願寺の子院に匿る。近江の僧樂鎮素より之と惡し。以て東將與平信昌に告ぐ。信昌兵を遣して之を捕へんとす。從者輿載して東寺に走る。追兵已に迫る。從者脱すべからざるを度りて、輿を隔てて之を刺し、返り關ひて皆死す。惠瓊未だ殊せず。遂に縛に就く。十月朔、石田・小西・長東等と皆京師に梟首す。輝元、長門に徙りて萩城に治す。三十萬石を食みて、公役に與らず。其子秀就を送りて質と爲す。

- 東寺
- 輿に載せて
- 死にきれず

皆梟首京師。輝元徙長門。治于萩城。食三十萬石。不與公役。送其子秀就爲質。

輝元既養秀元。而生秀就。及就隆。德川氏欲分長門于秀元。秀元辭之。退居長府。以攝國政。會其室卒。德川公養松平康元女。繼之。十三年。又以其孫女妻秀就。秀就時爲四位侍從。十九年。冬。德川公攻大坂。留三婿于江戶。秀元因水野忠元請曰。既辱姻婭。宿何見疑。願爲先鋒。效力。許之。兵解歸國。元和元年。夏。輝元既に秀元を養ふ。而して秀就及び就隆を生む。德川氏長門を秀元に分たんと欲す。秀元、之を辭して、退きて長府に居りて、國政を攝す。會其室、卒す。德川公、松平康元の女を養ひて之に繼ぐ。十三年、又其孫女を以て秀就に妻はす。秀就時に四位の侍従たり。十九年冬、德川公大坂を攻め、二婿を江戸に留む。秀元、水野忠元に因りて、請ひて曰く、既に姻婭を辱くす。猶ほ何ぞ疑はる。願はくは先鋒と爲りて力を效さんと。之を許す。兵解けて國に歸る。元和元年夏、兵再び起る。秀元は西道の諸將に先だちて大坂に至り、斬首する。二百級なり。賞あり。秀就は海道を取り、風に阻まれて後れて至る。罰なし。

● 夫人 ● 秀元秀就 ● 縁つゞき

秀元因水野忠元請曰。既辱姻婭。宿何見疑。願爲先鋒。效力。許之。兵解歸國。元和元年。夏。

兵再起。秀元先四道諸將至大坂。斬首三百級。有賞。秀就取海道。阻風後至。無罰。

寛永元年。秀元在江戶。輝元使使告之曰。我以二國新封。養十州舊臣。上下共困。不得給公役。念受封無益。欲返致二國。汝善計之。使我家不至。滅亡。秀元大驚。因土井利勝。白之台徳公。公令秀元計之。秀元檢二國田。得七十八萬石。輝元聞之。大喜。二年。輝元卒。次年。秀就爲左近衛少將。

● 後水尾の年號 ● 新しき領地 ● 徳川秀忠

八年。秀元還。

八年秀元政を秀就に還す。大猷公曰く、秀元は成童にして外征の元帥たり。

政於秀就。大猷公曰。秀元成童爲外征元帥。門望皆隆。眞我老友也。數延與語。子孫仍居長府。食五萬石。就陸居周防。德山亦食五萬石。秀元次子元知居長門。清末食一萬石。豐臣氏買森高政。以森與毛利。國音相近。遂冒毛利氏。居豐後。佐伯。食六萬石。關原之

門望皆隆し。眞に我が老友なりと。數々延きて與に語る。子孫仍ほ長府に居りて、五萬石を食む。就陸は周防の徳山に居りて、亦五萬石を食む。秀元の次子元知は、長門の清末に居りて、一萬石を食む。豊臣氏の質森高政、森と毛利と國音相近きを以て、遂に毛利氏を冒す。豊後の佐伯に居りて、六萬石を食む。關原の役に、大坂に在り。四萬石を削らる。此五家、宗家と皆存して今に至る。宗家は、世々侍從に任じ、少將に遷る。而して從四位下大膳大夫は、其常衛たり。廣元・元就の故事を襲ぐなり。吉川氏は宗家を存するの功を以て、世々岩國六萬石を食む。秀秋内應の功を以て、備前・美作を食む。松野主馬其祿を食むを羞ぢ、去りて京師に匿る、何もなく、秀秋卒す。嗣なし。國除かる。小早川氏遂に祀られず。

● 徳川家光 ● 十五歳をいふ ● 門地人 ● 同朝似よりたるが故に ● 常に名乗る官名 ● 領地を取上げる ● 家断絶す

役在大阪。削四萬石。此五家。與宗家。皆存至今。宗家世任侍從。澤二少將。而從四位下大膳大夫爲其常衛。襲元就故事也。吉川氏以下存宗家之功。世食岩國六萬石。秀秋以下內應之功。食備前美作。松野主馬。羞食其祿。去匿京師。無何。秀秋卒。無嗣。國除。小早川氏遂不祀。

元春臨終遺書。戒輝元曰。往日。吾兄弟並爲先鋒。推子爲元帥。今天下已有自主矣。子慎勿自視。加往日。隆景之將沒也。亦戒之曰。天下將亂。子第退守。勿進取。使我家有雄資。如先君。則可。否。而爭三

元春、終に臨みて遺書して、輝元を戒めて曰く、往日、吾が兄弟、並に先鋒と爲り、子を推して元帥と爲す。今、天下已に主あり。子、慎みて自ら視ること、往日の如くする勿かれと。隆景の將に沒せんとするや、亦之を戒めて曰く、天下將に亂れんとす。子、第退守して、進取する勿かれ。我が家をして、雄資先君の如きもの有らしめば則ち可なり。否らずして權を天下に爭ふは、是れ自ら禍を速くなり。輝元、二叔の言を忘る。毛利氏故を以て削り黜けらると云ふ。

● 前の日 ● 弱くして四略に留むこと父上の如くなれば進取するもよし ● 領地を削り没せられ官をみとさる

權於天下。是自速禍也。輝元忘二叔言。毛利氏以故削黜云。

外史氏曰。余安藝人也。俯仰其都邑城池。輒懷毛利氏盛時。每觀嚴島亦未嘗不三想見元就之鑿也。夫室町之時。天下紛紛。日事兵爭。如翠兒鬪暗。中喧嗽。一仆一起。誰知其曲直。孟子所謂無義戰者。是已。唯元就之於陶賊。與北

外史曰く、余は安藝の人なり。其都邑城池を俯仰すれば、輒ち毛利氏の盛時を懷ふ。嚴島を觀る毎に、亦未だ嘗て元就の賊を鑿にせしを想見せずんばあらざるなり。夫れ室町の時、天下紛紛として、日に兵争を事として、翠兒の暗中に鬪ふが如し。喧嗽、一仆一起、誰か其曲直を知らん。孟子の所謂義戰なしとは、是のみ。唯元就の陶賊に於けるは、北條早雲の堀越に於ける、羽柴秀吉の明智に於けると、其事皆稱道すべし。故に其功效皆此の如きを致す。而して元就、最も其難きものなり。夫れ亂臣賊子は、人、之を討つを得。然れども戰國の俗は、唯利を見て、義を聞かず。陶賊の事の如き、四隣の牧伯、熟視して、敢て翻語する莫し。甚しきは相率るて之に歸し、以て倚賴を爲すに至る。獨元就、微力を以て誅討を圖り、而して又之を天子に請ふ。名正しく、言從ふ。義族の指す所、堅きとして破れざるはなし。炬を暗室に掲ぐるが如く、衆目駭き

條早雲之於二堀越。羽柴秀吉之於中。智。其事皆可稱道。故其功效皆致。如此。而元就最其難者也。夫亂臣賊子。人得討之。然戰國之俗。唯見利而不聞義。如二陶賊之事。四隣牧伯。熟視莫敢。翻語甚。至相率歸之。以爲倚賴。陶元就以微力圖誅討。而又請之天子。名正言從。義族所指。無堅不。破。如掲炬暗室。衆目駭觀。足以伸大義於天下。使天下響應歸之。而何十

觀る。以て大義を天下に伸べ、天下をして響應して之に歸せしむるに足る。而るを何ぞ十三州の圖るに足らんや。

● 胸中にもひ見ずにはみられず ● かまびすしくよばはりうちあふ ● 孟子に「春秋は戰國なり。彼れ此より善きは則ち之あり」とあり ● 陶明賢 ● はめていふ ● 名義正しくして言も亦正し ● 正義の歌 ● 大義名分の明らかなるに勝ふ ● 僅かに十三州を圖るごとき固より問題にはならざと也

大凡英雄成事。皆以爲其智略所致。而其事之合義。有能服人心者。而不自知。

大凡英雄の事を成す、皆以て其智略の致す所と爲す。而して其事の義に合ひて、能く人心を服するものあり。而して自ら知らざるなり。後の追論する者、亦徒に其成敗を視て、盡く其智慮に成ると謂ひ、而して天下の事、智慮の及ばざる所に出づる有るを知らず。況や夫の危疑の際に當りて、機會の來る、

也。後之追論者。亦徒視其成敗。謂其成於其智慮。而不知其大下之事。有不出其智慮所不及。況當夫危疑之際。機會之來。間不容髮。苟以區區計算。要其萬全。吾見其終身而不及事耳。故彼治世之論。不可不以揣亂世英雄也。吾論元就。不言其智略。而言其果斷。不言其果斷。而言其事之合義。至於請之天子。又義之大者矣。且觀其效。貢賦助中舉朝儀。則存心王室。非一日也。

昔者。孫堅以

間、髮を容れず、苟も區區の計算を以て、之か萬全を要するは、吾其の身を終へて事に及ばざるを見るのみ。故に彼の治世の論は、以て亂世の英雄を揣る可からざるなり。吾元就を論ずるに、其智略を言はずして、其果斷を言ひ、其果斷を言はずして、其事の義に合ふを言ふ。之を天子に請ふに至りては、又義の大なる者なり。且つ其の貢賦を効して、朝儀を助舉するを觀れば、則ち心を王室に存する、一日に非ざるなり。

● 大姓名分を唱道したるによる事を氣付かず ● 直に一寸の所なり ● 小さな謀計 ● 一生掛りても遂に事業をなし没げ志望を達すること能はず ● 英雄の眞相をはかり知る可からず ● 元就の言行の正義なることをいふ ● 費用を率りて朝廷の儀式を助け舉行せる所を觀察すれば

昔者、孫堅英雄の姿を以て、志、漢室に嚮ひ、奮ひて強賊を討ち、身を出して

英雄之姿。志。漢室。奮。討。強賊。出。身。不。顧。又有。策。權。之子。遂。能。據。有。江。東。以。魏。武。之。勢。而。不。能。取。焉。毛。利。氏。之。以。關。西。抗。織。田。氏。庶。幾。類。之。矣。元。春。之。善。戰。也。類。善。謀。也。類。皆。絕。人。之。才。而。戮。力。協。心。臣。事。輝。元。使。之。不。失。舊。業。是。其。義。最。爲。不。可。及。焉。輝。元。雖。無。孫。皓。之。虐。而。不。量。力。度。德。而。爭。衡。於。中原。宜。乎。其。削。弱。也。然。其。封。土。屹。然。猶。雄。西。陲。者。豈。非。由。元。就。父。子。之。高。義。一。哉。

顧みず、又策・權といふ子あり。遂に能く江東を據有し、魏武の勢を以てして、取る能はず。毛利氏の關西を以て織田氏に抗するは、之に類するに庶幾し。元春の善く戦ふは策に類し、而して隆景の善く謀るは權に類す。皆絶人の才にして、力を勦せ、心を協せて、輝元に臣事し、之をして舊業を失はざらしむ。是れ其義最も及ぶべからずと爲す。輝元、孫皓の虐なしと雖も、而も力を量り、徳を度らずして、衡を中原に争ふ。宜なるかな、其削弱せらるゝや。然れども其封土、屹然として、猶ほ西陲に雄たる者は、豈に元就父子の高義に由るに非ざらんや。

● 支那の吳の孫堅 ● 孫策・孫權といふ二人の子 ● 支那の魏の武帝、操曰 ● 人並はづる ● 孫皓の子 ● 唐は唐政 ● きつとして西方にありて社に大なるを得るは

卷十三

德川氏前記

織田氏上

外史氏曰。封建之成。勢於我邦也。其來遠矣。在昔王家。郡縣七道。治以守介。田以口分。四徵租調。而朝之職位。皆有田。有食封。有功田。其食封。多者不過三千戶。功田四等。

外史氏曰く、封建の勢を我邦に成すや、其の來ること遠し。在昔王家、七道を郡縣にして、治むるに守介を以てす。田は口分を以てし、租調を四徴す。而して朝の職位、皆田有り、食封有り、功田有り、其食封は、多き者も三千戸に過ぎず。功田は四等にして、之を世襲する者は、大功に止る。此時に當りては、未だ封建の勢有らざるなり。相門、權を世々にせしより、所在、封戸、日に多く、不輸の地、不課の民、天下に半す。後三條帝、其弊を矯めんと欲して、而して遂ぐる能はず。是より以後、各國の莊園、其十の八に居り、守介の治むる所は、屢に一のみ。甚しきは則ち國司、終に任に赴かず。而して權に其地方の豪族、武

世襲之者。止於大功。當此時。未有封建之勢也。自相門世權所在。封戸日多。不輸之地。不課之民。半於天下。後三條帝。欲矯其弊。而不能遂。自是以後。各國莊園。居其十八。守介所治。一焉。甚則國司終不赴任。而權延其地方豪族。武人以自代。謂之日代。而至源氏起。國司置守護。莊園置地頭。分領糧粟。以備盜賊。則傳所謂日代之類者。甚時六十州。而封建之勢始矣。

人を延きて、以て自ら代らしめて、之を日代と謂ふ。而して源氏起るに至りて、國司に守護を置き、莊園に地頭を置きて、糧粟を分領して、以て盜賊に備ふ。則ち嚮に謂ふ所の日代之類は、六十州に甚時す。而して封建の勢始る。

- 國司を建つること
- 地方官かみすけ
- 田を丁年以上の者に分つて作らしむる法
- 高き位官の人に賜ふ領戸
- 功勞ある人に賜ふ田
- 藤原氏
- 朝廷に租税を納めぬ土地
- 權門貴族私有の地、十の八は十の九に作るべしと
- 將軍の駒の如く所々に勢を張る

北條氏因其遺制。守護之任。猶得考課之易置。如古之國司。然往古因襲。傳之子

北條氏、其遺制に因りて、守護の任、猶ほ考課易置すること、古の國司の如くするを得たり。然れども往往因襲して、之を子孫に傳へ、漸く封建の勢を成す。而して建武中興の時に至りて、朝廷、特恩を以て武臣の心を收めんと欲して、新田足利の諸族を以て、諸國の守護に充つ。概ね一姓を以て二三州に連ぬ。名は守

孫。漸成。封建之勢。而至。建武中興之時。朝廷欲。以。特恩。收。中。武。臣。之。心。以。新。田。足。利。諸。族。充。諸。國。守。護。概。以。一。其。子。弟。功。臣。仍。稱。守。護。而。世。襲。之。土。地。兵。馬。儼。然。諸。侯。而。封。建。之。勢。成。矣。

護たりと雖も、其實は之を封建にするなり。足利氏叛くに及びて、其成績を奪ひて、之を其子弟功臣に與へ、仍りて守護と稱して、之を世襲せしむ。土地、兵馬、儼然たる諸侯なり。而して封建の勢成る。

● 遺れる制度 ● 能否をもちて賞罰を加ふ ● 子孫代々ひきつぐ ● 名義は守護といへども實は封建に同じ ● 建武中興を指す

足利氏初務以。大。封。唱。將。士。得。下。以。擁。中。朝。廷。之。權。而。勢。不。可。削。及。其。政。既。衰。其。權。臣。構。難。京。師。而。所。謂。諸。侯。羣。起。爲。之。黨。授。

足利氏、初め務めて、大封を以て將士に唱はせて、以て朝廷の權を擁むるを得たり。既に天下を得て、勢削るべからず。其政、既に衰ふるに及びて、其權臣、難を京師に構へて、所謂諸侯は、羣起して之が黨援を爲し、又互に相吞滅して、益々強大を成す。而して最後に、織田氏、其陪臣を以て、崛起して、之を并す。部下は皆一時の英豪、攻撃して四に出で、城を取り地を略する者は、因りて之を賞す。其志、盡く天下の故國を鋤きて、其功臣を以て之に代

又。互。相。吞。滅。益。成。強。大。而。最。後。織。田。氏。以。其。陪。臣。崛起。而。并。之。部下。皆。一。時。英。豪。攻。擊。四。出。取。城。略。地。者。因。而。賞。之。其。志。在。於。盡。鋤。天下。故。國。而。以。其。功。臣。代之。未。成。而。陪。臣。而。豐。臣。氏。以。其。將。校。踵。起。見。織。田。氏。所。志。甚。難。而。不。成。也。是以。舊。國。之。降。附。者。存。而。撫。之。大。者。或。蟠。踞。八。九。州。而。不。加。殺。削。是以。得。速。致。於。混。一。而。沒。而。未。幾。海。內。分。崩。由。此。觀。之。封建。之。勢。始。於。源。氏。而。成。於。足。利。氏。足。利。氏。未。享。其。利。而。不。勝。其。弊。織。田。豐。臣。承。其。弊。而。不。知。裁。之。之。術。蓋。皆。有。待。於。我。德。川。氏。也。

ふるに在り。未だ成らずして踏る。而して豊臣氏、其將校を以て踵ぎて起り、織田氏の志す所、甚だ難くして成らざるを見る。是を以て、舊國の降附する者は、存して之を撫す。大なる者、或は八九州に蟠踞して、殺削を加へず。是を以て速に混一を致すを得たり。而も没して未だ幾ならずして、海内分崩す。之に由りて之を觀れば、封建の勢は、源氏に始りて、而して足利氏に成る。足利氏未だ其利を享けずして、其弊に勝へず。織田・豊臣、其弊を承けて、之を裁するの術を知らず。蓋し皆我が徳川氏に待つ有るなり。

● 自然の成行上 ● 羣を立て、授け合ひ ● ぬきんで起る ● 古き國を除きて ● 領長の明智に統せられて中途事業の敗れしといふ ● わだかまり居る ● 封建の利益にあらざらず却つて其の弊に困む ● 封建の弊を除きて整理する方法を知らず ● 徳川の起るを待ちたるものなり

夫有^二外諸侯^一。有^二內功臣^一。內功臣之封。不^レ能^レ抗^二外諸侯^一。然後^レ足以^レ親^二而折^レ衝禦侮^一。其外^レ否則功臣亦與^二諸侯^一等耳。無^レ戴^レ我之心。而有^二爭^レ我之意。是織田氏所以^レ被^レ禍也。雖^レ能存^二外諸侯^一。而不^レ知^レ斷^レ長補^レ短。使^レ勢力略^レ敵。又不^レ知^レ大封^二宗族^一。據^レ其扼塞^二犬牙^一相制。

夫れ外諸侯有り、内功臣有り。内功臣の封、外諸侯に抗すること能はず。然して後、以て其内を親戴衛護して、其外を折衝禦侮するに足る。否らずんば、則ち功臣も亦、諸侯と等しからんのみ。我を戴くの心無くして我と、争ふの意有り、是れ織田氏の禍を被る所以なり。能く外諸侯を存すといへども、而も長を断ち短を補ひて、勢力をして、略敵せしむるを知らず。又大に宗族を封じて、其扼塞に據り、犬牙相制して、以て其邪心を鎮壓するを知らず。是れ豊臣氏の禍を絶つ所以なり。織田氏は唯之を取るに難んず。故に之を分つに重んず。豊臣氏は唯之を取るに易んず。故に之を分つに輕んず。之を輕んずると之を重んずると、其情異なりと雖も、其の天下英雄の心を收むる能はざるは一のみ。故に曰く、二氏は封建の弊を承けて、而して之を裁するの術を知らずと。我が徳川氏に至りては、二氏の失に鑑みて、其衷を乘り、之を矯むるに漸を以てし、其内外、輕重の際を權りて、以て萬世に維持す。封建の勢、是に於て、一定して復撼すべからず。

● 外諸侯の衝き来るはこさきくじき其あなどりをふせぐ ● 争戦する意なく却つて争ふはあり ● 織田へふせぐべき至要の地 ● 調藩と功臣の藩とを犬の牙の如く入りまじらしめて置き相互に押へつけて ● 織田豊臣の失敗の跡について考へ見て ● 程よき所

以^レ禦^レ其^レ邪心^一。是^レ豐臣氏所以^レ絶^レ禍也。織田氏^レ唯^レ難^レ於^レ取^レ之^一。故^レ重^レ於^レ分^レ之^一。輕^レ於^レ重^レ之^一。其^レ情^レ雖^レ異^一。其^レ不^レ能^レ收^二天下^一英雄^レ之心^一。故^レ曰^レ。二氏^一承^レ封建^レ之^レ弊^一。而^レ不^レ知^レ裁^レ之^一。至^レ我^レ徳川氏^一。鑑^レ二^レ氏^一之^レ失^一。而^レ乘^レ其^レ衷^一。矯^レ之^一。以^レ漸^レ權^レ其^レ内外^一。輕^レ重^レ之際^一。以^レ維持^レ於^レ萬^レ世^一。封建^レ之^レ勢^一。於^レ是^一。一定^レ不^レ可^レ復^レ撼^レ焉。

唐柳宗元論^二封建^一曰^レ。勢也。余曰^レ。封建^レ。勢也。也。制^レ勢^レ人^一也。彼^レ生^レ郡^レ縣^一之^レ世^一。而^レ揣^レ利^レ弊^一於^レ千^レ載^一之上^一。使^レ其^レ目^レ我^レ邦^一之^レ今日^一。以^レ爲^レ何^レ如^レ哉^一。蓋^レ徳川氏^一之^レ致^レ太平^一。雖^レ由^レ二^レ參^レ遠^一。

唐の柳宗元、封建を論じて曰く、勢なりと。余曰く、封建は勢なり。勢を制するは人なりと。彼郡縣の世に生れて、而して利弊を千載の上に揣る。其をして我が邦の今日を目せしめば、以て何如と爲すか。蓋し徳川氏の太平を致すは、參遠動舊の力に由ると雖も、而も新附將帥の功與れり。今の外藩列國、邦を足利氏以前に成す者は、島津、佐竹、伊達、上杉、毛利、鍋島の如き、是のみ。其餘は、皆二氏に由りて家を興す者、慶長庚子以後、封土を定賜し、之と更始すと雖も、而も猶ほ彼の漢の侯王の陳項に於ける、唐の將相の周隋に於けるがごと

勳舊之力。而新附將帥之功與焉。今之外藩列國。成邦於足利氏以前者。如島津佐竹伊達上杉毛利鍋島。是已。其餘皆由二氏一興。家者。雖慶長庚子以後。定賜封土。與之更始。而猶下彼漢侯王之於陣項。唐將相之於中周。隋上。不源其前代。其建置本末不可得而詳也。余故先敘二氏。而論其勢之所從來。一如此。

織田氏。出於平重盛。重盛次子。曰資盛。元曆中。平氏與源氏戰于四海。大敗。舉族死亡。資盛有孤兒。其母懷之。匿于近江津田郷。郷長悅其母色。

し。其前代を源ねざれば、その建置本末、得て詳にすべからざるなり。余故に先二氏を敘して、其勢の従りて来る所を論ずること此の如し。

● 字は子厚有なる文章家なり ● 利益と野密を ● 夢河源江以來の戰功の舊臣 ● 陳勝項羽

織田氏は、平重盛より出づ。重盛の次子を資盛と曰ふ。元曆中、平氏、源氏と西海に戦ひて、大に敗れ、舉族死亡す。資盛孤兒有り。其母之を懐にして、近江の津田郷に匿る。郷長、其母の色を悦びて、之を納る。兒、從ひて、其家に育はる。越前織田莊の祝人數々京師に入りて、毎に郷長に過りて宿るに會ふ。嘗て之に謂ひて曰く、吾れ老いて子無し。願はくは公の一子を得て之を養はん。郷長乃ち與ふるに平氏の孤兒を以てす。兒、終に織田氏を冒して、親眞と名のり、權大夫と稱す。子孫、世々祝人たり。足利氏天下を定むるに及びて、越前

納之。兒從育其家。會越前織田莊祝人數入京師。每過郷長宿焉。嘗謂之曰。吾老無子。願得公一子養之。

郷長乃與以平氏孤兒。兒終冒織田氏。名親眞。稱權大夫。子孫世爲祝人。及足利氏定天下。越前尾張爲斯波氏管國。斯波義重嘗出遊。見織田祝人之子美之。載歸。以爲近臣。義重有六吏六人。其一有罪放流。乃以織田氏代之。於是織田氏終爲斯波氏重臣。徙於尾張。自親眞而後十五世。曰敏定。

敏定之時。斯波義敏與族義廉爭立。敏定居間講和。請義敏養義廉子義良。而

尾張は斯波氏の管國と爲る。斯波義重嘗て出遊して、織田祝人の子を見て、之を美として載せ歸りて、以て近臣と爲す。義重、大吏六人有り。其一人罪ありて放流せらる。乃ち織田氏を以て之に代ふ。是に於て、織田氏終に斯波氏の重臣と爲る。尾張に徙る。親眞よりして後十五世を、敏定と曰ふ。

● 後鳥羽天皇の年號 ● 一族並く ● 村長 ● 美殿 ● 放逐せられて流罪に處せらる ● おもむく

敏定の時、斯波義敏、族義廉と立つを争ふ。敏定間に居りて講和し、義敏に請ひて、義廉の子、義良を養はしめ、而して自ら之を輔けて、清洲城に居る。尾張凡そ八郡、分ちて上下と爲す。各々四郡あり。敏定、下四郡を領し、族信安をして岩倉城に居りて、上四郡を領せしむ。敏定、敏信を生み、敏信、常祐を生む。

自補之。居清洲城。尾張凡八郡。分爲上下。各四郡。敏定領下四郡。使族信安居。岩倉城。領上四郡。敏定生。敏信。敏信生常祐。相繼居清洲。敏定庶子信定。稱正忠。信定子曰信秀。稱備後守。信秀以支庶降居勝幡城。與二族二人並爲宗家。吏分治四郡。信秀嗜武。喜士。士多歸之。

相繼きて清洲に居る。敏定の庶子信定、彈正忠と稱す。信定の子を信秀と曰ふ。備後守と稱す。信秀、支庶なるを以て、降りて勝幡城に居り、族二人と竝に宗家の吏と爲りて、分ちて四郡を治む。信秀、武を嗜み士を喜ぶ。士多く之に歸す。

一族の者 ② 妾腹の子 ③ 妾の子にて別家せるもの ④ 尾張國に在り

時齊藤氏在美濃。今川氏在駿河。與織田氏日相攻。擊信秀徙居古波城。天文十一年八月。今川義元將

時に齊藤氏は美濃に在り。今川氏は駿河に在り。織田氏と日に相攻撃す。信秀徙りて古波城に居る。天文十一年八月、今川義元、兵に將として來り攻めて、小豆坂に軍す。信秀逆へ戦ふ。衆寡較せず。日暮將に退かんとす。敵兵尾撃すること甚だ急なり。信秀の弟信光、死士六人と返り戦ひて、之を卻く。十六年九月、信秀、常祐に従ひて、齋藤秀龍を稻葉山に攻め、火を城下に縱ちて、將に還

兵來攻。軍于小豆坂。信秀逆戰。衆寡不較。日暮將退。敵兵尾擊甚急。信秀弟信光。與死士六人返戰。卻之。十六年九月。信秀從常祐。攻齋藤秀龍。于稻葉山。縱火城下。將還。秀龍出戰。我兵大敗。常祐以下八人皆死之。十一月。秀龍遂攻大垣城。信秀即赴援。擊走秀龍。

らんとす。秀龍出で戦ふ。我が兵、大に敗れて、常祐以下八人、皆之に死す。十一月、秀龍遂に大垣城を攻む。信秀即ち赴き援ひて、撃ちて秀龍を走らす。

尾張國に在り ② 美濃國に在り ③ 美濃國に在り

秀龍者。山城四國人。善歌謠。東游美濃。仕土岐賴藝。將長井某。遂殺長井直仕。賴藝終爲其重臣。稱山城守。削髮更名道三。遂逐賴藝。十七年。賴

秀龍は、山城の西岡の人、歌謠を善くす。東、美濃に遊びて、土岐賴藝の將長井某に仕へ、遂に長井を殺して、直に賴藝に仕ふ。終に其重臣と爲りて、山城守と稱し、削髮して名を道三と更む。遂に賴藝を逐ふ。十七年賴藝來奔す。信秀善く之を遇す。囚りて、美濃の將士を招く。將士應ずる者多し。八月、信秀往きて秀龍を討ちて、火を多藝口に縱つ。秀龍和を請ふ。信秀比年兵興り、上下疲弊するを以て、遂に之を許す。秀龍乃ち賴藝を復し、女を以て、信秀の子信長に妻はす。是の歲、信秀、末盛城に徙る。二十年三月、信秀、疫を患へて卒す。

藝來奔。信秀善遇之。因招美濃將士。將士多應者。八月。信秀往討秀龍。縱火多藝口。秀龍請和。信秀以比年兵興。上下疲弊。遂許之。秀龍乃復賴藝。以女妻信秀子信長。是歲。信秀徙末盛城。二十年。三月。信秀患疫卒。

信秀有二十四男。四女。庶長子信廣。其次信長。幼字吉法師。信秀自居古渡。別城那古野。置吉法師焉。令林通勝平手政秀等傳之。市十三。加首服于古渡。命名信長。字三郎。明年。信長始將兵。入參河。攻今川氏屬城吉良大濱。縱火而還。

信秀、十二男四女有り。庶長子信廣、其次を信長と爲す、信長幼字は吉法師なり。信秀自ら古渡に居り、別に那古野に城きて、吉法師を置く。林通勝・平手政秀等をして、之に傳たらしむ。甫めて十三、首服を古渡に加へ、名を信長と命ず。字は三郎といふ。明年、信長始めて兵に將として、參河に入りて、今川氏の屬城吉良・大濱を攻めて、火を縱ちて還る。

● もりやく ● 元服をなす

信長幼時、武事被服奇偉。喜帶大刀。其出行街市。或憑人肩。餠餅菓。傍若無人。常調馬。習弓銃。學酒。聚近士。令以竹槍。關曰。槍利於長。乃造二丈槍。及二副。立稱上總介。次弟信行。稱勸十郎。嘗爲信秀設法會。信長與信行偕往。拜位前。觀者甚衆。信長先進。撲香投鉢内。一拜而出。信行整容拈香。拜伏久之。觀者竊譽信行。有西海信。在衆中。相信長曰。此子乃英雄也。

● 心廣くして放逸なること ● 風變りの衣服を着る ● 位牌の前 ● 香盤の内 ● 人相を見る

然信長放縱日甚。平手政秀驟諫之。政秀之子有馬信長請之。辭弗肯。獻信長怒。遂惡政秀不聽其言。政秀憂。適曰。吾受保傅之託。而不能匡救焉。何以視息於人間哉。二十二年正月。政秀遂自殺。信長驚惋。自谷屏居不出。爲建佛院。名曰政秀寺。忌日必詣。輒自矢曰。吾徒悔無益。當改過厲行。立大功於天下。以償前失耳。於是益講武事。警備鄰國。

然れども信長放縱日に甚だし。平手政秀、驟之を諫む。政秀の子、名馬を有す。信長之を請ふ。辭して肯て獻ぜず。信長怒りて、遂に政秀を惡みて、其言を聽かず。政秀憂懣して曰く、吾れ保傅の託を受く。而して匡救すること能はず。何を以て人間に視息せんやと。二十二年正月、政秀遂に自殺す。信長、驚惋して、自ら咎め、屏居して出でず。爲に佛院を建てて、名づけて政秀寺と曰ふ。忌日には必ず詣でて、輒ち自ら矢ひて曰く、吾れ徒に悔ゆるも益なし。當に過を改め行を厲み、大功を天下に立てて、以て前失を償ふべきのみと。是に於て、益々武事を講じ、鄰國に警備す。

● 要へいかる ● 匡し救ふ ● 驚きをぞく ● 寺 ● 前の過失をとりかへず

齊藤秀龍。以

齊藤秀龍其婦翁たるを以て、一たび見んと欲す。四月、富田の正徳寺に會す。

其婦翁欲一見。四月、會于富田正徳寺。秀龍豫使將士盛服列坐。欲延信長過其前。以試其動止也。至期秀龍微行。潛道傍民舍。以視信長過。信長爲茶筌髻。著調袖。穿虎皮袴。佩繩線刀。及大瓢。健士八百人。弓銃朱幹槍。各五百。從其前後。秀龍以爲信長鷹野。命其行人。以草具供之。

秀龍豫め將士をして、盛服して列坐せしめ、信長を延きて其前を過ぎしめ、以て其動止を試みんと欲す。期に至り、秀龍微行して、道傍の民舍に潛みて、以て信長の過ぐるを覗ふ。信長、茶筌髻を爲し、調袖を著、虎皮の袴を穿き、繩線刀及び大瓢を佩ぶ。健士八百人、弓銃、朱幹槍のもの、各々五百、其前後に従ふ。秀龍以て信長を鷹野と爲して、其行人に命じて、草具を以て之に供せんとす。

● 夫人の父 ● 衣服を着回して並び座せしめ ● 信長のふるまひをためさんとなす ● 微服して行き ● 茶筌の如き髻を結び調袖の衣服を着 ● 柄を纏にて突きなる刀 ● 朱柄の鎗を持つる兵 ● 腰に佩はざる銃 ● 草具として ● 接待役 ● 和餐なり

信長至寺。入屏風中。結髮更衣而出。儀容閑雅。雖從

信長寺に至り、屏風中に入りて、髪を結び衣を更へて出づ。儀容閑雅、從者と雖も、皆驚く。秀龍、其二幸春日・堀田をして出でて迎へしむ。信長、與に言はず。

者皆驚。秀龍使其二宰春日堀田出迎。信長不與言。過羣士前。上堂倚柱而坐。頃焉秀龍出。信長如不見。者堀田進曰。是山城守也。信長乃顧秀龍曰。適在道傍民舍中。所見者。何酷類公也。乃接見之。於是秀龍復命具酒饌。如儀。既畢。自送信長。二者數里。既別。日送久之。曰。吁乎。美濃一國。吾終不得爲之贊幣也。信長時年二十。

先是常祐死于戰。其遺臣織田三位。坂井大膳。河尻

羣士の前を過ぎて、堂に上り柱に倚りて坐す。頃ありて、秀龍出づ。信長、見ざる者の如し。堀田進みて曰く、是れ山城守なりと。信長乃ち秀龍を顧みて曰く、適く道傍の民舍中に在りて見る所の者、何ぞ酷だ公に類すると。乃ち之を接見す。是に於て、秀龍復た命じて、酒饌を具ふること儀の如くす。既に畢りて、自ら信長を送ること數里なり。既に別れて、目送すること之を久しくして曰く、吁乎、美濃一國、吾れ終に之を贊幣と爲さざるを得ずと。信長時に年二十なり。

● 身づくろひしとマカ ● 二宰と言葉を交さず ● 秀龍 ● 酒や膳部 ● 見送る ● 翌日出河

是より先、常祐戦に死す。其遺臣織田三位・坂井大膳・河尻左馬等、常祐の子彦五郎を擁して、信秀・信長と兵を構ふ。斯波義統は、義良の孫なり。清洲城中に

左馬等。擁常祐子彦五郎。與信秀信長。構兵。斯波義統者。義良孫也。居清洲城中。竊右信長。彦五郎等覺之。不自安。二十三年七月。坂井河尻等。襲義統。弑之。毛利秀孝以義統孤兒。脫走。來那古野。信長奉之子。天王坊。謂將士曰。清洲。我宗家也。而弑我累世之主。

居て、竊かに信長を右く。彦五郎等、之を覺りて、自ら安んぜず。二十三年七月、坂井・河尻等、義統を襲ひて、之を弑す。毛利秀孝、義統の孤兒を以て脱走して、那古野に来る。信長、之を天王坊に奉じ、將士に謂ひて曰く、清洲は我が宗家なり。而して我が累世の主を弑す。誅せざるべからずと。乃ち柴田勝家等の七將を遣して、清洲を攻め、三位・左馬と城外に戦ひて、之を斬る。大膳人をして、援を守山城主織田信光に乞はしむ。信光、陰かに之を信長に謀る。信長、伴りて之を許さしむ。弘治元年四月、大膳、信光を城内に延きて、自ら兄大炊と來り見る。信光、兵を率ゐて往き、大炊を見るに及びて、立ちどころに刀を抜きて之を斬る。大膳出奔す。信長馳せ至りて、彦五郎を圍み、其弑逆を數めて、之を誅し、終に清洲を取りて、徙り居る。信光をして那古野に居らしめ、河東郡を食ましむ。已にして信光の家、内變あり。其下の害する所と爲る。信長林通勝を以て、那古野の留守と爲す。

不可不誅。乃遣柴田勝家等七將攻清洲。與三位左馬三城外斬之。大勝使人乞援於守山城主織田信光。信光陰謀之。信長使伴許之。弘治元年四月。大勝延信光於城内。自與兄大炊來見。信光串兵而往。及見。大炊立拔刀斬之。大勝出奔。信長馳至。圍彦五郎。數其弒逆之罪。終取清洲。徙居焉。令信光居那古野。食河東郡。已而信光家內變。爲其下所害。信長以林通勝爲那古野留守。

通勝、信長の標悍を患へて、弟光春・柴田勝家と、之を弒して信行を立てんと謀る。信長之を覺る。二年五月、信長獨り四弟信時と、卒に那古野に往きて之を誦ふ。光春、通勝に耳語して曰く、是れ天幸なり。宜しく速かに大事を行ふべしと。通勝忍びず。信長還りて、名塚に若し、佐久間大學をして之を守らしむ。八月、勝家・光春、各々千騎に將として、急に名塚を攻む。名塚、急を清洲に告ぐ。信長、即ち見兵七百を率ゐて赴き援ひ、織田造酒丞等をして、勝家に當らしめて、而して自ら光春と戦ふ、我が兵利あらず。隊將森可成、信長に謂ひて曰く、

今日の戦、我が軍克つと。信長何を以て之を知ると問ふ。曰く、光春、驕色有り。信長馳せんと欲す。可成曰く、少しく之を俟てと。已にして光春、愈々勝に乗じて、其麾下の兵を縱つ。可成曰く、以て馳すべしと。信長乃ち馳せて之を撃破し、手づから槍を揮ひて光春を縱殺し、遂に轉じて勝家の軍に赴きて、大に呼びて曰く、我れ已に光春を獲たり。勝家をして逸せしむる勿れと。勝家、大に怖れて、終に走りて、末盛城に歸る。

- 氣早にてあらし
- さとやく
- 尾張國に在り
- 高ぶる顔色あり
- 突刺し殺す
- 逃がす

也。宜速行。大事。通勝不。忍。信長還。告。于。名塚。令。佐。久。間。大學。守。之。八月。勝家。光。春。各。將。千。騎。急。攻。名。塚。名。塚。告。急。於。清。洲。信。長。即。率。見。兵。七。百。赴。授。使。織。田。造。酒。丞。等。當。勝。家。而。自。與。光。春。戰。我。兵。不。利。隊。將。森。可。謂。信。長。曰。今。日。之。戰。我。軍。克。矣。信。長。問。何。以。知。之。曰。光。春。有。驕。色。信。長。欲。馳。可。成。曰。少。俟。之。已。而。光。春。愈。乘。勝。縱。其。麾下。兵。可。曰。成。可。以。馳。矣。信。長。乃。馳。擊。破。之。手。揮。槍。縱。殺。光。春。遂。轉。赴。勝。家。軍。大。呼。曰。我。已。獲。光。春。矣。勿。使。勝。家。逸。勝。家。大。怖。終。走。歸。末。盛。城。

信長母六角氏、信行を愛して、之と俱に末盛に居る。是に於て、六角氏、信行をして誓書を作らしめ、勝家・通勝、皆僧服を被りて、來りて其罪を謝す。信長

於_レ是六角氏
令_レ信行作_レ誓
書。勝家通勝
皆被_レ附服。來
謝_レ其罪。信長
謂_レ通勝曰。是
吾之罪已。吾
前背_レ德。許_レ諫。
使_レ平手自殺。
汝自_レ今代_レ平
手_レ匡_レ我。乃遣
守_レ那古野。如_レ
放_レ信行仍不_レ
悛。城_レ龍泉寺。
欲_レ與_レ岩倉兵_レ
合。略_レ取_レ東郡。
令_レ其將都築
藏人招_レ聚兵
士。勝家數_レ諫。
信行疏_レ斥_レ之。永

通勝に謂ひて曰く、是れ吾の罪のみ。吾れ前に徳に背き諫に忤ひて、平手をし
て自殺せしめたり。汝、今より平手に代りて我を匡せと。乃ち遣りて那古野を守
らしむること故の如し。信行、仍ほ悛めず、龍泉寺に城きて、岩倉の兵と合し、
東郡を略取せんと欲して、其將都築藏人をして、兵士を招き聚めしむ。勝家數々、
諫む。信行、之を疏斥す。永祿元年正月、信行、諸將士を饗して、勝家に及ば
ず。勝家怒りて、夜、清洲に來りて、信行反すと告ぐ。信長、乃ち疾と稱し
て、村井貞勝をして六角氏に告げしめて、家を信行に讓らんと欲す。六角氏、悅
びて、信行に告ぐ。信行即ち至りて、將に信長の臥内に入らんとす。信長、豫め
力士三人を伏せて、之を斬らんとす。成らず。信行走り出づ。池田信輝要して廊
下に撃ちて、之を斃す。

● ころも ● 行を正し正道に導け ● 尾羽國に在り ● 勝んじしりぞく ● 正親天皇の年號

信行疏斥之。永祿元年正月。信行要諸將士。不及勝家。勝家怒。夜來清洲。告信行反。信長

乃稱疾。使村井貞勝告六角氏。欲讓家於信行。六角氏悅。告信行。信行即至。將入信長臥
内。信長豫伏力士三人。斬之。不成。信行走出。池田信輝要擊于廊下。斃之。

二年四月。齊
藤秀龍欲廢
長子義龍。立
少子某。義龍
誘殺少子。與
秀龍鬪。遂弑
之。信長將兵
援秀龍。不及。
還。義龍蹶之。
信長自殿而
退。會岩倉城
主遙授義龍。
以兵三千。軍
丹原野。時我
見兵。匿八十
三騎。乃驅清
洲市人。伐竹

二年四月、齋藤秀龍、長子義龍を廢して、少子某を立てんと欲す。義龍誘ひ
て少子を殺し、秀龍と鬪ひて、遂に之を弑す。信長兵に將として秀龍を援ふ。及
ばずして還る。義龍、之を蹶す。信長自ら殿して退く。岩倉城主、遙かに義龍
を援ひ、兵三千を以て丹原野に軍するに會ふ。時に我が見兵、厩かに八十三騎な
り。乃ち清洲の市人を驅りて、竹を伐りて槍と爲し、軍後に列せしむ。故以て大
兵來ると爲して、乃ち退去す。七月、信長、犬山城主織田信清と兵三千を合せ
て、岩倉を攻む。岩倉の兵出でて、浮野に戦ふ。信長弓銃手をして横撃せしめて
之を走らせ、追ひて城下に至りて還る。信長は南行し、信清は北行す。城兵、信
清の兵寡きを視るや、出でて之に尾す。信長還り援ひて、夾み撃ちて大に之を破
り、遂に城を圍む。三月にして之を拔く。是に於て、信長盡く尾張を取る。獨智

多一郡今川氏に屬せり。

● 跡を追ふ ● 尾張國に在り ● 町人 ● 尾張國に在り ● 同上

爲槍列予軍後敵以爲大兵來也乃退去。七月信長與犬山城主織田信清合兵三千攻岩倉岩倉兵出戰于浮野信長令弓銃手橫擊走之追至城下而還信長南行信清北行城兵視信清兵寡也出尾之信長還接夾擊大破之遂圍城三月拔之於是信長盡取尾張獨智多一郡屬今川氏

先是鳴海城將山口某時附今川氏又取大高沓懸二城更城于村木信長攻下村木又攻笠寺城城將戶部某驍勇不可下信長收兵而歸以戶部善書令侍史學之期是より先、鳴海の城將山口某時きて、今川氏に附く、又大高・沓懸二城を取り、更に村木を城く。信長、村木を攻め下し、又、笠寺城を攻む。城將戸部某、驍勇にして下すべからず。信長、兵を收めて歸る。戸部、書を善くするを以て、侍史をして之を學ばしむ。明年にして得たり。乃ち戸部の織田氏に通ずるの書を製作して、森可成をして、偽りて賈人と爲り、齎して駿河に赴きて、之を義元に上らしむ。義元怒りて、戸部を召して之を殺し、又、山口父子を殺す。義元、既に駿河・遠江・參河を定め、將に大舉して尾張を攻めんとす。信長、諸城壘を修め、佐久間大學をして鷺津を守り、飯尾定宗をして丸根を守らしめて、大高・笠

寺の兵と數々戰ひて、決せず。

● 二城共に尾張國に在り ● 同上 ● 強くして勇氣あり ● 一年 ● 比せて作る ● 商人 ● 尾張國に在り ● 同上

年而得。乃置作戸部通織田氏書令下森可成偽爲賈人齎赴駿河。上之義元。義元怒。召戸部殺之。又殺山口父子。義元既定駿河遠江參河。將大舉攻尾張。信長修諸城壘。令佐久間大學守鷺津。飯尾定宗守丸根。與大高笠寺兵數戰。不決。

三年五月。義元自將三國兵四萬五千。來攻。十八日。大學定宗馳使清洲告曰。義元昨日至。沓懸。今夜將運糧大高。而且攻兩城也。信長召將士。言曰。我欲赴三年五月、義元、自ら三國の兵四萬五千に將として來り攻む。十八日、大學・定宗使を清洲に馳せて、告げて曰く、義元、昨日沓懸に至り、今夜、將に糧を大高に運びて、且、兩城を攻めんとすと。信長、將士を召して言ひて曰く、我れ赴き救はんと欲す、如何と。林通勝等説きて曰く、敵衆、五萬に垂んとす。而して我が兵、三千に過ぎず。宜しく其來銳を避け、本城に據りて之を待つべしと。信長曰く、不可なり。吾れ天下の英雄を視るに、其池利を恃みて、以て事機を失ひ、自ら滅亡を取る者、少しと爲さず。先君言へる有り。鄰國の來り犯すに、苟も遲疑す

救。如何。林通勝等說曰。敵衆垂五萬。而我兵不過三千。宜避其來。銳據本城待之。信長曰。不可。吾視天下英雄。恃其地利。以失事機。自取滅亡者。不爲少矣。先君有言。鄰國之來犯。苟有遲疑。我將士且變志。當亟出迎戰。吾不敢背先君之教。明日將一戰決勝敗也。與吾同志者努力。諸將莫敢諫者。

る有らば、我が將士且つ志を變せん。當に亟かに出でて迎へ戦ふべしと。吾れ敢て先君の教に背かず。明日將に一戦して、勝敗を決せんとす。吾と志を同じくする者は努力せよと。諸將敢て諫むる者莫し。

● 敵の多勢 ● 來たることはするどし ● 事の機會 ● つとめはげめ

信長因命酒與飲。酒酣天明。信長自起舞。誦古語曰。人世五十年。乃如夢與幻。有生斯有死。壯士將何恨。

信長因りて酒を命じて與に飲む。酒酣にして天明く。信長自ら起ちて舞ひ、古語を誦ひて曰く、人生五十年。乃ち夢と幻との如し。生あれば斯に死あり。壯士將た何をか恨みんと。舞畢り、即ち甲を被り馬に上り、單騎鞭を擧げて出づ。騎能く屬する者十餘人なり。熱田祠に及ぶ比、千人を得たり。自ら戦勝を祈り、陰かに祠官をして甲を籠中に鳴らさしむ。信長軍士を顧みて曰く、

神我を助くるなりと。乃ち山路を取りて、行、諸城の兵を收む。兵凡そ三千騎なり。東望して兩城に火起るを見る。將士遠巡す。信長、益々其馬に鞭ちて進む。林通勝・柴田勝家・池田信輝・毛利秀高、馬を扣へて諫めて曰く、彼は大家新に勝つ。寡兵を以て之を犯さば、立ちどころに覆没せんと。信長聲を厲して曰く、汝が輩且く吾が言を聞け。吾れ妄意に進みて敵を犯すに非ざるなり。敵、糧を大高に納れて、終夜息はず。今亦兩城を抜く。其兵罷極る。而して義元、我を侮りて、復た備を設けず。吾れ是の時に乘じて、其不意に出でば、一戦にして擒にすべきなりと。

● 常山記談によれば、魏樂に羅生門の曲舞はせられし時云々とあれども此の文句なし。幸若舞の教邊に「人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢の如く幻の如くなり、一度生をうけ、滅せぬものゝ有るべきか」とあり、是れか。此は人生は恰も夢幻の如くにして生ある者は必ず死す、壯士何ぞ死すとも遺恨に思はんやとなり ● 祠官 ● 社殿の中 ● 安らなる心

舞畢。即被甲上馬。單騎鞭屬者十餘人。比及熱田祠。得千人。自祈戰勝。陰使祠官鳴甲于籠中。信長顧我士曰。神助我也。乃取山路。行收諸城兵。兵凡三千騎。東望見兩城。火起。將士遠巡。信長益々其馬而進。林通勝・柴田勝家・池田信輝・毛利秀高。扣馬諫曰。彼大家新勝。以寡兵一犯之。立覆没矣。信長厲聲曰。汝輩且聞吾言。吾

非妄意進犯敵也。敵納糧大高。終夜不息。今亦拔兩城。其兵罷極。而義元侮我。不復設備。吾乘是時。出其不意。可一戰而擒也。

梁田出羽進。贊其計曰。敵拔兩城。未更其陣。中軍必在後。我直襲之。義元可獲矣。信長乃伏旗鼓。循山而馳。至於桶峽。敵視義元營。信長欲下馬接戰。森可成曰。衆寡不敵。宜騎而突之。信長曰。善。乃馬上揮槍。先衆馳下。會大

梁田出羽進みて其計を贊して曰く、敵、兩城を拔きて、未だ其陣を更へず。中軍必ず後に在らん。我れ直に之を襲はば、義元獲べしと。信長乃ち旗鼓を伏せ、山に循ひて馳せ、桶峽に至りて、義元の營を瞰視す。信長、馬を下りて接戦せんと欲す。森可成曰く、衆寡敵せず。宜しく騎して之を突くべしと。信長曰く、善しと。乃ち馬上に槍を揮ひて、衆に先だちて馳せ下る。會々大雷霧雨にして昏黑なり。我が兵、鼓譟して、營を斫りて入る。敵衆、大に驚きて擾亂し、出づる所を知らず。服部小平太進みて幕中に入りて、義元に薄る。義元、刀を抜きて其膝を撃つ。毛利秀高、義元を鏖して、其首を斬りて出づ。駿河の軍大に潰ゆ。信長追撃して、其精騎二千餘級を斬る。乃ち熱田に賽して還る。士女、路を夾みて迎へ觀る。信長、義元の首を馬前に掲げて、清洲に凱旋す。大高・香懸の諸城、皆

解きて走る。信長此を以て、名、天下に聞ゆ。

● 見下す ● まつくり ● 騒ぎみだる ● つき列して ● 御座まみり

雷霧雨昏黑。我兵鼓譟。斫大驚擾亂。不知其所出。服部小平太進入幕中。薄義元。義元拔刀擊其膝。毛利秀高鏖義元。斬其首而出。駿河軍遂大潰。信長追擊。斬其精騎二千餘級。乃賽熱田。而還。士女夾路迎觀。信長掲義元首于馬前。凱旋清洲。大高香懸諸將皆解走。信長以此名聞天下。

當此時。足利氏大衰。三好氏。松永氏。專京畿之政。而七道將士各據其國。迭相爭奪。信長慨然有觀定天下之志。初尾張人道家某。與京師人立入宗繼爲左

此時に當りて、足利氏、大に衰へ、三好氏・松永氏、京畿の政を專にす。而して七道の將士、各々其國に據りて、迭に相爭奪す。信長、慨然として、天下を裁定するの志有り。初め尾張の人道家某、京師の人立入宗繼と云ふ者と相識る。宗繼は左京亮たり。父祖より京郊に居りて、田業多し。供御乏絶して、毎に給を取る。嘗て中納言藤原惟房に説きて曰く、方今天下、大に亂れて、宮闕傾敝し、供御の邑、盡く武人の占むる所と爲る。臣を以て之を視るに、其勢、天下の豪傑を得るに非ざれば、以て天下の亂を定むるに足らず。聞く、尾張に織田信長といふ者有り。年甫めて二十にして、東國の咽喉に割據して、能く少を以て衆を

京亮。自父祖一居京郊。多田業。供御乏絕。每取給焉。嘗說中納言藤原惟房曰。方今天下大亂。宮闈頽敝。供御之邑。盡爲武人所占。以臣視之。其勢非得天下豪傑。不足以定天下之亂。聞尾張有織田信長者。年甫二十。割據東國之咽喉。能以少摧衆。是其人必有絕世之才。君盍奏請。諭旨。信長以中廢亂反正之事。惟房畏憚。內外不敢決。宗繼再入。說之曰。事如漏泄。臣獨任其責。帝探闕鏡室。決計。

推くと。是れ其人必ず絶世の才有らん。君盍ぞ奏して論旨を請ひて、信長に囑するに、撥亂反正の事を以てせざると。惟房、内外を畏憚して、敢て決せず。宗繼再び入りて、之に説きて曰く、事、如し漏泄せば、臣獨り其責に任せんと。帝、闕を鏡室に探りて計を決す。

● 討ちて定む ● 一本に右とあり ● 田地や屋敷御蔵まあり ● 獲へやぶる ● 世に珍らしき才 ● 亂を治めて正しき御代にかへす ● もれる ● 八咫鏡を安置せる處、即ち内侍所

五年十月。惟房宣言。天子感異夢。將奉幣于熱田祠。乃使宗繼及

五年十月、惟房、宣言す。天子、異夢に感じて、將に幣を熱田祠に奉らんとすと。乃ち宗繼及び磯貝久次をして、密旨を齎して、尾張に赴かしむ。因りて信長に錫ふに御用合香を以てし、道家氏に館す。信長獵より歸りて、道家を過る。

磯貝久次齎密旨。赴尾張。因錫信長。以御用合香。館道家氏。信長獵歸。過道家。道家告以故。信長乃沐浴。更衣。出見宗繼。宗繼宣達勅旨。信長謂。天子天下之君。宜自我共戰焉。而今反辱使命。加以寵賤。吾何以堪之。當藉天威。以夷凶徒。不日入朝。錫力圖報。因自訓食。以享二使。召森可成。柴田勝家。丹羽長秀。木下秀吉。瀧川一益。菅谷長賴。堀秀政。諗以勅旨。於是日夜議西上之策。

道家告ぐるに故を以てす。信長乃ち沐浴して衣を更め、出でて宗繼を見る。宗繼、勅旨を宣達す。信長、宗繼に謂ひて曰く、吾れ聞く、天子は天下の君と。宜しく我より職に共すべし。而るに今、反つて使命を辱くし、加ふるに寵賤を以てす。吾れ何を以てか之に堪へん。當に天威を藉りて、以て凶徒を夷け、不日入朝して、力を竭し報を圖るべしと。因りて自ら食を調へて、以て二使を享し、森可成・柴田勝家・丹羽長秀・木下秀吉・瀧川一益・菅谷長賴・堀秀政を召して、諗くるに勅旨を以てす。是に於て、日夜西上の策を議す。

● 不思議なる夢 ● 内密の勅旨 ● 訓合したる宴香 ● 御賜與の品

刈谷城主水野信元説曰。

刈谷城主水野信元説きて曰く、參河の徳川氏は、舊今川に屬す。公宜しく之

參河德川氏。舊屬今川公。宜結納之。委之東事。而西面以圖天下。信長從之。甲斐國主武田信玄國富兵強。信長厚贈遺之。約爲婚。姻以順適其意。而西圖齊藤氏。

に結納し、之に東事を委ねて、西面して以て天下を圖るべしと。信長、之に従ふ。甲斐の國主武田信玄國富兵強し。信長厚く之に贈遺して、約して婚姻を爲し、以て其意に順適して、西、齊藤氏を圖る。

● 參河國に在り ● 腹を合せたより合ふ ● したがい合ふやうにす

齊藤秀龍之未死也。有二驍將。信長計除之。乃乘夜外出者數。夫人齊藤氏疑其有所私。頗有妬色。信長曰。吾非有他心。乃欲成秘密計耳。夫人問其計。曰。不可。

齊藤秀龍の未だ死せざるや、二驍將有り。信長之を除かんと計る。乃ち夜に乗じて外出すること數々す。夫人齊藤氏、其の私する所有るを疑ひて、頗る妬色有り。信長曰く、吾れ他心有るにあらず。乃ち秘密計を成さんと欲するのみと。夫人、其計を問ふ。曰く、女と言ふべからずと。固く問ふ。信長乃ち之を誑して曰く、美濃の二將、陰かに款を我に通じて、舅氏を圖る。曰く、事成らば則ち疑を擧げんと。吾れ毎夜出でて之を望むに、未だ擧らざるなりと。夫人憂恐して、密かに書を爲りて、之を秀龍に告ぐ。秀龍驚きて、即ち其二將を誅す。齊藤

與女言也。固問。信長乃誑之曰。美濃二將。陰通款於我。圖舅氏。曰。事成則擧。吾每夜出望之。未擧也。夫人憂恐。密爲書告之。秀龍。秀龍驚。即誅其二將。齊藤氏兵力遂自是削弱矣。龍既弑。傳子龍興。龍興暗弱。其將士多歸心於信長。

氏の兵力遂に是より削弱す。義龍、既に秀龍を弑して、子龍興に傳ふ。龍興弱なり。其將士多く心を信長に歸す。

● 二人の強き大將 ● ねためる顔色 ● 秘密の謀計 ● 齊藤秀龍 ● のろし ● 暗愚にして至弱なり

四年五月。信長將兵千五百。出西美濃。洲股城將長井某。日根野某。以二千騎迎之。觀我兵寡。徑淖而來。信長分兵爲三隊。以一隊自衛。一隊登其前一隊橫

四年五月、信長、兵千五百に將として、西美濃に出づ。洲股の城將長井某、日根野某、六千騎を以て之を迎へ、我が兵の寡きを觀て、淖を徑りて來る。信長、兵を分ちて三隊と爲し、一隊を以て自ら衛り、一隊は其前に燈り、一隊は之を横撃して、二將を斬る。是に於て、九條・洲股に城きて、織田勘解由をして九條を守り、木下秀吉をして洲股を守らしむ。五年五月、齊藤龍興井口城に在り。其將士に謂ひて曰く、洲股河漲る。信長未だ來る能はず。吾れ此時を以て九條を攻めんと欲すと。乃ち其將稻葉・牧村等を率ゐて、九條を攻む。九條、急を信長に

擊之。斬二將。於_レ是城_レ于_二九條洲股_一。令_レ織田勸解由守_二九條木下秀吉守_一洲股。五年五月。齋藤龍興在_二井口城_一。謂_二其將士_一曰。洲股河。信長未_レ能_レ來。吾欲_レ以_二此時_一攻_二九條_一。乃率_二其將稻葉牧村等_一。攻_二九條_一。九條告_二急_一信長。

信長即赴援。至_二河側_一。不可_レ渡。信長曰。吾寧_レ溺死。豈可_レ坐視_レ不_レ救乎。乃鞭_レ馬亂_レ流而渡。全兵從_レ之。時既夜。九條城將爲_二先鋒_一。擊_レ走_レ牧村。與_二稻葉_一關_レ而死。池田信輝。佐佐成政。誠_二

信長即ち赴き援ひて、河側に至る。渡るべからず。信長曰く、吾れ寧ろ溺死するも、豈に坐視して救はざる可けんやと。乃ち馬に鞭ち流を亂して渡る。全兵之に従ふ。時既に夜なり。九條の城將先鋒と爲りて、撃ちて牧村を走らせ、稻葉と闘ひて死す。池田信輝・佐佐成政、稻葉の聲を識る。交々暗中に刺して、之を斃し、其首を譲りて取らず。柴田勝家之を取りて、獻じて曰く、信輝・成政、首を譲りて取らず。臣謹みて獻すと。信長三士を褒賞す。凱して歸り、終に徙りて小牧城に居りて美濃に迫る。丹羽長秀を遣して、二城を攻め下す。龍興の將稻葉通朝・氏家經國・伊賀範俊、龍興の失政を諫む。聽かず。七年八月、三將、款を信

告ぐ。
● ぬかるみ ● 美濃國に在り ● 同上 ● 危急

稻葉聲。交刺_レ于_二暗中_一。斃_レ之。讓_二其首_一不_レ取。柴田勝家取_レ之。獻_レ曰。信輝成政讓_レ首不_レ取。臣謹_レ獻_レ焉。信長褒_レ賞_二三士_一。凱_レ而歸。終_レ徙_レ居_二小牧城_一。以_二迫_レ美濃_一。遣_二丹羽長秀_一攻_二下_二二城_一。龍興將_二稻葉通朝_一。氏家經國。伊賀範俊。諫_レ龍興失政。弗_レ聽。七年八月。三將送_二款_一於_二信長_一。信長許_レ之。乃聲_二言_一攻_二參河_一。以_二聚_レ兵_一。兵既聚。乃率_レ而西行。上_二瑞龍山_一。以_二瞰_レ井口。發_レ火疾攻。城兵惶駭。西_レ降。乃與_二三將_一來_レ謁。曰。君來何速也。信長既定_二尾張美濃_一。徙_レ居_二于_二井口_一。更名_二岐阜_一。會有_レ獻_二佳麩_一。二_二者_一。信長御_レ之。曰。吾方有事_二四方_一。未_レ暇_二遊獵_一。吾定_二天下_一。然後受_レ爲_レ未_レ晚也。

長に送る。信長之を許す。乃ち參河を攻むと聲言して、以て兵を聚む。兵既に聚る。乃ち率るて西行し、瑞龍山に上りて、以て井口を瞰ひ、火を縱ちて疾く攻む。城兵惶駭して降る。乃ち龍興を逐ふ。三將來り謁して曰く、君來る何ぞ速かんと。信長既に尾張・美濃を定め、徙りて井口に居り、更めて岐阜と名づく。會有佳麩二つを獻する者有り。信長之を御けて曰く、吾れ方に四方に事有り。未だ遊獵に暇あらず。吾れ天下を定めて、然る後に受くるも、未だ晚からずと爲すと。

● 尾張國に在り ● 政治の執り方の懸しきを諷む ● 恐れ驚く ● 遊獵するひま無し

十年十月。天子。復た立入宗繼。宗繼。昭。來。昭。信長。曰。朕。願。四方。莫。如。卿。武。義。降。密。勅。賜。以。征。討。卿。存。心。王室。不。憚。跋涉。開。已。平。美。濃。奮。庸。宣。威。朕。深。嘉。之。宜。益。勉。果。毅。以。副。朕。望。因。賜。戰。袍。一。領。信。長。召。村。井。貞。勝。讀。詔。領。旨。誠。激。受。其。袍。曰。臣。曾。師。詣。闕。之。日。當。三。服。以。拜。賜。耳。

先。是。三。好。氏。弒。將。軍。足。利。義。輝。義。輝。弟。

十年十月、天子、復た立入宗繼をして、詔を齎らし來らしめて、信長に詔して曰く、朕、四方を顧みるに、卿が武に如くは莫し。曩に密勅を降して、囑するに征討を以てす。卿、心を王室に存し、跋涉を憚らず。聞く、已に美濃を平け、庸を奮ひ威を宣ふと。朕、深く之を嘉す。宜しく益々果毅を勉んで、朕が望に副ふべしと。因りて戰袍一領を賜ふ。信長、村井貞勝を召し、詔を讀ましめて、旨を領して、感激し、其袍を受けて曰く、臣、師を督して闕に詣づるの日は、當に服して賜を拜すべきのみと。

● あちこちとかけまはる ● いさを ● 鐘直垂 ● 朝延に對内する日

是より先、三好氏、將軍足利義輝を弒す。義輝の弟義昭、走りて六角義賢に依りて、其力を借りて難を靖んぜんと欲す。三好康長・三好政康・岩成左通、三好の

義昭。走。依。二。六角。義賢。欲。借。三。其。力。靖。難。三。好。康。長。三。好。政。康。岩。成。左。通。稱。三。好。三。黨。專。三。京。師。政。陰。令。三。義。賢。圖。三。義。昭。義。昭。懼。走。依。二。武。田。義。統。義。統。統。辭。又。依。二。朝。倉。義。景。義。景。諾。而。不。果。又。喪。其。愛。子。志。氣。頓。沮。義。昭。流。寓。於。外。三。歲。聞。信。長。威。名。欲。往。託。焉。使。二。卜。人。太。華。筮。之。遇。二。

三黨と稱して、京師の政を專にし、陰かに義賢をして義昭を圖らしむ。義昭懼れて、走りて武田義統に依る。義統、辭す。又、朝倉義景に依る。義景諾して果さず。又、其愛子を喪ひて、志氣、頓に沮む。義昭、外に流寓すること三歳なり。信長の威名を聞きて、往きて託せんと欲す。卜人太華をして之を筮せしむ。臨の節に之くに遇ふ。曰く、知にして臨む。大君の宜しき、吉。是れ之を柔、剛に任ずと謂ふ。剛に任ぜば、則ち勞せずして治らんと。義昭、意を決す。十一年七月、遂に使をして來りて信長に諭さしむ。信長、方に西上を計る。即ち之を諾して、將吏を遣して之を迎へ、立正寺に館す。義昭、信長を見て、託するに興復を以てす。信長答へて曰く、是れ信長の度内に在るのみ。幕下此に臨む。當に館を築きて以て之を奉すべし。然れども信長、幕下の爲に京師を定むる、兩月を出でじ。館を以て爲す莫きなりと。

● 元氣が盡になくなる ● 他郷に身を寄する ● 決心す ● 景見の中 ● 將軍義昭

臨之節。曰。知。應。大君之宜。吉。是之謂。柔。任。於。剛。則。不。勞。而。治。也。義。昭。決。意。十。一。年。七。月。遂。使。使。來。諭。信。長。信。長。方。計。四。上。即。諾。之。遣。將。史。一。迎。之。館。于。正。立。寺。義。昭。見。信。長。託。以。興。復。信。長。答。曰。是。在。信。長。度。內。耳。幕。下。臨。此。當。築。館。以。奉。之。然。信。長。爲。幕。下。定。京。師。不。出。兩。月。矣。莫。以。館。爲。一。也。

八月五日。大會。將。士。于。岐。阜。謂。之。曰。吾。將。有。事。於。二。京。畿。汝。衆。各。修。二。兵。備。以。候。我。令。乃。盡。散。二。遣。之。自。率。數。十。騎。至。澤。山。使。使。六。角。義。賢。說。以。二。順。逆。義。賢。及。子。義。弼。業。已。與。三。好。三。黨。三。黨。聞。信。長。助。義。昭。

八月五日、大に將士を岐阜に會して、之に謂ひて曰く、吾れ將に京畿に事有らんとす。汝衆、各々兵備を修めて、以て我が令を候てと。乃ち盡く之を散遣し、自ら數十騎を率ゐて、澤山に至りて、使を六角義賢に使用して、説くに順逆を以てす。義賢、及び子義弼、業已に三好の三黨に與す。三黨、信長の義昭を助くと聞き、則ち益々義賢・義弼に昭はすに利を以てす。曰く、力を竭して以て信長を拒ぐ、曠日彌久せよ。我れ大軍を以て後援を爲さんと。信長、澤山に在ること十日、使者、三反す。義賢、竟に聽かず。信長、乃ち美濃に歸る。近江の地圖を索めて、諸將と之を計畫す。令を管内に下して曰く、九月五日を以て、岐阜に會せよと。會する者凡そ三萬人なり。七日、信長、諸軍に將として西す。義賢・義弼、觀音寺城

則益昭。義賢。義弼。以。利。曰。竭。力。以。拒。信。長。曠。日。彌。久。我。以。大。軍。爲。二。後。援。也。信。長。在。二。澤。山。十。日。使。者。三。反。義。賢。竟。不。聽。信。長。乃。歸。美。濃。索。二。近。江。地。圖。與。二。諸。將。二。計。二。畫。之。下。二。令。管。內。二。曰。以。二。九。月。五。日。會。于。二。岐。阜。會。者。凡。三。萬。人。七。日。信。長。將。二。諸。軍。二。而。西。義。賢。義。弼。居。二。觀。音。寺。城。二。修。二。兵。備。和。田。山。等。十。八。城。以。三。和。田。山。當。二。美。濃。之。衝。最。固。其。壘。壁。守。以。二。精。兵。二。欲。待。我。軍。攻。之。而。首。尾。相。救。

に居り、箕作・和田山等の十八城を修め、和田山は美濃の衝に當るを以て、最も其壘壁を固くして、守るに精兵を以てす。我が軍の之を攻むるを待つて首尾相救はんと欲す。

● 近江國に在り ● 將軍義昭に従ふことの正道にして三黨に與することの逆道なる所以なるを説き明かす ● 三回往復す

信長。謀。二。知。其。計。乃。使。三。美。濃。三。將。備。二。和。田。山。而。宣。言。向。二。觀。音。寺。因。引。二。兵。襲。二。箕。作。城。兵。出。戰。未。下。秀。吉。丹。羽。長。

信長、其計を謀知して、乃ち美濃の三將をして、和田山に備へしめて、觀音寺に向ふと宣言して、因りて兵を引きて箕作を襲ふ。城兵出で戦ふ。木下秀吉・丹羽長秀等、先鋒と爲りて、故に緩く之を攻め漸く城下に至れば、則ち奮撃突入して、卒に之を抜く。和田山城、風を望みて解きて去る。義賢・義弼、夜、城を棄てて遁る。信長、三日にして十八城を下し、自ら觀音寺に入りて、政を國中に爲

秀等爲先鋒。故緩攻之。湖至城下。則奮擊突入。卒拔之。和田山城。望風解去。義賢義弼夜棄城遁。信長三日下二十八城。自入觀音寺。爲政國中。招聚逃亡。使三人迎義昭。相見于守山。明日。濟湖陣于岡城寺。湖山之間。無非兵者。

し、逃亡を招聚して、人をして義昭を迎へしめ、守山に相見る。明日、湖を濟りて、園城寺に陣す。湖山の間、兵にあらざる者無し。三好の三黨、驚懼して、京師を棄てて去る。是に於て、信長、諸軍を整へて京師に入る。天子、藤原惟房をして、迎へて之を栗田口に勞はしむ。信長稽首して、惟房に謂ひて曰く、臣、屢々過寵を辱くして、悚懼に勝へず。幸に臣の爲に謝せよと。立入宗繼、又惟房に従ひて至る。信長、服する所の戰袍を指して、之に謂ひて曰く、是れ嚮に賜ひし所なりと。是に於て、義昭をして清水寺に居らしめて、自ら東福寺に陣す。美濃を出でしより、此に至りて、蓋し十有二日なり。

● 問諜を放ちてさぐり知り ● 言觸らし ● 一本に二日とあり ● 湖と山の間悉兵なり ● 首を下げておじぎをする ● 身分に過ぎたる寵愛 ● 恐れかしこむ

三好三黨驚懼。棄京師去。於是信長整諸軍入京師。天子使藤原惟房迎勞之。栗田口。信長稽首。謂惟房曰。臣屢辱過寵。不勝悚懼。幸爲臣謝。立入宗繼。又從惟房至。信長指所服戰袍。謂之曰。是嚮所賜也。於是使義昭居清水寺。而自陣東福寺。自出美濃。一至此。蓋十有

二日矣。

京師士民。固聞信長威武。慮其暴掠。相驚曰。信長至矣。皆荷擔而走。及信長至。號令嚴明。秋毫無犯。使管谷長賴巡行街市。織田氏養卒。有與買人爭價者。輒執縛之。樹以視行道者。於是士民相告而歸。物情大安。

京師の士民、固より信長の威武を聞く。其暴掠を慮りて、相驚きて曰く、信長至ると。皆荷擔して走る。信長至るに及びて、號令嚴明。秋毫も犯さず。菅谷長賴をして街市を巡行せしむ。織田氏の養卒、買人と價を争ふ者有り。輒ち執へて之を樹に縛して、以て行道の者に視す。是に於て、士民相告けて歸る。物情大に安し。

● 風暴して採取る ● 家財をになひかたづけて ● 少しも人民に害を加へず ● 兵卒 ● 世間の様子が大に落着く

信長聞三黨據山城攝津河内諸城。即

信長、三黨、山城・攝津・河内の諸城に據ると聞きて、即日、柴田勝家・森可成等を遣して、萬人に將として、桂川を涉り、岩成左通を青龍寺に攻めしめ、明日、

日遣柴田勝家森可成等。將萬人涉桂川。攻岩成。左通于青龍寺。明日。自以五萬騎繼之。左通望見大懼。以城降。乃以左通爲先導。攻三好政康。于芥川。篠原長房于越水。二城皆潰。乃奉義昭於越水。而自入芥川。十月。自攻池田勝政。善拒。我兵縱火奮戰。奪關而入。勝政終降。獻質子五人。乃宥之。加賜二千貫。高槻茨木諸城。聞之皆降。三好康長等棄河內。走歸阿波。信長告成事於義昭。於是使信長自擇邑。信長辭。不取。請分之幕府功臣。

自ら五萬騎を以て之に繼ぐ。左通、望見して大に懼れて、城を以て降る。乃ち左通を以て先導と爲して、三好政康を芥川に、篠原長房を越水に攻む。二城皆潰ゆ。乃ち義昭を越水に奉じて、自ら芥川に入る。十月、自ら池田勝政を池田に攻む。勝政善く拒ぐ。我が兵、火を縱ちて奮戦し、關を奪ひて入る。勝政終に降る。質子五人を獻す。乃ち之を宥して、二千貫の邑を加賜す。高槻・茨木の諸城、之を聞きて皆降る。三好康長等、河内を棄てて走り、阿波に歸る。信長、成事を義昭に告ぐ。是に於て、信長をして自ら邑を擇ばしむ。信長、辭して敢て取らず。請ひて之を幕府の功臣に分つ。

● 山城國に在り ● 二城共に攝津國に在り ● 平定 ● 一本取の字無し

先是伊丹親興。島山高政。三好義繼。松永久秀。數與三黨戰。先送三黨于美濃。以故分河內于高政。義繼分攝津于親興。勝政及和田惟政。合久秀。居志賀城。以定大和。攻筒井順慶。順慶降。信長自嚴吏于界浦。大津。乃歸京師。陣清水寺。當是時。京畿將士執謁信長。軍門如市。朝廷論信長功。叙從四位下。任左兵衛督。信長辭曰。臣以天之道。得克強賊。敢攘以爲功。以辱顯爵。乃叙從五位下。任彈正忠。

是より先、伊丹親興・島山高政・三好義繼・松永久秀、數々三黨と戦ひて、先づ款を美濃に送る。故を以て、河内を高政・義繼に分ち、攝津を親興・勝政及び和田惟政に分ち、久秀をして志賀城に居らしめ、以て大和を定め、筒井順慶を攻めしむ。順慶降る。信長自ら吏を界浦・大津に置き、乃ち京師に歸りて、清水寺に陣す。是の時に當りて、京畿の將士、謁を信長に執りて、軍門市の如し。朝廷、信長の功を論じて、從四位下に叙し、左兵衛督に任ず。信長、辭して曰く、臣、天の道を以て、強賊に克つを得たり。敢て攘みて以て功と爲して、以て顯爵を辱しめんやと。乃ち從五位下に叙し、彈正忠に任ず。

● 大和國に在り ● 陣營の門前は多數の人にて市の如し ● 天理自然の道

義昭私以信長爲管領。賜號副將軍。皆辭不受。義昭賀成事。欲張散樂十三曲于其第。信長諫曰。方今凶賊纒服。四方未平。此非優游之秋也。且諸軍士多思歸者。宜如式而止也。乃省爲五曲。即日釋兵。撤畿内關寨。以便行旅。遠近悅服。義昭病。信長有功無賞也。爲書褒之。呼信長曰父。信長乃歸岐阜。

十二年正月。三黨與齋龍龍興等圍義

義昭、私に信長を以て管領と爲し、號を副將軍と賜ふ。皆辭して受けず。義昭、成事を賀して、散樂十三曲を其第に張らんと欲す。信長諫めて曰く、方今、凶賊纒かに服するも、四方未だ平がす。此れ優游の秋に非ざるなり。且つ諸軍士、歸るを思ふ者多し。宜しく式の如くにして止むべしと。乃ち省きて五曲と爲す。即日、兵を釋き、畿内の關寨を撤して、以て行旅を便にす。遠近、悅服す。義昭、信長の功有りて賞無きを病ふ。書を爲りて之を褒め、信長を呼びて父と曰ふ。信長乃ち岐阜に歸る。

● 散樂 ● のどかに遊ぶ時にあらず ● かたばかりしておく ● 關所とりての廢し旅行に便利ならしむ

十二年正月、三黨、齋藤龍興等と、義昭を本國寺に圍む。信長、警を聞き、單騎赴き援ふ。至れば則ち已に平ぐ。諸國の兵後れ至る者五萬なり。信長、初め

昭于本國寺。信長聞警。單騎赴援。至則已平。諸國兵後至者五萬。信長初令畿内豪戶納金于足利氏。獨

畿内の豪戶に令して、金を足利氏に納れしむ。獨り界浦、命を奉ぜず。又三黨を資く。信長、界浦を屠らんと宣言す。浦人號哭して哀を乞ふ。乃ち贖金二萬貫を上らしめて、二條武衛陣の故址に就きて、幕府を拓修す。四月成る。義昭をして居らしめて、以て寇賊に備ふ。

● 富家 ● 攻めんと官屬らす ● 代價金 ● 幕府

界浦不奉命。又資三黨。信長宣言。屠界浦。浦人號哭乞哀。乃使上贖金二萬貫。就二條武衛陣故址。拓修幕府。四月成。使義昭居焉。以備寇賊。

於是信長召村井貞勝。島田秀滿。僧日乘等。諭之曰。應仁以來。天下大亂。王室衰微。宮闕廢。凡居王土。

是に於て、信長、村井貞勝・島田秀滿・僧日乘等を召して、之を諭して曰く、應仁以來、天下、大に亂れて、王室衰微し、宮闕墜廢す。凡そ王土に居て、王臣たる者、誰か嗟悼せざらん。信長、夙に修舉の志有るも、兵亂控德にして延きて此に至る。今や畿内粗定る。當に禁内を修めて以て帝座を安んずべし。然りと雖も、戦後の興役は、急に逼るべからず。恐らくは民情を擾さん。宜しく漸を以て之を

爲王臣者誰不嗟悼信長風有修舉之志兵亂惶惶延而至此今畿内粗定宮下修禁内以安帝座雖亂後興役不可急逼恐擾民情宜以漸成之乃留木下秀吉守京師而歸途略近畿諸國

成すべしと。乃ち木下秀吉を留めて京師を守らせて歸る。遂に近畿の諸國を略す。

● 懼れさびれる ● 嘆きいたむ ● 宮闈を修め築く ● いまがはし ● 役一本に復とあり、普請を起すこと

七月。遣兵。以伊丹親興池田勝政爲先鋒。略但馬。攻山名氏。八月。自將兵五萬。略伊勢。攻北畠具教于大河内。旬餘。具教將柘植某

七月、兵を遣して、伊丹親興・池田勝政を以て先鋒と爲して、但馬を略し、山名氏を攻む。八月、自ら兵五萬に將として、伊勢を略し、北畠具教を大河内に攻む。旬餘にして、具教の將柘植某、款を信長に送りて、具教を殺して、以て我が兵を啓く。信長、柘植を縛して、之を數めて曰く、汝、人臣と爲りて、其君を弑して、以て敵に降る。容すべからずと、乃ち斬りて以て徇ふ。次子信雄を以て、北畠氏の後と爲して、大河内に居らしめ、十萬石を食ましむ。三子信孝を、神戸氏の後と爲

送款信長。殺具教。以啓我兵。信長縛柘植。數之曰。汝爲人臣。弑其君。以降敵。不可容也。乃斬以徇。以次子信雄爲北畠氏後。居大河内。食十萬石。三子信孝爲神戸氏後。居神戸城。弟信包。居上野城。各食五萬石。信雄幼字茶筌。信孝幼字三七。皆庶出也。十一月。信長徑入京師。戒皇宮工事。是歲。置赤黒母衣各十騎。以將士子弟材武者充之。

して、神戸城に居らしめ、弟信包を、上野城に居らしめて、各々五萬石を食ましむ。信雄、幼字は茶筌、信孝、幼字は三七、皆庶出なり。十一月、信長、徑に京師に入りて、皇宮の工事を戒む。是の歳、赤黒母衣各々十騎を置き、將士の子弟の材武の者を以て之に充つ。

● 後嗣として ● 妾腹の子 ● 普請の準備をなましむ

元龜元年。二月。入京師。四月。張散樂于將軍新第。大會德川氏以下諸將領。戰

元龜元年二月、京師に入る。四月、散樂を將軍の新第に張り、大に徳川氏以下の諸將領を會す。義昭爲に奏して、信長の官爵を進めんと請ふ。信長固辭す。朝倉義景命を拒むを以て、自ら往きて之を討ち、敦賀に至りて、手筒城を攻む。一晝夜にして拔きて之を屠る。進みて金崎を攻めて、守將朝倉景恆を降して、以て先

昭爲奏。請進信長官爵。信長固辭。以朝倉義景拒命。自往討之。至敦賀。攻二手筒城。一晝夜拔而屠之。進攻金崎。降二守將朝倉景恆。以爲先導。欲遂定國內。會淺井長政招二六角氏餘黨。與二義景約夾擊二信長。長政爲二小谷城主。信長妹婿也。信長得報。不信。警聞益至。信

導と爲し、遂に國內を定めんと欲す。會々淺井長政、六角氏の餘黨を招きて、義景と約して、夾みて信長を撃たんとす。長政は小谷城主たり。信長の妹婿なり。信長、報を得て信ぜず。警聞益々至る。信長乃ち若狭より京師に入らんと欲す。義景の追躡を恐る。木下秀吉、自ら留り備へんと請ふ。信長、壯なりとして之を許す。諸將をして人ごとに三四十騎を出して、以て秀吉を助けしめ、而して兵を引きて西す。徳川公殿たり。朽木谷に至る。朽木元綱、甲を被り兵を率ゐて迎ふ。信長、其の異心有るを疑ふ。松永久秀曰く。臣、請ふ往きて之を質さん。即し他故有らば、之を刃して死せんと。乃ち馳せ往きて元綱を諭す。元綱、甲を脱ぎ兵を撤して、以て信長を饗し、送りて京師に至る。秀吉も亦至る。信長乃ち義昭の爲に、京畿將士の質を徵し、近江の地を割き、森可成をして志賀・宇佐山を守り、柴田勝家をして長光寺を守り、佐久間信盛をして長原を守り、木下秀吉をして長濱を守らしめて、美濃に歸る。敵兵、鯉江、市原に要すと聞きて、乃ち蒲生賢秀

長乃欲下自若狭入京師。恐二義景追躡。木下秀吉自請二留備。信長壯而許之。令二諸將人出三四十騎。以助中秀吉。而引兵西。徳川公爲殿。至朽木谷。朽木元綱被甲率兵而迎。信長疑三其有異心。松永久秀曰。臣請往質之。即有二他故刃之而死。乃馳往諭二元綱。元綱脱甲撤兵。以饗二信長。送至京師。秀吉亦至。信長乃爲二義昭。徵二京畿將士之質。割二近江地。令二森可成守二志賀。宇佐山。柴田勝家守二長光寺。佐久間信盛守二長原。木下秀吉守二長濱。而歸二美濃。聞二敵兵要二于二鯉江。市原。乃以二蒲生賢秀等爲二鄉導。由二千種路歸。六角義賢使二善三銃者杉谷善住伏二山中。狙二信長。過二連發二二丸。中二其衣袖。從兵愕。欲索之。信長不許。金森長近密與二信長一易二衣。乘二其輿而歸。終達二岐阜。

等を以て、郷導と爲して、千種路より歸る。六角義賢、善く銃する者杉谷善住をして、山中に伏せしめて、信長の過ぐるを狙ひて、連ねて二丸を發し、其衣の袖に中つ。從兵愕きて、之を索めんと欲す。信長許さず。金森長近、密かに信長と衣を易へ、其輿に乗りて歸り、終に岐阜に達す。

●新しき第宅 ●被虜國に在り ●迎かける ●近江國に在り ●謀叛の志有らば

六月。六角義賢糾合土寇。出野洲川。勝

六月、六角義賢、土寇を糾合して、野洲川に出づ。勝家・信盛、邀へ撃ちて之を破る。各々三萬貫を加賜せらる。淺井長政・朝倉義景、比長・刈安に壘して、近江

家信盛遊擊破之。加賜各三萬貫。淺井長政。朝倉義景。壘于比長。刈安。命近江驍將堀某。樋口某守釜川。城。信長欲誘降之。美濃人竹中重治。爲信長說。二將曰。子守城者。欲何爲。曰。欲立功。曰。立功以爲河人乎。曰。爲淺井朝倉氏。曰。織田君爲天子將軍。起義兵。而二

の驍將堀某・樋口某をして、釜川城を守らしむ。信長、之を誘降せんと欲す。美濃の人竹中重治、信長の爲に二將を説きて曰く、子の城を守るは、何をか爲さんと欲すと。曰く、功を立てんと欲すと。曰く、功を立てて以て何人の爲にするかと。曰く、淺井・朝倉氏の爲にすと。曰く、織田君、天子・將軍の爲に義兵を起す。而るに二氏助けずして、其危きに乘じて之を圖らんと欲す。是れ天下の切齒する所なり。而して子は之が爲に功を立てんとす。士たる者は固より此の如きかと。二將乃ち重治に因りて降り、各々質子を獻す。信長以て先導と爲し、自ら將として之に繼ぐ。諸壘皆解きて走る。乃ち長政を小谷城に攻む。城甚だ險なり。森可成・坂井政尙等、城兵と雲雀山に戦ひて、之を破る。

● 地方の叛民 ● たゞしあはす ● はざりして遺棄とする所 ● 士たるものはかくあるべきものか心得違なるべし

二氏不助焉、欲乘其危圖之。是天下所切齒。而子爲之立功。爲士者固如此

手。二將乃因重治降。各獻質子。信長以爲先導。自將繼之。諸壘皆解走。乃攻長政于小谷城。城甚險。森可成。坂井政尙等。與城兵戰于雲雀山。破之。

信長引諸軍。上虎姫山。議攻城策。佐久間信盛進曰。拔之不難。恐損我兵。主君以身任之。天下何必乎。此信長乃焚城四面。而還。令佐成政。梁田出羽中條將監爲殿。柴田勝家曰。此輩兵不盈千。盍命臣若信盛。信長曰。否。大

信長、諸軍を引ききて、虎姫山に上りて、城を攻むるの策を議す。佐久間信盛進みて曰く、之を抜くこと難からず。恐らくは我が兵を損せん。主君、身を以て天下に任す。何ぞ此に必せんと。信長、乃ち城の四面を焚きて還る。佐佐成政・梁田出羽・中條將監をして殿たらしむ。柴田勝家曰く、此輩、兵千に盈たす。盍ぞ臣若しくは信盛に命ぜざると。信長曰く、否、大兵險地に敗れば、復た收むべからず。故に此三人に命ず。且つ吾れ自ら留りて之を號令せん。卿等先づ去れと。乃ち自ら近臣二百騎を引ききて、返りて三人を助く。三人、之を辭し、遂に殿して退く。城兵、尾撃す。三人且つ戦ひ且つ卻き、遂に軍を全くして歸る。遂に横山城を攻む。城將、急を長政に告ぐ。長政、援を義景に乞ふ。義景、族景健をして先往かしめ、兵二萬餘騎を合せて、大寄山に軍す。我が兵之を望みて、

兵敗於險地。不可復收。故命此三人。且吾自留。號令之。卿等先去。乃自引近臣二百騎。返助三人。三人辭之。迭殿而退。城兵尾擊。三人且戰且卻。遂全軍而歸。遂攻橫山城。城將告急于長政。長政乞援於義景。義景使族景健先往。合兵二萬餘騎。軍于大寄山。我兵望之。攻城益急。長政景健曰。吾待朝倉公而戰。恐城不守也。宜急救之。今信長陣龍鼻。距此五十町。直馳赴之。人馬皆疲。吾且日移陣于三田。乘曉襲其軍。彼必驚擾。莫不收矣。淺井半助進曰。臣嘗遊美濃。爲稻葉氏客。視信長將略。非驚擾者。公計恐不中耳。遠藤某奮曰。彼何足畏。公第進戰。吾雜敵

城を攻むること益々急なり。長政・景健、議して曰く、吾れ朝倉公を待ちて戦はば、恐らくは城、守られざらん。宜しく急に之を救ふべし。今、信長、龍鼻に陣す。此を距ること五十町なり。直に馳せて之に赴かば、人馬皆疲れん。吾れ且日移りて三田に陣し、曉に乗じて其中軍を襲はば、彼れ必ず驚擾して、敗れざる莫けん。淺井半助進みて曰く、臣嘗て美濃に遊びて、稻葉氏の客と爲り、信長の將略を視しに、驚擾する者にあらざるなり。公の計、中らざる恐るゝのみと。遠藤某奮ひて曰く、彼れ何ぞ畏るゝに足らん。公第進み戦へ。吾れ敵兵に雜りて、信長と決せんのみと。議乃ち決す。

何ぞ此處のみに限らん 再び取返しつかず 近江國に在り 驚き亂る

兵。與信長決耳。議乃決。

信長夜望大寄山。顧呼宿直諸將曰。柴田木下佐久間。在乎。皆答曰。在。信長乃召而前之。指示曰。北軍炬火。徹宵。是將乘曉襲我也。乃下令。勒軍爲十三隊。坂井政尚。池田信輝等。爲先鋒。以當長政。德川公獨將其兵。當朝倉氏。稻葉通朝

長長、夜、大寄山を望みて、顧みて宿直の諸將を呼びて曰く、柴田・木下・佐久間在るか。皆答へて曰く、在りと。信長乃ち召して之を前ましめて、指示して曰く、北軍、炬火、宵を徹す。是れ將に曉に乗じて我を襲はんとするなりと。乃ち令を下し、軍を勒して十三隊と爲す。坂井政尚・池田信輝等、先鋒と爲りて、以て長政に當り、徳川公獨り其兵に將として、朝倉氏に當り、稻葉通朝之を助く。乃ち丹羽長秀を留めて城兵を備へて、兵を引きて西に向ふ。天明、北軍に姉川に遇ふ。北軍、大に驚く。政尚・信輝進み戦ふ。利あらず。信長、氏家・經國・伊賀經俊をして、其横を撃たしむ。通朝、顧みて之を助けて、大に長政を破る。而して景健も亦大に敗走す。其驍將遠藤・眞柄等十餘人を獲たり。斬首三千餘級なり。横山以下の諸城、皆解きて走る。秀吉、勝に乗じて小谷を取らんと欲す。信長許さず。母衣騎をして、令を傳へて軍を收めしむ。親ら戦功の將士を論賞す。

助之。乃留丹羽長秀備城兵。而引兵西向天明。遇北軍于姊川。北軍大驚。政尙信輝進戰。不利。信長使氏家經國伊賀經後擊其橫。通朝顯而助之。大破長政。而景健亦大敗走。獲其驍將遠藤真柄等十餘人。斬首三千餘級。橫山以下諸城皆解走。秀吉欲乘勝取小谷。信長不許。使母衣騎傳令收軍。親論賞戰功將士。遂攻磯野員止于深山。置戍而西。獻捷京師。遂歸岐阜。

遂に磯野員正を深山に攻めて、戍を置きて西し、捷を京師に獻じて、遂に岐阜に歸る。

● たいまつ ● 夜明

八月。三好三黨與齋藤龍興。糾兵一萬。據野田福島。信長自將討之。九月。陣天滿林。義昭陣中島。埋濠薄。

八月、三好之三黨、齋藤龍興と、兵一萬を糾して、野田・福島に據る。信長、自ら將として之を討つ。九月、天滿林に陣す。義昭、中島に陣す。濠を埋めて陣に薄る。而して一向僧の賊、大坂を以て賊に應ず。信長曰く、彼長袖者何をか能く爲さんと。佐佐成政を遣して赴き拒ぎ、而して自ら之を繼ぐ。成政等矢石を冒して進む。將領多く死す。我が兵潰走し、賊軍、之に乗ず。前田利家槍を揮

陣。而一向僧賊以大坂應。賊信長曰。彼長袖者。何能爲。遣佐佐成政。赴拒。而自繼之。成政等冒矢石進。將領多死。我兵潰走。賊軍乘之。前田利家揮槍大呼。手殲數十人。賊辟易而去。利家幼爲信長近士。作旨被逐。私從軍。先登獲首級者數。信長乃復之。擢爲尾張荒子城主。至是力戰。以全信長軍。信長軍方困於三城間。淺井長政朝倉義景時之也。合兵三萬軍。比叡雷將徒坂本。宇佐山城將森可成出拒。死之。信長弟信治及尾藤某。道家某。皆死。北軍遂攻宇佐山。留後武藤等能拒。北軍乃過大津。縱火醜山科。

ひて大に呼び、手づから數十人を殲す。賊辟易して去る。利家、幼より信長の近士と爲り、旨に忤ひて逐はる。私かに軍に従ひて、先登して首級を獲ると數なり。信長乃ち之を復し、擢んで尾張の荒子城主と爲す。是に至りて、力戦して、以て信長の軍を全くせり。信長の軍、方に三城の間に因しむ。淺井長政・朝倉義景之を時とするや、兵三萬を合せて、比叡雷に軍して、將に坂本を焚かんとす。宇佐山の城將森可成、出でて拒ぎて、之に死す。信長の弟信治及び尾藤某、道家某皆死す。北軍遂に宇佐山を攻む。留後武藤等能く拒ぐ。北軍乃ち大津を過ぎ、火を醜山科に縱つ。

● 攝津國に在り ● 僧侶 ● 矢と射の石と ● 信長の苦戦を能く體會なりと見るや

信長聞警曰。吾藉得拔三城。使奴輩蹂躪京師。則我之恥也。乃令攝津河内諸將備三城。而還救之。三城兵大起。尾之。奪舟於江口。渡諸軍患之。信長自視于岸曰。水淺。可渡也。乃亂流皆濟。整軍徐退。敵不敢逼。遂遣京師。且日向北軍。北軍驚上叡山陣。信長陣志賀字佐山。分兵攻叡山。每夜襲擊。而使三人說其僧徒曰。汝等能捨彼面助我。

信長、警を聞きて曰く、吾れ藉に三城を抜くを得るも、奴輩をして京師を蹂躪せしめば、則ち我の恥なりと。乃ち攝津・河内の諸將をして、三城に備へしめて、還りて之を救ふ。三城の兵、大に起りて、之に尾し、舟を江口の渡に奪ふ。諸軍、之を患ふ。信長自ら岸より視て曰く、水淺し、渡るべしと。乃ち流を亂して皆濟り、軍を整へて徐に退く。敵敢て逼らず。遂に京師に達す。且日北軍に向ふ。北軍驚きて、叡山に上りて陣す。信長、志賀・字佐山に陣す。兵を分ちて叡山を攻め、毎夜襲撃す。而して人をして其僧徒に説かしめて曰く、汝等能く彼を捨て我を助けば、則ち他日、汝の寺封、故の如くならしめん。否らずば則ち中立して倚らず、助くる所有る莫れ。二者聽かすんば、他日必ず火を縦ちて山を藉にし、僧徒を鑿殺して、一人を釋さじと。僧徒聽かず。

● 叡山、一本峯に作る ● 寺領 ● 赤はげ ● 皆殺にす

則他日使汝寺封如故。否則中立不備。莫有所助。二者不聽。他日必縱火。藉山。鑿殺僧徒。不釋一人。僧徒弗聽。

十月。信長遣菅谷長頼佐成政。言於北軍曰。吾與公等相持。曠日。若士卒勞倦。何請一戰。以決勝敗。長政等不答。六角義賢糾近江土兵。將夾攻信長。木下秀吉自横山。丹羽長秀自澤山。來援。行破土兵。至於志人。深入至此。自送死耳。請爾擊之。莫使一騎還。信長大喜。長政等請和。不許。六角義賢來降。

十月、信長、菅谷長頼佐成政を遣して、北軍に言はしめて曰く、吾れ公等と相持して日を曠しくす。士卒の勞倦するを若何せん。請ふ、一戦して以て勝敗を決せん。と。長政等答へず。六角義賢、近江の土兵を糾して、將に夾みて信長を攻めんとす。木下秀吉は横山より、丹羽長秀は澤山より、來り援ひて、行々土兵を破りて、志賀に至る。信長樓に登りて之を望みて、驚きて以て義賢至ると爲す。至れば則ち秀吉・長秀なり。二人首級を以て請して曰く、北人深く入りて此に至る。自ら死を送るのみ。請ふ、之を彌撃して、一騎をして還らしむる莫けん。信長大に喜ぶ。長政等和を請ふ。許さず。六角義賢來り降る。

● 對陣して日を空しく過す ● 其地の兵 ● かりだして撃つ

十一月。堅田人猪飼甚介等。弼信長。請得一將。坂井政尚。自請而往。北軍來爭。政尚力戰死之。會大雪。北軍慮歸路梗。數請和。弗許。乃請之。義昭。義昭自來。信長贊言。之。信長乃聽之。各解兵歸國。

二年。二月。磯野秀昌。以澤山。降長秀。五月。淺井長政。以二萬騎。攻箕浦。秀吉赴援。擊卻之。先是一向賊起。於長島。攻信長弟信興于二

十一月、堅田の人猪飼甚介等、信長に屬して、一將を得んと請ふ。坂井政尚、自ら請ひて往く。北軍來り爭ふ。政尚力戰して之に死す。會大に雪ふる。北軍、歸路の梗るを慮りて、數々和を請ふ。許さず、乃ち之を義昭に請ふ。義昭自ら信長の營に來りて之を言ふ。信長乃ち之を聽し、各々兵を解きて國に歸る。

● 近江國に在り ● 陣を引拂ひて國に歸る

二年二月、磯野秀昌、澤山を以て長秀に降る。五月、淺井長政、二萬騎を以て箕浦を攻む。秀吉赴き援ひて、擊ちて之を卻く。是より先、一向の賊、長島に起りて、信長の弟信興を小木江に攻めて之を殺す。五月、信長、長島に入り、火を縱ちて退く。賊風雨に乗じ、險に迫りて要撃す。氏家・經國、之に死す。八月、柴田勝家を以て先鋒と爲し、近江に入り、小谷・山本の間に出でて、火を縱ちて退く。兩城の兵八千出でて之を躡す。勝家返り戦ふこと三次なり。敵復た出でず。

信長再び發して、攻めて新村を抜き、小川・常樂寺を下す。

● 伊勢國に在り ● 同上 ● 三回

小木江。殺之。五月。信長入長島。縱火而退。賊乘風雨。迫險要。擊氏家。經國死之。八月。以柴田勝家爲先鋒。入近江。出小谷。山本之間。縱火而退。兩城兵八千出躡之。勝家返戰三次。敵不復出。信長再發。攻拔新村。下小川常樂寺。

九月。陣勢多。命諸將。縱火焚叡山。諸將皆失色。佐久間信盛等。諫曰。自桓武帝創建此寺。幾千年于此。爲王城之鎮。莫取或犯者。今而滅之。其如之何。信長曰。吾除國賊耳。

九月、勢多に陣し、諸將に命じて、火を縱ちて叡山を焚かしむ。諸將皆色を失ふ。佐久間信盛等諫めて曰く、桓武帝、此寺を創建せしより、此に幾千年、王城の鎮たり。敢て或は犯す者なし。今にして之を滅す、其れ之を如何と。信長曰く、吾れ國賊を除かんのみ。汝が輩、何ぞ我を沮まんや。吾れ四海を定めて、王道の衰へたるを興さんと欲す。筋骨を勞し、軀命を輕んじ、未だ嘗て一日も安居せず。去歲、攝津を略し、兩城將に陥らんとす。長政・義景兵を擧げて我が後を窺ふ。吾れ兩城を捨てて還りしは、之を山上に棲ましめて、將に之を殲さんとせしなり。人を遣して僧徒を諭し、禍福を陳說せしめしに、彼れ竟に服せず。務

汝輩何沮我邪。吾欲定四海。興王道之衰。勞筋骨。輕軀命。未嘗一日安居。去歲略攝津。兩城將陷。長政戰。景舉兵窺我後。吾舍兩城而還。樓之山上。將殲之也。遣人諭僧徒。陳說禍福。而彼竟不服。務右凶徒。以梗王師。此非國賊乎。今而不行。芟除。乃貽患於天下也。且聞彼犯其律。茹輩著妾。東關誦呪。安在三其鎮。土城也。圍而燔之。勿使有遺

めて凶徒を右けて、以て王師を梗ぐ。此れ國賊に非ずや。今にして芟除を行はずんば、乃ち患を天下に貽さん。且つ聞く、彼れ其律を犯して、輩を茹ひ妾を蓄へ、誦呪を東關す。安んぞ其れ王城を鎮むるに在らんや。圍みて之を燔きて、有らしむる勿れと。諸將乃ち服す。明日叡山を圍みて、中堂及び二十一社を燔き、僧徒婦女老少と無く皆之を斬る。志賀郡を以て、明智光秀に賜ひ、坂下に城きて之に居らしめて、岐阜に歸る。丹羽長秀をして高宮某を澤山に誅せしむ。其の大坂に通ずるを以てなり。是の歳、皇宮成る。信長、金を京畿の豪戸に貸し、毎月、息を縣官に納れしめて、以て供御に充つ。且つ爲に廷臣の家計を計畫し、廢を興し絶を繼ぐ。

- 止むることを得んや
- 筋骨をつからしめ命をもをしまず
- 惡者
- かりのぞく
- 律
- 經文の讀誦をば打撻つ
- 錢りのやから
- 富貴
- 利息
- 明証

類。諸將乃服。明日。圍叡山。燔中堂及二十一社。僧徒婦女。無老少。皆斬之。以志賀郡。賜明智光秀。城以下。使居之。歸岐阜。令丹羽長秀。誅高宮某。于澤山。以三其通大坂也。是歲。皇宮成。信長貸金于京畿豪戶。令每月納息。縣官。以充供御。且爲計畫。廷臣家計。興廢繼絶。

三年三月、火を小谷・山本の城下に縱ち、徒りて志賀に軍し、木戸・田中の二城を攻めて、成を置く。遂に京師に入りて、妙覺寺に陣す。義昭、信長をして、第一を武者小路に置かしむ。固く辭す。許さず。乃ち村井貞勝をして役を董さしむ。日ならずして成る。細川昭元・岩成左通來り降る。大坂の僧徒も亦物を贈りて款を納る。三好義繼・松永久秀、私かに畠山氏と闘ひて、城を交野に築く。信長素より二人を疾む。事に因りて之を誅せんと欲す。是に於て、兵を遣して交野を攻む。城兵、夜遁る。久秀竟に降る。

- 普請を監督せしむ
- 河内國に在り

來降。大坂僧徒亦贈物納款焉。三好義繼松永久秀。私與畠山氏闘。築城交野。信長素疾二人。欲因事誅之。於是遣兵攻交野。城兵夜遁。久秀竟降。

七月。信長幼子信忠。幼字奇妙。始被鐵。從信長攻淺井。長政于小谷。令木下秀吉別攻山本。開朝倉義景來援。疊於虎姫山。待之。義景以二萬騎至。信長曰。及其未陣。襲之。莫使安營也。將士乘夜更襲之。北人患之。多來降者。會義昭使來諭弭兵。乃令秀吉守虎姫

七月、信長の長子信忠、幼字は奇妙といふ。始めて鐵を被り、信長に従ひて、淺井長政を小谷に攻む。木下秀吉をして別に山本を攻めしむ。朝倉義景來り援ふと聞きて、虎姫山に壘して之を待つ。義景二萬騎を以て至る。信長曰く、其の未だ陣せざるに及びて之を襲ひ、營に安んぜしむる莫れと。將士、夜に乗じて更、之を襲ふ。北人之を患へて來り降る者多し。會義昭の使來り諭して兵を弭めしむ。乃ち秀吉をして虎姫山を守らせ、宮部某をして宮部の壘を守らしめ、山を鑿ち道を開きて、以て往來に便にす。是の時に當りて、長政・義景、越後の國主長尾謙信と好を通じて、以て信長に抗す。而して武田信玄も亦甲斐・信濃の兵を以て西に出づ。信長、佐久間信盛・平手汎秀を遣して、徳川氏を援ひ、信玄を東海に拒がしむ。利あらず。汎秀死す。義昭時に信長と惡し。是の時に乘じて之を圖らんと欲す。

● 未だ陣を敷かざる前に ● 行き來に便利にす ● はりあふ

山宮部某守宮部壘。鑿山開道。以便往來。當是時。長政義景與越後國主長尾謙信通好。以抗信長。而武田信玄亦以甲斐信濃兵四出。信長遣佐久間信盛平手汎秀援徳川氏。拒信玄於東海。不利。汎秀死。義昭時與信長惡。欲下乘是時圖之。

先是。信長病。義昭多失行。上書諫曰。幕下之入京師也。信長首請。朝參勿敢。或怠。幕下諾之。後乃遣焉。夫光源公怠於王事。天譴立至。信長竊爲幕下懼之。忠臣亡賞。而佞夫得官。以虐下民。下民何罪。罪人納金。即便宥之。僞

是より先、信長、義昭の失行多きを病へ、上書して諫めて曰く、幕下の京師に入るや、信長首として、朝參して敢て或は怠る勿れと請ふ。幕下之を諾して、後乃ち違ふ。夫れ光源公、王事に怠り、天譴立ちどころに至る。信長竊かに幕下の爲に之を懼る。忠臣賞亡く、而して佞夫官を得、以て下民を虐す。下民何の罪かある。罪人、金を納るれば、即便ち之を宥す。僞りて敵山の賦税と稱して、以て民財を掠め、或は陽に征課を責めて、陰かに之を鑄き、以て私恩を賈る。此れ皆幕下の爲すべき所に非ず。朝議、元龜の號を改めんと欲す。而して幕下に費用を愛しみて、從ふことを果さず。遠近惡御所の目有り。信長竊かに幕下の爲に之を羞づ。

● 不行跡 ● 義園をさす ● 義園 ● 天罰 ● 租税 ● 私恩をかく

稱二穀山賦稅。以掠民財。或陽責二征課。而陰蠲之。以買二私恩。此皆非二幕下所宜爲。朝議欲改二
元龜之號。而幕下特愛二費用。不果。從。遠近有二惡御所之目。信長竊爲二幕下羞之。

信長築二條城。以備二寇賊。而欲二舍徙二他。所。置二城內粟。以畜二金銀。諸國將士。多貴二金賤二粟。遺二其武備。以爲二遜。隱之計。皆傲二幕下之爲也。信長所納紀綱之僕。無二罪奪俸。來乞二哀者數。請而不二得。復。信長無三面目。以對二此輩。且聞下二教

信長、二條城を築きて、以て寇賊に備ふ。而して舎てて他所に徙らんと欲し、城内の粟を糶して、以て金銀を畜ふ。諸國の將士、多く金を貴び粟を賤し、其武備を遺れて、遜隱の計を爲す。皆幕下の爲に傲ふなり。信長納るる所の紀綱の僕、罪無くして俸を奪はれ、來りて哀を乞ふ者數なり。請ひて復するを得ず。信長、面目の以て此輩に對する無し。且つ聞く、教を諸國に下して、馬及び金を徵す。曩に白す、凡白の需索は、宜しく信長に囑すべし。信長將に立ちどころに之を辨せんとすと。今陰かに此教有り。信長惑ふ。信長、志、幕下と心を協せ力を戮せ、亂略を撥して、以て王政を興さんと欲す。豈に他有らんや。願はくは幕下、讒言を信するなく、以て終吉を保ち、佞を斥け忠を進め、先業を恢弘せよ。儒人の如きに至りては、最も宜しく之を親近して、以て古今の興衰を鑑みる

諸國二徵二馬及金。勢自。凡百需索。宜囑二信長。信長將二立辨之。今陰有二此教。信長惑焉。信長志欲二與二幕下二協心。戮力撥亂。略一以興王政。豈有他哉。願幕下勿信二讒言。以保二終吉。斥佞。進忠。恢弘。先業。一也。至如二個人。最宜親二近之。以鑑二古今興衰。信長生二長兵亂之間。嘗於二文學。自度處。事多違二故典。所以常懷二愧恥也。妄疏二所見。唯幕下留意焉。義昭弗納。遂相嫌隙。

べし。信長兵亂の間に生長して、文學に著く、自ら度るに、事を處する多くは故典に違はん。常に愧恥を懐く所以なり。妄りに所見を疏す。唯幕下、意を留めよと。義昭納れず。遂に相嫌隙す。

- のがれる ● 政治をとる臣 ● 此輩に合す類なし ● 凡ての費用 ● 最後のよきこと ● 大にしぬ
- 古例 ● 申上ぐ ● 不和となる

天正元年。義昭潛發使諭二信玄及謙信。約二夾攻二信長。又諭二安藝國主毛利輝元。

天正元年、義昭、潛かに使を發して、信玄及び謙信に諭し、夾みて信長を攻めんと約す。又安藝の國主毛利輝元に諭して、以て後據と爲す。信長、村井貞勝をして、和を義昭に請はしむ。義昭聽かず。二月、義昭自ら石山・堅田に城きて、山岡・磯貝・渡部等を以て、之を守らせ、兵食を徵發す。信長之を聞きて曰く、吾れ

以爲後據。信長使村井貞勝請和。義昭不聽。二月。義昭自城于石山。堅田以山岡磯貝渡部等守之。徵發兵食。信長聞之曰。吾終不得不用兵。遣柴田勝家。丹羽長秀。明智光秀。蜂屋賴高。渡勢多。招石山兵。降之。勝家乃留備京師。而長秀等攻堅田。拔之。三月。

終に兵を用ひざるを得ずと。柴田勝家・丹羽長秀・明智光秀・蜂屋賴高を遣して、勢多を渡り、石山の兵を招きて、之を降す。勝家乃ち留りて京師に備ふ。而して長秀等堅田を攻めて、之を拔く。三月、信長自ら將として大津に至る。細川藤孝、荒木村重、迎へ降る。乃ち進みて京師に入り、兵を觀して和を請ふ。義昭聽かず。乃ち二條城を圍む。義昭窮蹙し、人をして出でて言はしめて曰く、今より後、盡く卿の言ふ所を聽かんと。信長拜謝して、成を行ひて還る。守山に至り、諸將を遣して、六角義弼を鯉江に攻めしむ。丹羽長秀を召して、耳語して曰く、室町氏必ず再舉せん。再舉せば必ず勢多・矢橋を阻まん。汝、澤山の木を伐りて、兵艦十餘艘を造れと。乃ち岐阜に歸る。尾張の人梶川某といふ者あり。博奕を喜みて、衆の擴ぐる所と爲る。信長其勇を愛して、與ふるに善馬を以てす。曰く、緩急あらば此を以て功を樹てよと。梶川、感喜して退く。

- ① 後段 ② 取り立つ ③ 兵威を盛にして ④ せまりくるしむ ⑤ 和議をなして ⑥ 諸人に爪握せらるる ⑦ 急な場合あらば

信長自將至大津。細川藤孝荒木村重迎降。乃進入京師。觀兵請和。義昭弗聽。乃圍二條城。義昭窮蹙。使人出言曰。自今後盡聽卿所言。信長拜謝。行成而還。至守山。遣三諸將。攻三六角義弼于鯉江。召丹羽長秀。耳語曰。室町氏必再舉。再舉必阻勢多。矢橋。汝伐澤山木。造兵艦十餘艘。乃歸岐阜。尾張人有梶川某者。喜博奕。爲衆所環。信長愛其勇。與以善馬。曰。緩急以此樹功。梶川感喜而退。

七月。義昭再舉兵。留伊勢某。三淵某。與二廷臣二名。守二條。而自據二棋島。阻二宇治川。爲二固。報至。岐卓。信長即起。直馳至。澤山。乘其兵艦。一夜。濟朝妻波。且日。達坂下。直入京師。縱

七月、義昭再び兵を舉げ、伊勢某・三淵某と、廷臣二名とを留めて、二條を守らせ、而して自ら横島に據り、宇治川を阻みて固と爲す。報、岐阜に至る。信長即ち起ちて、直に馳せて澤山に至り、其兵艦に乗りて、夜、朝妻波を濟り、且日、坂下に達して、直に京師に入り、火を縱ちて呼譟す。烟焰、天に漲る。義昭の兵、勢多・矢橋に拒ぐ者、返顧して潰ゆ。京師の人、大に驚きて曰く、織田公堂に飛來せるかと。信長疾く二條を攻めて、之を陥れ、三淵を斬る。城兵皆降る。以て先鋒と爲して、横島に向ひ、自ら柳山に陣し、稻葉通朝・伊賀範俊等を遣して、二萬人に將として、平等院に渡り、佐久間信盛・下木秀吉等、五萬人に將と

火呼譟。烟烟漲天。義昭兵拒勢多矢橋者。返顧而潰。京師人大驚。曰。織田公豈飛來邪。信長疾攻二條。陷之。斬三淵。城兵皆降。以爲先鋒。向二槇島。自陣二柳山。遣稻葉通朝。伊賀範俊等。將二萬人。渡二平等院。佐久間信盛。木下秀吉等。將二五萬人。渡二五箇莊。於是梶川某騎信長所賜馬。喚出二河岸。大呼自名。亂流而渡。通朝麾兵從之。與信盛秀吉合擊奪柵。縱火而入。

● 山城國に在り ● 近江國に在り

信長在二柳山。左右忽二烟起。相謂曰。我軍方波矣。誰先登者。信長曰。必梶川也。梶島既破。義昭請降。信長令三信長柳山に在り。左右烟起るを望みて、相謂ひて曰く、我が軍方に渡れり。誰か先登する者ぞと。信長曰く、必ず梶川ならんと。槇島既に破る。義昭降を請ふ。信長、信盛・秀吉をして、之を處置せしむ。二人乃ち義昭を奉じて、若江に徙し、細川昭元をして槇島を守らしむ。通朝來り白して曰く、臣、梶川の先んずる所と爲り、意甚だ憾む。然れども其軍進、死を致さんことを恐る。故に之に繼

信盛秀吉處二置之。二人乃奉二義昭二徙于二若江。令二細川昭元守二槇島。通朝來白曰。臣爲二梶川所先。意甚憾焉。然恐二其軍進致二死也。故繼之。信長并二賞二人。於是織田氏遂代二足利氏。出二令京師。調二戶租。免二徭役。賑二窮民。旌二節孝。以二村井貞勝爲二所司代。收二兵而還。

● 近侍の人々 ● 梶川一騎にて討死せんことを氣遣ふ ● 夫役 ● 節婦孝子を旌表す

遂以二兵艦二攻二木戸田中二城。賜二之。明智光秀令二秀吉藤孝攻二淀城。斬二岩成左通。令二荒木村重攻二和川。惟村重素以二雄村重素以二雄

遂に兵艦を以て、攻めて木戸・田中の二城を抜きて、之を明智光秀に賜ふ。秀吉・藤孝をして、淀城を攻めしめて、岩成左通を斬らしむ。荒木村重をして、和川惟政を芥川城に攻めしむ。村重素より雄豪を以て聞ゆ。部兵皆驍なり。義昭の變に、首として信長に應じ、迎へて大津に謁す。面貌甚だ偉なり。會々饅頭を獻する者有り。信長佩刀を抜きて、饅頭を鋒に貫きて、以て村重に啗はしむ。村重進みて、口を開きて之を受く。信長笑ひて曰く、好男子、攝津十三郡は、汝が之を剪

豪一開。部兵皆
曉。義昭之變。
首應信長。迎
謁于大津。面
貌甚偉。會有
獻餽頭者。信
長拔佩刀。貫
饒頭于鋒。以
啗村重。村重
進。閉口受之。
信長笑曰。好
男子。攝津十
三郡。任汝剪
取之。於是命
攻惟政。榜賞
格曰。獲主將者予萬金。獲副將者千金。護士卒者百金。村重將中川清秀。熟視之。以墨勾
其首條。觀者無測其意。既而惟政曉出城。雜士卒。修守備。清秀伏濠側。跳出斬其首。信長
乃賞清秀以二萬金。以池田勝政。觀望不至。逐之高野。以和田池田氏。邑盡賜村重。

取するに任すと。是に於て、命じて惟政を攻めしむ。賞格を榜して曰く、主將を
獲る者は萬金を予へん。副將を獲る者は千金、士卒を獲る者は百金なりと。村重
の將中川清秀、之を熟視し、墨を以て其首條を勾す。觀る者、其意を測る無し。
既にして惟政曉に城を出でて、士卒に雜りて、守備を修む。清秀濠側に伏し、
跳り出でて其首を斬る。信長乃ち清秀を賞するに萬金を以てす。池田勝政。觀望
して至らざるを以て、之を高野に逐ふ、和田・池田氏の邑を以て、盡く村重に賜
ふ。

● 頭かたも甚だすぐる ● きり取る ● 褒美の等級 ● 次將 ● 墨にてかぎをかき ● 中川清秀の心
中を知らず ● ほりのかたはら ● 様子を見る

八月。歸岐阜。
居三日。淺井
氏將阿閉某
來降。信長復
發。下二月。瀨城。
軍于山田。淺
井氏兵守燒
尾。朝倉氏兵
守大嶽。與山
田相持。信長
遣勝家信盛。
陣于高月。絕
越前投路。朝
倉義景聞之。
以二萬騎來。
軍于田邊。信
長又遣稻葉
通朝。助勝家。
燒尾守將因
阿閉納款。以尋我兵。我兵遂圍大嶽。夜冒原雨。疾攻。守將乃降。信長令信忠守虎姫山。不

八月、岐阜に歸り、居ると三日にして、淺井氏の將阿閉某來り降る。信長復た
發して、月瀨城を下し、山田に軍す。淺井氏の兵、燒尾を守り、朝倉氏の兵大嶽
を守り、山田と相持す。信長、勝家・信盛を遣して、高月に陣し、越前の投路を
絶たしむ。朝倉義景之を聞きて、二萬騎を以て來り、田邊に軍す。信長又稻葉通
朝を遣して、勝家を助けしむ。燒尾の守將、阿閉に因りて款を納れて、我が兵を
導く。我が兵、遂に大嶽を圍み、夜、風雨を冒して疾く攻む。守將乃ち降る。信
長、信忠をして虎姫山を守り、不破光治をして大嶽を守らしめて、進みて丁野を
下す。使を高月に遣し、諸將を戒めて曰く、今夜、北軍必ず走らん。宜しく尾
撃して之を塵にすべしと。諸將皆信する莫し。且く應へて曰く、謹みて諾す
と。夜半、義景果して營を焚きて遁る。

● 援兵の來る道 ● 近江國に在り

阿閉納款。以尋我兵。我兵遂圍大嶽。夜冒原雨。疾攻。守將乃降。信長令信忠守虎姫山。不

破光治守中大嶽。而進下丁野。遣使高月。戒諸將曰。今夜北軍必走。宜尾擊。擊之。諸將皆莫信。且應曰。謹諾。夜半。義景果焚營而遁。

信長大呼。起曰。敵走矣。與左右五十騎。馳出。有先馳者。信長誰之。何之。答曰。利家。成政。其他十餘人。皆逃對。信長戲曰。吾欲先登。爲諸君所先。乃聯轡疾馳。及三敵于刀根山。斬其福禰二十三人。雜兵二千。金松某執甲首。以謁。跳而蹂血。信長勞之。手取芒鞋一兩。賜之曰。吾每臨戰。懸之。刀懸以備。開亡。今而有用矣。信長兩日下二十四城。留敦賀。三日。敦賀降。將買子。進軍龍門寺。

● 誰ぞと問ふ ● かぶと首即ち大將袿の首 ● わらぢ ● 刀のつか ● 今になりて役立つ

義景。一乘谷。乘谷。大野。勝家。通朝等。分兵搜索。平泉僧徒懼。請二鄉導。通朝貨。土人。得二義景所。在。誘。降。其。族。景鏡。景鏡。迫。義景。使。自。殺。信長。誅。二。黨。類。撫。降。附。爲。二。政。國中。使。入。齋。義景。首。梟。中。之。京師。以。降。將。前。波。長。俊。爲。二。越。前。假。守。明。智。光。秀。等。監。之。引。兵。還。二。虎。姫。山。淺。井。長。政。與。二。父。久。政。保。二。守。兩。城。信。長。遣。二。秀。吉。登。二。粒。羅。岡。絕。二。兩。城。之。間。使。二。久。政。長。政。自。

義景、一乘谷を棄てて、大野に匿る。勝家・通朝等、兵を分ちて搜索す。平泉の僧徒懼れて、郷導せんと請ふ。通朝、土人に貸して、義景の在る所を得、其族景鏡を誘ひ降す。景鏡、義景に迫りて自殺せしむ。信長、黨類を誅し、降附を撫して、政を國中に爲し、人をして義景の首を齎して、之を京師に梟せしむ。降將前波長俊を以て、越前の假守と爲し、明智光秀等、之を監す。兵を引きて虎姫山に還る。淺井長政、父久政と、兩城を保守す。信長、秀吉を遣して、粒羅岡に登り、兩城の間を絶ち、久政・長政をして自殺せしめ、其地を以て秀吉に賜ふ。九月、勝家を遣して、餘江を攻めて、六角義弼を降し、杉谷善住を獲て、之を地に生理し、竹鋸を以て其首を鋸る。十一月入朝す。佐久間信盛を遣して、攻めて三好義繼を殺す。是に於て、淺井・朝倉・六角・三好氏皆滅ぶ。

● 道案内 ● 金を與ふ ● 仲間 ● 近江國に在り

殺。以其地。賜秀吉。九月。遣勝家。攻鯉江。降六角義弼。獲杉谷善住。生理之地。以竹鋸。鋸其首。十一月。入朝。遣佐久間信盛。攻殺三好義繼。於是淺井朝倉六角三好氏皆滅。

卷十四

德川氏前記

織田氏下

天正二年正月。近畿將士。盡賀信長。于岐阜。信長賜酒。酒三行。謂衆曰。我有佳肴。請侑飲焉。令左右取一函。來置之。坐上衆。喝目焉。信長賜柴田勝家。而手開其蓋。則

天正二年正月元日、近畿の將士、盡く正を岐阜に賀す。信長之に酒を賜ふ。酒三行にして、衆に謂ひて曰く、我れ佳肴有り。請ふ飲を侑めんと。左右をして一函を取り來らしめて、之を坐上に置く。衆、目を屬す。信長、柴田勝家に賜して、手づから其蓋を開けば、則ち義景・長政の首なり。塗るに金粉を以てす。諸將皆笑ひて曰く、此好下物有り、何ぞ満酌を辭せん。信長曰く、吾れ京畿を經略して、二患の礙ふる所と爲ると數年なり。卿等、吾が爲に勞を積み苦を累ねて、以て誅斃を致すを得たりと。因りて各々刀劍を賜ひ、驢を極めて罷む。佐佐成政留りて白して曰く、臣、無似、諸將の後に從ひ、叨に洪恩を被りて報

義景長政首也。塗以金粉。諸將皆笑曰。有如此好下物。何辭滿酌也。信長曰。吾經略京畿。爲二年。患所礙數年矣。卿等爲吾積勞累苦。以得致誅。因各賜三刀劍。極耀而罷。佐佐成政留而白曰。臣無似。從諸將之後。叨被洪恩。不知所報。唯願君不自足焉。遂定四方也。信長大悅。握成政手。入室內。與談政治。侍史武井夕菴自傍贊之曰。不圖成政能爲此言。君莫忽焉。信長厚賜二人。

ゆる所を知らず。唯願はくは、君自ら足れりとせず、遂に四方を定めよと。信長大に悦び、成政の手を握りて室内に入り、與に政治を談す。侍史武井夕菴傍より之を贊して曰く、圖らざりき、成政能く此言を爲さんとは。君忽にするに事莫れと。信長、厚く二人に賜ふ。

● 新年 ● 三廻 ● 日をつく ● 上き酒の肴 ● 胡倉西景・淺井長政 ● 不肖 ● 天下を平定せよ

二月。甲斐兵侵東美濃。圍明地城。信長與信忠出拒之。城內有叛者。城陷。乃修

二月、甲斐の兵、東美濃を侵し、明地城を圍む。信長、信忠と、出でて之を拒ぐ。城內叛く者有りて、城陷る。乃ち高野・遠利二城を修め、河尻鎮吉、池田信輝をして之を守らしむ。時に武田信玄既に死し、長尾謙信猶ほ存す。信長、武田氏と絶ち、好を長尾氏に通じて、厚く之に贈る。三月、信長、入朝して、相國

寺に寓す。詔して、從三位に敘し、參議に任す。足利義政の故事を以て、奏して東大寺藏する所の名香を乞ひ、自ら多門城に至り、使を遣して香一寸八分を截らしめて、之を三分し、自ら其一を取り、其二を諸將に分賜す。四月、京師に還る。大坂の賊出でて之を要す。擊破して過ぐ。五月、岐阜に還る。

● 古例 ● 名高き關者持の香

高野遠利二城。令河尻鎮吉池田信輝守之。時武田信玄既死。長尾謙信猶存。信長與武田氏絶。通好於長尾氏。厚贈之。三月。信長入朝。寓于相國寺。詔敘從三位。任參議。以足利義政故事。奏乞東大寺所藏名香。自至多門城。遣使令截香一寸八分。而三分之。自取其一。分賜其二。於諸將。四月。還京師。大坂賊出要之。擊破而過。五月。還岐阜。

六月。武田勝頼出兵。遠江。圍高天神城。德川氏使信長請援。信長信忠將兵至荒

六月、武田勝頼兵を遠江に出して、高天神城を圍む。德川氏使をして援を請はしむ、信長・信忠兵に將として荒井に至る。城陷るに會ひ、還りて吉田に至る。德川公、來り謝して曰く、公の餘威を藉りて、以て國を保ちて此に至ることを得たりと。信長之を勞ひて曰く、卿、我が爲に東面を守りて、以て武田氏を拒

井。會二城。陷。還。至。吉田。德川。公來謝曰。藉。公餘威。得。以。保。國。至。此。信。長。勞。之。曰。卿。爲。我。守。東。而。以。拒。武。田。氏。使。吾。毋。東。顧。之。患。吾。得。以。速。定。三。京。畿。卿。之。功。也。乃。令。左。右。四。人。擔。三。革。囊。盛。以。黃。金。以。賜。之。曰。薄。以。酬。將。士。之。勞。乃。還。

ぎ、吾をして東顧の患なからしむ。吾れ以て速かに京畿を定むることを得たるは、卿の功なりと。乃ち左右四人をして三革囊を擔はしめ、盛るに黄金を以てして、以て之に賜ひて曰く、薄か以て將士の勞に酬ゆと。乃ち還る。

● 御蔭によつて ● 東方の心配なからしむ ● かは袋

七月。征。長。島。信。長。之。滅。淺。井。朝。倉。氏。遂。攻。長。島。屠。二。城。置。戍。而。還。遇。雨。賊。據。險。夾。射。林。新。三。郎。殿。戰。死。之。信。長。怒。曰。以。草。賊。故。多。亡。

七月、長島を征す。信長の淺井・朝倉氏を滅すや、遂に長島を攻めて、二城を屠り、戍を置きて還る。雨に遇ふ。賊、險に據りて夾み射る。林新三郎、殿戦して之に死す。信長怒りて曰く、草賊の故を以て、多く吾が良を亡ふ。吾れ必ず其巢窟を覆し、其醜類を殲して、以て死者を弔はんと。已にして長島・武田氏に應ず。信長之を覺りて、益々怒る。是に於て、信忠と、兵數萬に將として、三道より赴き討つ。信雄、瀧川一益・九鬼嘉隆と、舟師を以て之に會し、行々賊兵を破

吾良。吾必覆其巢窟。殲其醜類。以弔死者。已而長島應武田氏。信長覺之。益怒。於是與信忠。將兵數萬。三道赴討。信雄與瀧川一益。九鬼嘉隆。以舟師會之。行破賊兵而進。賊入保五城。八月。大島居城。賊夜乘風雨。過柴田勝家等。追擊。殲男女二千人。截其耳鼻。盛之一船。送致長島。篠橋城降。九月。長島賊出城乘船而去。我弓銃手豫伏堤側。擊斃之。餘衆可八百。突入我中軍。信長叔父信次。庶兄信廣。弟秀成。從弟信成。迎戰死之。賊奔大坂。遂燔殺三城男女二萬人。臭聞數里。乃以長島賜瀧川一益。食北伊勢五郡。

りて進む。賊入りて五城を保つ。八月、大島居城の賊、夜、風雨に乗じて遁る。柴田勝家等、追撃して、男女二千人を殲し、其耳鼻を截りて、之を一船に盛り、長島に送致す。篠橋城降る。九月、長島の賊、城を出でて船に乗りて去る。我が弓銃手、豫め堤側に伏して、撃ちて之を斃にす。餘衆八百ばかりあり、突きて我が中軍に入る。信長の叔父信次、庶兄信廣、弟秀成、從弟信成、迎へ戦ひて之に死す。賊、大坂に奔る。遂に三城の男女二萬人を燔き殺す。臭數里に聞ゆ。乃ち長島を以て瀧川一益に賜ひ、北伊勢五郡を食ましむ。

● 守備兵 ● こぬすびと ● よき大將 ● 草賊の住家を討ち破り賊を悉く殺し ● 送りとゞく

三年正月、命三年正月、吏四人に命じて、近畿諸國を巡り、橋道を修め、關征を蠲く。三月、

史四人。巡近畿諸國。修橋道。信長入朝。檢廷臣采田。其寶於人者。爲償還之。四月。信長聞大坂納長島。遣逃。又糾三好氏遺黨。以適應武田氏也。乃引兵南伐。下新湫高尾二城而還。

信長、入朝して、廷臣の采田を檢し、其の人に賣る者は、爲に償ひて之を還す。四月、信長、大坂が、長島の連逃を納れ、又三好氏の遺黨を糾合して、以て遙に武田氏に應ずと聞く。乃ち兵を引ききて南伐し、新湫・高尾の二城を下して還る。

● 四所の税 ● 領する地 ● 落武者 ● 伊勢國に在り

五月。武田勝頼大舉。出參河。圍長篠城。德川氏復使使請援。信長信忠以騎卒五萬赴之。戒其軍曰。人持代與。桓乃詣熱田祠。祈戒

五月、武田勝頼、大舉して參河に出で、長篠城を圍む。德川氏復た使をして援を請はしむ。信長・信忠、騎卒五萬を以て之に赴く。其軍を戒めて曰く、人ごとに代と桓と持てと。乃ち熱田祠に詣でて、戰勝を祈り、岡崎に至る。城將奥平信昌の使者に値ふ。曰く、城兵、日夜大旗の來るを望むと。信長、慰め勞り遣歸して、反間を縱ちて曰く、信長方に京畿・北國を患へ、來り援ふ能はずと。勝頼大に喜び、兵を分ちて城に備へ、壘を高巢山に築き、一將を留めて之

を守らしめて、自ら進むこと二十餘町、瀧澤川を濟りて陣す。

● 大將信長をいふ敬稱 ● 參河國に在り

勝。至岡崎。值城將奥平信昌使者。曰。城兵日夜望大旗來也。信長慰勞遣歸。而縱反間曰。信長方患京畿北國。不能來援。勝頼大喜。分兵備城。築壘于高巢山。留一將守之。而自進二十餘町。濟瀧澤川。而陣。

信長、設樂郷に至りて、將士をして戰を議せしむ。德川氏の部將酒井忠次進みて曰く、臣請ふ、今夜間道より敵背に逸りて出で、高巢の壘を襲ひ、火を敵營に縱ちて、以て其氣を瀆ひ、而して大軍之に乗ぜば、勝たざる莫からんと。信長伴り罵りて曰く、咄、田舎兒、何を知らんと。諸將皆退く。信長、人をして陰かに忠次を招かして曰く、汝が計用ふべし。吾れ其漏泄を恐る。故に伴りて之を叱するのみ。汝宜しく速かに發すべし。願ふに郷導なきを如何と。忠次曰く、臣即ち郷導を爲さん。請ふ、監吏を賜へと。信長乃ち金森長近等四人を遣して之に従はしむ。是の時に當りて、信長は極樂寺に陣し、信忠は新御堂に陣

信長至設樂郷。令將士議戰。德川氏部將酒井忠次進曰。臣請今夜間道遠出。敵背襲高巢壘。縱火敵營。以瀆其氣。而大軍乘之。莫不勝矣。信長伴屬曰。咄。田舎兒何知。諸

して之に従はしむ。是の時に當りて、信長は極樂寺に陣し、信忠は新御堂に陣

將皆退。信長使三人陰招忠次。曰。汝計可用。吾恐其漏泄。故伴叱之耳。汝宜速發。顧如毋鄉導。何。忠次曰。臣即爲鄉導。請賜監吏。信長乃遣金森長近等四人從之。當是時。信長陣極樂寺。信忠陣新御堂。勒兵爲二十五隊。德川公爲右先鋒。居前。佐久間信盛。木下秀吉。瀧川一益。爲左先鋒。少卻。信長下令。爲三櫛于軍前。用三櫛與三櫛。立成。乃抽諸擊銃手。得三千。以佐佐成政。前田利家等司之。曰。勝頼恃勇無謀。而其兵喜騎載。吾沮之以櫛。而銃斃之。彼即馳至。勿速發銃。及其已逼。每千迭發。

二十一日、味

し、兵を勒して十五隊と爲す。德川公、右先鋒と爲りて、前に居り、佐久間信盛、木下秀吉、瀧川一益、左先鋒と爲りて、少しく卻く。信長、令を下して、櫛を軍前に爲らしむ。櫛と三櫛とを用ひて、立ちどころに成る。乃ち諸隊の銃手を抽きて、三千を得たり。佐佐成政、前田利家等を以て之を司らしむ。曰く、勝頼、勇を恃みて、謀無し。而して其兵、騎戦を喜む。吾れ之を沮むに櫛を以てして、銃もて之を斃さん。彼れ即し馳せ至るも、遽かに銃を發する勿れ。其已に逼るに及びて、千毎に迭に發せよと。

● 參河國に在り ● まはりかちして ● もれる ● 軍計附 ● 百氣を自到して

二十一日、味爽高巢に火起る。敵軍顧みて擾動す。信長自ら司銃五人を率ゐて、

二十一日、味爽高巢に火起る。敵軍顧みて擾動す。信長自ら司銃五人を率ゐて、

爽。高巢火起。敵軍顧みて擾動。信長自ら率司銃五人。出櫛十町。發三巨銃于敵中。挑戰而退。敵四將更進。逼我右先鋒。轉犯左先鋒。銃丸亂發。敵兵沮靡。敵三將敢死。繼進。直犯左先鋒。破櫛一層。我銃乃齊發。右先鋒以槍橫擊之。成政馳白信長。曰。敵中軍旗幟搖動。信

櫛を出づること十町、巨銃を敵中に發ち、戦を挑みて退く。敵の四將更々進みて、我が右先鋒に逼り、轉じて左先鋒を犯す。銃丸亂發し、敵兵沮靡す。敵の三將敢死して繼ぎ進み、直に左先鋒を犯して、櫛一層を破る。我が銃乃ち齊しく發す。右先鋒槍を以て横に之を撃つ。成政馳せて信長に白して曰く、敵の中軍の旗幟搖動すと。信長、先鋒をして兵を縦ちて之に乗せしむ。敵軍敗走す。乃ち諸軍に令して、鼓譟して齊しく進ましむ。敵軍大に潰ゆ。走るを逐ひ北ぐるを追ひて、斬首一萬三千級、餘兵を川に擠して、其宗族、將領二十餘人を獲たり。勝頼、屢に身を以て免る。參河の諸城、武田氏に屬する者、皆解きて走る。信長、軍を收めて、敢て窮追せず。德川公來りて軍門に謝して曰く、今日の役、謝する所を知らずと。信長曰く、卿が兵最も力戰して以て此捷を得たるのみと。德川公、因りて勢に乗じて遂に甲斐に入らんと請ふ。前田利家、木下秀吉、亦以て言を爲す。信長可かずして曰く、我が兵疲れたり。吾れ且く力を養ひて再舉

せんと。乃ち振旅して還り、熱田に賽し、其祠宇を修めて、美濃に歸る。

● 夜のひきあけ ● 騒ぎ動く ● 統隊の將 ● 閉口して負色とる ● 大將族のもの ● 徳川公と同様の意見をのよ ● 御禮参

長令先鋒縱兵乗之。敵軍敗走。乃令諸軍鼓譟齊進。敵軍大潰。逐走追北。斬首一萬三千級。擄餘兵於川。獲其宗族將領二十餘人。勝頼匿以身免。參河諸城。屬武田氏者。皆解走。信長攻軍。不致窮追。徳川公來謝。軍門曰。今日之役。不知所謝。信長曰。卿兵最力。戰以得此捷耳。徳川公因請乘勢。遂入甲斐。前田利家。木下秀吉。亦以爲言。信長不可曰。我兵疲矣。吾且養力再舉。乃振旅而還。賽熱田。修其祠宇。歸美濃。

於是令信忠攻岩村城。越前假守前波長俊失政。朝倉景健等。與一向賊作亂。據龍門。虎杖。木理。火燧。水津。河野。諸城。以遙應大坂。

是に於て、信忠をして岩村城を攻めしむ。越前の假守前波長俊、政を失ふ。朝倉景健等、一向賊と亂を作し、龍門・虎杖・木理・火燧・水津・河野の諸城に據りて、以て遙に大坂に應ず。八月、信長・信忠乃ち公族、諸將の兵八萬を統べ、北伐して敦賀に至る。會々大に雨ふる。信長潛に木下秀吉を召して曰く、敵必ず備を設けじ。汝、潛かに舟師を以て河野浦を取り、其不意を撃ちて、遂に龍門を破らば、則ち木理の諸城、攻めずして自ら破れんと。乃ち明智光秀等を以て之を助

月。信長信忠乃統公族諸將兵。凡八萬。北伐至敦賀。會大雨。信長潛召木下秀吉曰。敵必ず不設備。汝潛以舟師取河野浦。擊其不意。遂破龍門。則木理諸城不攻自破矣。乃以明智光秀等助之。夜發

けしめ、夜、敦賀を發す。已にして河野・龍門火起る。木理の諸城、顧みて之を視て、皆守を棄てて潰走す。諸將、邀へ撃ちて大に之を敗る。柴田勝家等鳥羽城を抜きて、加賀に入る。金森長近等、徳山口より入りて、三城を屠る。而して丹波・若狭の將士、兵艦數千艘を以て來り會し、火を沿海に縱つ。信長乃ち進みて木理嶺を踏えて、龍門に至る。景健、賊帥下間和泉等を斬りて、降を乞ふ。許さず。之を誅す。景健の從士三人、刃に伏して之に殉ず。信長、三人の妻孥を恤す。兵を分ちて賊黨を索め、斬獲すること五萬人なり。進みて加賀を略す。加賀・越前十餘日にして定る。

● 四城共に越前國にあり ● 海ぞひの地 ● つまこ

野龍門火起。木理諸城顧視之。皆棄守潰走。諸將邀擊大敗之。柴田勝家等拔鳥羽城。入加賀。金森長近等自徳山口入。屠三城。而丹波若狭將士。以兵艦數千艘來會。縱火沿海。信長乃進。諭木理嶺。至龍門。景健斬賊帥下間和泉等。乞降。弗許。誅之。景健從士三人。伏刃殉之。信長恤三人妻孥。分兵索賊黨。斬獲五萬人。進略加賀。加賀越前十餘日而定。

九月。信長還至北莊。大論戰功。令梁田出羽守。檜屋大聖寺。二城。以鎮中加賀。分越前。三郡。賜前田利家。佐佐成政。及金森原不破。武藤等。以其餘八郡。盡賜柴田勝家。城北。北莊。足羽。使居焉。身自經畫之。因救勝家。曰。越前。北陸之要扼。而當長尾氏之衝。吾選於諸將。

九月、信長、還りて北莊に至り、大に戦功を論じ、梁田出羽をして、檜屋・大聖寺の二城を守りて、以て加賀を鎮せしむ。越前三郡を分ちて、前田利家・佐佐成政及び金森・原・不破・武藤等に賜ひ、其餘八郡を以て、盡く柴田勝家に賜ひ、北莊・足羽に城きて、居らしむ。身自ら之を經畫せしむ。因りて勝家を救めて曰く、越前は、北陸の要扼にして、長尾氏の衝に當る。吾れ諸將より選びて以て汝に命ず。汝其れ之を勉めよ。夫れ國を守るの道は、常に徒に勇武を恃むべからず。常に恩威並び施して、以て民心を服すべしと。乃ち條制を申べて曰く、賦斂を厚くすると母かれ。關市を征すると母れ。士民を侮ると母れ。訟獄を偏にすると母れ。武備を遺るとこと母れ。游田を喜むこと母れ。皇人の邑にして、亂賊の掠むる所と爲る者は、當に印券に據りて還付すべし。國內の間地、我が倉廩に歸する者は、以て功勞の士を待て。當に徒に費すべからず。凡そ我が令する所に於て、不便なる者有らば、輒ち來りて之を争へ。我れ將に改めんとすと。因

りて、不破・佐佐・前田等に命じて、勝家と相檢察して、以て國政を爲さしむ。然して後、師を岐阜に班す。

- 城を築きて
- 肝要なる御へ場所
- 規則の簡條
- 租税を多く取り立つることなかれ
- 關所稅商
- 雜稅を取立つる勿れ
- 裁判を不公平にする勿れ
- 狩などをして遊ぶこと
- 公家
- 所有者なき地
- 穀物倉
- 互に吟味して
- 軍隊

以命汝。汝其勉之。夫守國之道。不當徒恃勇武。當恩威並施。以服民心。乃申條制。曰。毋厚賦斂。毋征關市。毋侮士民。毋偏訟獄。毋遺武備。毋喜游田。皇人之邑。爲亂賊所掠者。當據印券。還付國內間地。歸我倉廩者。以待功勞之士。不當徒費。凡我所令。有不便者。輒來争之。我將改焉。因命不破佐佐前田等。與勝家相檢察。以爲國政。然後班師岐阜。

十月。入朝。廷臣二名來迎。于澤山。詔聽昇殿。超拜右大臣。信長固辭。即任權大納言。兼右近衛大將。信長

十月、入朝す。廷臣二名、來りて澤山に迎ふ。詔して、昇殿を聽し、超えて右大臣に拜せらる。信長固辭す。即ち權大納言に任じ、右近衛大將を兼ねしむ。信長弓部百人を從へて、入りて拜謝す。因りて宴を御前に賜ふ。東西の諸國、交々使をして之れを賀せしむ。大坂の僧徒降を乞ひ、珍玩を獻す。之を許す。會々美濃の使者至り、武田勝頼來りて岩村を援ふと告ぐ。信長馳せ還りて之に赴く。是

從弓部百人入拜謝。因賜宴於御前。東西諸國。交使賀之。大坂僧徒乞降。獻珍玩許之。會美濃使者至。告武田勝頼來授岩村。信長聽還赴之。先是岩村城將出戰。信忠擊卻之。城將遂出降。而信長至。礮城將以徇。以河尻鎮吉爲岩村城主。勝頼聞之引去。朝廷嘉信忠功。擬以高爵。信長固辭。乃除秋田城介。信長因奏請曰。臣將校爲臣效力。使臣奏功。今臣父子獨辱顯爵。而不及此輩。臣意竊愧之。

より先、岩村の城將出で戦ふ。信忠撃ちて之を卻く。城將遂に出で降る。而して信長至り、城將を礮して以て徇へ、河尻鎮吉を以て岩村の城主と爲す。勝頼之を聞きて引き去る。朝廷、信忠の功を嘉し、擬するに高爵を以てせんとす。信長固辭す。乃ち秋田城介に除せらる。信長因りて奏請して曰く、臣の將校、臣の爲に力を効し、臣をして功を奏せしむ。今や臣が父子、獨り顯爵を辱くして、此輩に及はず、臣、意竊かに之を愧づと。

● 天子の御前にて酒宴を開きて宴す ● 珍らしき品々 ● はりつけ

於是以木下秀吉除筑前守。明智光秀

是に於て、木下秀吉を以て筑前守に除し、明智光秀を日向守に除し、塙直正を備中守に除し、河尻鎮吉を肥前守に除す。是れより先、西海の豪姓多く絶えて

除日向守。塙直正除備中守。河尻鎮吉除肥前守。先是西海豪姓多絶而無嗣。信長欲使諸功臣繼之。乃命各冒其姓。明智光秀冒惟任氏。塙直正冒原田氏。梁田出羽冒別喜氏。丹羽長秀冒惟住氏。秀吉濶丹羽柴田氏。威名請稱羽柴氏。信長謂信忠及諸將曰。我他日得混一海内。則使汝輩實稱其名也。當是時。織田氏之國。橫塞天下。衢路以東國。鷹馬贈遺西國。以西國虎豹皮贈遺東國。得贈遺者。各以爲信長已略有其地也。

副無し。信長、諸功臣をして之を繼がしめんと欲す。乃ち命じて各々其姓を冒せしむ。明智光秀は惟任氏を冒し、塙直正は原田氏を冒し、梁田出羽は別喜氏を冒し、丹羽長秀は惟住氏を冒す。秀吉は丹羽・柴田氏の威名を羨み、請ひて羽柴氏と稱す。信長、信忠及び諸將に謂ひて曰く、我れ、他日海内を混一するを得ば、則ち汝が輩をして、實に其名を稱せしめんと。是の時に當りて、織田氏の國、天下の衢路に横塞す。東國の鷹馬を以て、西國に贈遺し、西國の虎豹の皮を以て、東國に贈遺す。贈遺を得る者、各々以爲へらく、信長已に其地を略有すと。

● 臺版 ● 諸臺の姓を繼ぎて名をらしむ ● 天下を握ることを得ば ● 通行の道 ● 平定して所有す

四年正月。信長欲徙治于

四年正月、信長徙りて近江の安土山に治して以て長尾氏に備へんと欲す。惟住長

近江安土山。以備長尾氏。惟住長秀董。役課畿内及尾張美濃若狹越前十一州之卒。起天主閣。閣凡七層。高七丈。布邸第于山下。令信忠居岐阜。以備武田氏。是歲。信忠。從四位下。尋進上。四月。信長入朝。詔。使修二條城。趾以爲館焉。數年而成。不致自館。請獻之。皇太子居焉。

● 普請を監何す ● 城上の高き間、その名義につてきは説あり ● 城あと

秀、役を董す。畿内及び尾張・美濃・若狹・越前十一州の卒に課して、天主閣を起す。閣凡て七層、高さ七丈、邸第を山下に布く。信忠をして岐阜に居りて、以て武田氏に備へしむ。是の歲、信忠、從四位下に敘せられ、尋ぎて上に進めらる。四月、信長入朝す。詔して、二條城趾を修めて以て館と爲さしむ。數年にして成る。敢て自ら館せず。請ひて之を皇太子に獻じて居らしむ。

時大坂復叛。與武田長尾毛利氏相結。信長遣細川藤孝荒木村重。惟任光秀。

時に大坂復た叛し、武田・長尾・毛利氏と相結ぶ。信長、細川藤孝・荒木村重・惟任光秀・原田直正・筒井順慶を遣し、兵三萬に將として赴き討たしむ。佐久間信盛等をして天王寺の壘を守らしむ。賊、木津・難波に壘し、舟船往來す。信長、諸將を戒めて曰く、必ず木津を取れと。直正、降將三好康長、及び根來寺の兵を率

原田直正。筒井順慶。將兵三萬。赴討。令佐久間信盛等守天王寺。壘賊壘于木津。難波。舟船往來。信長戒諸將曰。必取木津。敗走。直正戰死之。五月。賊遂以萬餘人圍天王寺。信盛與光秀。順慶等固守拒之。梶川彌三郎。從在城内。數出力戰。時溝壁未成。乃刺殺牛馬。張其皮。代壁。以扞矢石。

るて、之を攻む。難波の賊、銃手を以て之を田中に要す。先鋒敗れ走る。直正戦ひて之に死す。五月、賊遂に萬餘人を以て天王寺を圍む。信盛、光秀・順慶等と、固守して之を拒ぐ。梶川彌三郎從ひて城内に在り。數々出でて力戰す。時に溝壁未だ成らず。乃ち牛馬を刺し殺して、其皮を張りて壁に代へて、以て矢石を打ぐ。

● 鐵砲方 ● 固く守る ● 弓鐵砲を打ぐ

信長急を聞く。方に浴す。浴衣にて馬に上り、百餘騎と赴き援ふ。若江に至り、兵聚る者三千なり。分ちて三隊と爲し、先鋒を村重に命ず。村重辭す。信長曰く、然らば則ち乃公、之を爲さんのみと。乃ち自ら輕卒に雜り、指麾して進む。敵の矢丸、雨の如し。信長足を傷く。怒りて益々進む。城兵其旗を望み見て大に喜び、門を開きて出で戦ふ。夾み撃ちて賊兵を敗る。賊兵猶ほ陣を布きて退か

然則乃公爲之耳。乃白雜進。敵矢丸如雨。信長傷足。怒而益進。城兵望見其旗。大喜。開門出戰。夾擊破賊。賊兵猶布陣不退。信長欲再戰。諸將諫曰。衆寡不可敵。俟我兵盡來。然後戰。信長叱曰。機可失乎。合兵爲二隊。復擊大坂之。追北至大坂城門。斬首二千餘級。乃整軍以備敵。返襲築壘十所。以環大坂。凱旋若江。六月。歸安土。休兵二十日。就役。七月。入朝。詔進正三位。拜內大臣。固辭不許。十二月。獵尾張參河。

す。信長、再び戦はんと欲す。諸將諫めて曰く、衆寡敵すべからず。我が兵盡く來るを俟ち、然して後戦はんと。信長、叱して曰く、機失ふべけんやと。兵を合せて二隊と爲し、復た撃ちて大に之を破り、北ぐるを追ひて大坂の城門に至る。斬首二千餘級なり。乃ち軍を整へて以て敵の返襲に備へ、壘を十所に築きて、以て大坂を環し、若江に凱旋す。六月、安土に歸り、兵を休むること二十日にして、役に就かしむ。七月、天主閣成る。十一月、入朝す。詔して、正三位に進め、内大臣に拜せらる。固辭す。許さず。十二月、尾張・參河に獵す。

● 吾 ● 身分見しき兵 ● 好機會をはづしてなるものか

五年正月。入

五年正月、入朝す。二月、紀伊の賊雜賀孫一亂を作して、大坂に應ず。信長、

朝。二月。紀伊賊雜賀孫一作亂。應大坂。信長招降賊將雜賀三藏根來杉房。以爲二鄉導。率二諸軍。南伐。自二道入。拔二貝塚及中野。三月。孫一降。請攻二大坂。自效。許之。置三戌于二左野。而還。四月。能登越中。賊起。長尾氏不能制。信長聞之。招二降能登人長重連等。乘機略地。七月。長尾謙信來攻。重連。重連弟連龍來告急。乃遣二羽柴秀吉等。助二柴田勝家。赴救。秀吉不告而還。信長譴不許見。

賊將雜賀三藏・根來杉房を招降して、以て郷導と爲し、諸軍を率ゐて南伐し、二道より入りて、貝塚及び中野を抜く。三月、孫一降り、大坂を攻めて自ら效さんと請ふ。之を許し、戌を左野に置きて還る。四月、能登・越中の賊起る。長尾氏制すること能はず。信長之を聞きて、能登の人長重連等を招き降して、機に乗じて地を略す。七月、長尾謙信來りて重連を攻む。重連の弟連龍、來りて急を告ぐ。乃ち羽柴秀吉等を遣し、柴田勝家を助けて赴き救はしむ。秀吉、告げずして還る。信長、譴めて見るを許さず。

● 和泉國に在リ ● 同上 ● 無斷にて還る

八月。松永久秀叛。應大坂。初久秀之降。

八月、松永久秀叛きて大坂に應ず。初め久秀の降るや、信長許さずして曰く、彼れ智勇餘有り。而して奸佞比なし。飢うれば則ち伏し、飽けば則ち起つ。彼

也。信長不許。曰。彼智勇有餘。而奸佞無比。飢則伏。飽則起。彼已亂。足利氏亦欲亂我家乎。佐久間信盛曰。彼事暗主。乃能如此。爾得三公。駕馭之。何能爲也。宜且撫納之。以示天下。廣可上也。從之。德川公嘗謂信長。見一老人侍側。問其爲誰。信長笑曰。此松永彈正者

れ已に足利氏を亂す。亦我が家を亂さんと欲するかと。佐久間信盛曰く、彼れ暗主に事ふ。乃ち能く此の如きのみ。主公之を駕馭するを得ば、何をか能く爲さん。宜しく且く之を撫納して、以て天下に廣きを示して可なるべしと。之に従ふ。德川公、嘗て信長に諷す。一老人の側に侍するを見て、其の誰たるかを問ふ。信長笑ひて曰く、此れ松永彈正といふ者なり、此夫、人の能くし難き所を爲すもの三つあり。公方を弑するは一なり。三好氏に叛くは二なり。大佛殿を燔くは三なりと。久秀、俯伏流汗、意自ら安んぜず。久秀、茶籠有り。平蛛と名づく。信長之を得んと欲す。久秀斬しみて獻せず。是に於て、諸將と俱に大坂を成り、遂に叛き去りて、志貴城に據る。信長、侍史楠友閑を遣して、往きて其意を問はしむ。久秀答へず。

● 其の勇弱き中は固ひ強くなれば強く ● 暗愚の主君に仕ふ、そこで賢者の行爲をなしたるのみ ● つかひこなす ● 度量の廣きこと ● うつむきて汗を流して恥ぢ入り不安心に堪へられず ● 茶湯に用よる蓋 ● 其の叛きたる心中を問ひ正さしむ

九月、乃令信忠將二萬騎討之。細川藤孝惟任光秀。筒井順慶等。別攻其屬城。片岡藤孝二子。忠興與正。猶幼。先登獲首級。諸軍從之。遂拔之。與信忠合。圍志貴。久秀潛遣使。與雜賀大坂。約期夾攻。使者誤入。佐久間信盛營。

九月、乃ち信忠をして、數萬騎に將として之を討たしむ。細川藤孝・惟任光秀・筒井順慶等、別に其屬城片岡を攻む。藤孝の二子忠興・興正猶ほ幼し。先登して首級を獲たり。諸軍之に従ひて、遂に之を拔く。信忠と合して、志貴を圍む。久秀潛かに使を遣して、雜賀・大坂と、期を約して夾み攻めんとす。使者誤りて佐久間信盛の營に入る。信盛捕へて之を獻す。信忠喜びて曰く、是れ天授なりと。乃ち死士二百をして、雜賀の援兵と偽らしめて、夜、城門に至らしむ。門開きて入る。二城に及ぶ比、信忠、衆を鼓して齊しく登る。二百人呼謀して之に應ず。信忠遂に入りて、久秀を天主閣に燈む。久秀火を縦ちて、愛する所の茶籠を抱きて、自ら燒殺す。其子久通以下、皆捕へ誅せらる。

● さきがけして ● 天の賜物 ● 逆討む

信盛捕獻之。信忠喜曰。是天授也。乃令死士二百。僞賀援兵。夜至城門。門開而入。比及二城。信忠鼓衆齊登。二百人呼譟。應之。信忠遂入。暨久秀于天主閣。久秀縱火抱所愛茶。自燒殺其子。久通以下皆後誅。

信忠入朝。廷臣傳詔。敘從三位。任左近衛中將。聽昇殿。信忠稽首曰。天恩隆渥。無物可報。雖然。臣不敢輒受。請告之。信長。然後奉受。強之不肯。使者還報。天子動容嘉賞。聽其所言。信長答書曰。久秀老猾。汝一舉斃之。汝功多。

信忠入朝す。廷臣、詔を傳へて、從三位を敘し、左近衛中將に任じ、昇殿を聽さる。信忠稽首して曰く、天恩隆渥、物の比すべきなし。然りと雖も、臣敢て輒く受けじ。請ふ、之を信長に告げて、然る後に奉受せんと。之を強ふ。肯せず、使者還り報す。天子、容を動して嘉賞し、其の言ふ所を聽す。信長答書して曰く、久秀は老猾なり。汝、一舉にして之を斃す。汝の功多し。宜しく詔を奉すべしと。信忠、乃ち入朝して拜謝す。安土に觀して岐阜に歸る。是の役や、筒井順慶、最も功有り。信長、之に大和を賜ふ。十一月、信長、入朝す。從二位に進め、右大臣に轉せらる。

- 陛下の思召のあつきことは此上なし ● 御受をせん ● いたく感心遊ばされて恩容を動し、よみし給ひ
- 年老い物懼れて願賢し ● 御禮體伺をして

矣。宜奉詔也。信忠乃入朝拜謝。觀安土而歸。岐阜。是役也。筒井順慶最有功。信長賜之。大和。十一月。信長入朝。進從二位。轉右大臣。

信長略定畿内。獨大坂未服。毛利氏前納足利義昭。終與我絕。又援大坂。爲餓糧。食備前浮田氏。屬毛利氏。東窺播磨。播磨人赤松義祐。別所長治。小寺政職。黑田宗圓。皆求援於我。宗圓子孝高爲使者。因羽柴秀吉以通信。

信長、畿内を略定せしが、獨り大坂未だ服せず。毛利氏、前に足利義昭を納れて、終に我と絶つ。又大坂を援ひて、爲に糧食を餓る。備前の浮田氏、毛利氏に屬して、東、播磨を窺ふ。播磨の人赤松義祐、別所長治、小寺政職、黒田宗圓、皆援を我に求む。宗圓の子孝高、使者と爲りて、羽柴秀吉に因りて以て信長に通ず。信長、秀吉の北陸に敗らるゝを諷めたり。是に於て、西征大將を命じて、山陽、山陰を略して、以て其罪を償はしむ。秀吉、感奮して、播磨に戦ひて功有り。十二月、信長、參河に獵す。菅谷長頼をして安土に留守せしむ。名刀、寶器を以て之に授け戒めて曰く、秀吉來らば則ち之を與へよと。既に歸りて秀吉至る。六年正月、信忠及び秀吉等十二人を茗室に饗し、親ら之に餽る。終に率ゐて以て天主閣に登りて曰く、此城を就す所以は、卿等の力なりと。又秀吉を遣して西征せしむ。四月、

長。信長。體。秀。吉。之。敗。爲。北。陸。也。於。是。命。四。征。大。將。使。略。山。陽。山。陰。以。償。其。罪。秀。吉。感。奮。戰。播。磨。一。有。功。十。二。月。信。長。獵。參。河。令。菅。谷。長。賴。留。守。安。土。以。名。刀。寶。器。授。之。戒。曰。秀。吉。來。則。與。之。既。歸。而。秀。吉。至。六。年。正。月。襲。信。忠。及。秀。吉。等。十。二。人。于。室。室。親。餽。之。終。率。以。登。天。主。關。曰。所。以。就。此。城。者。卿。等。力。也。又。遣。秀。吉。西。征。四。月。辭。兩。職。

兩職を辭す。

● 兵糧 ● 越後置設して ● 茶室

時長尾謙信已死。信長乃令北陸降將齋藤氏神保氏。與飛騨國主姉小路氏。并力以定中越。中遣惟任光秀。略丹波。細川藤孝。略丹後。五月。毛利輝元發大兵。

時に長尾謙信已に死す。信長乃ち北陸の降將齋藤氏・神保氏をして、飛騨の國主姉小路氏と、力を并せて以て越中を定めしむ。惟任光秀を遣して丹波を略し、細川藤孝に丹後を略せしむ。五月、毛利輝元大兵を發して、熊川に至る。秀吉急を告ぐ。信長自ら赴き援けんと欲す。諸將之を止めて曰く、臣等先づ往き、其地形の險易を詳かにして、然る後に駕を迎へんと。乃ち荒木村重をして赴き援はしむ。又信忠・信雄・信孝・信包を遣して、諸將を率ゐて之に繼がしむ。六月、京師大水あり、信長入朝す。秀吉來り謁して、具に軍狀を白す。信長之に命じて曰く、敵、兵多

至熊川。秀吉告急。信長欲自赴援。諸將止之曰。臣等先往。詳其地形。險易。然後迎駕。乃令荒木村重赴援。又遣信忠。信雄。信孝。信包。半諸將繼之。六月。京師大水。信長入朝。秀吉來謁。具白軍狀。信長命之曰。敵兵多。食不足。我軍與之曠日持久。特疲力耳。不若引兵。按定播磨。待時進取。秀吉乃去。傳令於諸將。信忠還兵。攻下神吉。志方諸城。令秀吉守之。以攻三木城。三木與大坂。海路相通。信長乃命九鬼嘉隆。以大艦數十艘。自伊勢。廻紀伊。擊破雜賀賊船。奪三十餘艘。以傳界浦。九月。信長入朝。南巡大坂。置子阿部野。十月。召嘉隆。習水戰。觀之。自是三木大坂。援路遂絕。

くして食足る。我が軍、之と日を曠しくして久しきを持せば、特に力を疲らせんのみ。兵を引きて播磨を按定し、時を待ちて進み取るに若かずと。秀吉乃ち去りて、令を諸將に傳ふ。信忠兵を還して、攻めて神吉・志方の諸城を下し、秀吉をして之を守らしめ、以て三木城を攻む。三木、大坂と海路相通す。信長乃ち九鬼嘉隆に命じて、大艦數十艘を以て、伊勢より紀伊に廻り、撃ちて雜賀の賊船を破り、三十餘艘を奪ひ、以て界浦に傳らしむ。九月、信長入朝す。南大坂に巡り、阿部野に獵す。十月、嘉隆を召して、水戰を習はせて之を観る。是より、三木・大坂の援路遂に絶ゆ。

● 雜賀 ● 軍のありさま ● ちき一定む ● 二城共に播磨國にあり ● 同上

荒木氏士人有下驥於大坂者。監吏以告曰。村重與大坂不信。曰。村重不信。曰。吾擢以爲攝津守。護何苦而反。毋乃詭傳邪。明智光秀嫉村重以新進。聲績出已。右上也。力謀棄之。信長使三人詰村重。村重驚。傳欲面陳謝。之家臣皆諫。不聽。而往。光秀聽書。止之。

荒木氏の士人、大坂に驥する者有り。監吏以て告げて曰く、村重、大坂と私有り。信長信ぜず。曰く、村重は擢る者なり。吾れ擢んで以て攝津の守護と爲す。何を苦しみて反せん。乃ち詭傳なる毋からんやと。明智光秀、村重の新進を以て聲績己の右に出づるを嫉むや、力めて之を媒棄す。信長、人をして村重を詰らしむ。村重驚愕して、面のあたり之を陳謝せんと欲す。家臣皆諫む。聽かずして往く。光秀、書を馳せて、之を途に止めて曰く、主公の怒犯すべからず。足下何ぞ自ら虎口に投ずるを爲すと。村重乃ち還り、伊丹城に據りて叛し、毛利氏に應じ三木城と夾みて秀吉を攻めんと欲す。十一月、信長自ら將として村重を討つ。信忠以下皆従ふ。郡山に至る。高槻の城主高山友祥・茨木の城主中川清秀、皆村重に屬す。信長、友祥の天主教を崇ふと聞かや、教主伴天連といふ者を召して友祥に諭さしむ。友祥乃ち降る。

● 米を賣出す ● 身分賤しき者なり ● まちがひの言類し ● 新參者 ● 名譽と功績 ● 譴を構へて ● 實を隠す ● 信長の怒甚だしくして近寄る可からず ● 自ら危險の場所に行かんとする者 ● 耶教傳者の名

於途。曰。主公怒弗可犯。足下何自投虎口爲。村重乃還。據伊丹城。應毛利氏。欲與三木城夾攻。秀吉十一月。信長自將討村重。信忠以下皆從。至郡山。高槻城主高山友祥。茨木城主中川清秀皆屬村重。信長聞友祥崇天主教也。召教主伴天連者。使諭友祥。友祥乃降。

信長自脱衣。衣之。賜芥川郡。清秀聞之。亦降。進至昆陽。屠兵庫。秀吉來說。村重改圖。村重弗聽。十二月。圍伊丹。不克。信長恐其損兵。築長圍。令池田信輝。瀧川一益。蒲生氏郷等守之。而還。七年二月。

信長自ら衣を脱して之に衣せ、芥川郡を賜ふ。清秀之を聞きて、亦降る。進みて昆陽に至り、兵庫を屠る。秀吉來りて、村重に圖を改めんことを説く。村重聽かず。十二月、伊丹を圍む。克たず、信長、其の兵を損せんを恐れ、長圍を築きて、池田信輝・瀧川一益・蒲生氏郷等をして之を守らしめて還る。七年二月、入朝す。三月、信忠と俱に伊丹に如き、諸將を慰勞して、箕尾に遊ぶ。八月、大に三木・伊丹・天王寺屯戌の將士に責ふ。九月、信長、復た伊丹に如く。村重、族人を留めて城を守らせて夜逃る。華隈・尼崎に如き、援を毛利氏に求む。毛利氏辭するに海路梗塞するを以てす。十月、一益、密に城兵中西某を招きて、之を諭して曰く、而が主は怯懦なり。若が輩を棄てて去る。若、怯主の爲に死を致す